レクリエーション研究

第7号

☆ 心理的特性と余暇活動に関する調査研究
ー職業訓練校生を事例としてー

☆ レクリエーション参与の社会的要件に関する研究

☆ レクリエーションの企画と運営に関する研究
ーあそこどもジャンボリーからー

☆ ソビエト連邦における「自由時間」と
フィジカル・レクリエーション

☆ インディアカ試合時の心拍数の変動に関する研究

☆ 全国キャンプ場の実態調査

◇

○ レクリエーション学会会則

日本レクリエーション学会

昭和55年3月

目　　次

塚　本　真　也………心理的特性と余暇活動に関する調査研究
小　田　南州生　　職業訓練校生を事例として　……………………………………… 3
松　原　五　一
寺　光　鉄　雄
田　口　節　芳

藤　原　健　固………レクリエーション参与の社会的要件に関する研究………………12

秋　吉　嘉　範………レクリエーションの企画と運営に関する研究
　　　　　　　　　　ーあそこどもジャンボリーからー…………………………………25

寺　島　善　一………ソビエト連邦における「自由時間」と
　　　　　　　　　　　フィジカル・レクリエーション………………………………………51

和　田　　　實………インディアカ試合時の心拍数の変動に関する研究………………66
高　倉　正　樹

前　野　淳一郎……… 全国キャンプ場の実態調査 …………………………………………72

欧文レジメ　……………………………………………………………………………………80

心理的特性と余暇活動に関する調査研究

ー職業訓練校性を事例としてー

職業訓練大学校　塚　本　真　也
職業訓練大学校　小　田　南州生
職業訓練大学校　松　原　五　一
勤労青少年指導者大学講座　寺　光　鉄　雄
近　畿　大　学　田　口　節　芳

I　研究目的

多様化がいっそうすすむ余暇社会において、余暇の過し方を一義的にレクリエーションに求めることはできないが、少くとも余暇の善用という教育的観点に立ってみるならば、レクリエーションはすぐれた価値をもつものと考えられる。とりわけ学校教育過程にある児童生徒や学生においては、余暇教育の必要性が指摘[1]されている今日、レクリエーションの担う役割は大きくまた重要である。

レクリェーション活動は、「いつでも、どこでも、だれでも」と唱えられた標語[2]のもとにひろく社会に浸透しているが、いまひとつ大切なことは「その気になる」ことである。その気になる、とは平易なことばであるが、レクリェーション活動は主体性のある自発的で独創的な活動の中に自己を積極的に表現してゆくことが求められる。このような心構えがあってはじめて諸々の活動もレクリェーションと呼ばれるであろう。すなわち、必要不可欠な心理的要因として「自主性」がレクリェーション活動にはなければならない。

本研究の目的は、余暇の過し方に自主性の水準によってどのような差異が生じているのかを明らかにするところにある。

II　研究方法

1.　調査および検査方法

研究目的に示した視点から質問紙法による余暇活動調査と自主性の水準を定める心理検査を同一時に実施した。調査の基礎的な枠組みは、1）対象者の性別、年令、学歴などの基本的属性について、2）余暇活動の実際について、3）生活実態や意識についての3領域に決定した。余暇活動の実際では、主として余暇時間量と活動内容を柱に構成したが、余暇活動は比較的広義に解釈してなるべく数多くの活動を網羅した。一方、自主性の心理検査は既存の検査法を検討した結果、主観的側面における自主性の概念構造を明らかにした上で質問紙法によって作成された石川らの「自主性診断検査」[3]が最適との判断にたっした。この検査は、10の下位検査から組み立てられており、それぞれは自発性、主体性、独立性、自己主張、判断力、独創性、自律性、自己統制、責任性、役割認知である。しかし、本研究ではこれら10この下位特性からさらにレクリェーション活動にとって基本的要件と考えられる自発性、主体性、自己主張、独創性、自律性の5特性を選定した。また、この検査は元来小学校5年生から中学校3年生までを適用範囲としているが、検査内容を具体的な項目にわたって吟味した結果、検査問題の場面構成が日常の生活習慣や学習態度、人間関係な

どわかりやすく多面的に配慮されており、後述する検査対象の職業訓練校生に適用しても逸脱する危険性は低いとみて採択にふみきった。

2. 調査および検査対象

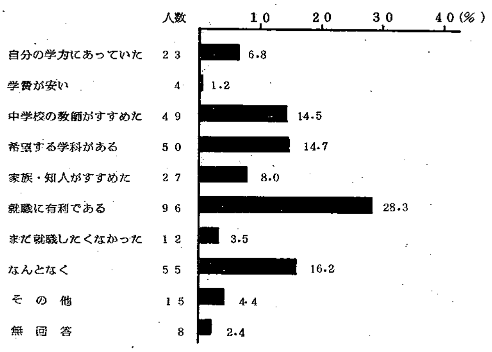
全国に配置されている総合高等職業訓練校（８８校）から副次抽出法にならって６校（東北１、首都圏１、北陸１、近畿１、中国１、九州１）を選び、さらにそこから中学校卒の養成訓練課程の男子、各校６０名計３６０名を無作為に抽出した。有効標本回収率は９4.２％の339であった。尚、職業訓練校とは昭和３３年制定の職業訓練法に基き設立されたもので、総合高等職業訓練校をはじめ専修職業訓練校、身体障害者職業訓練校などがあり、現在全国に４００余校を数えるにいたっている。そして、そこに学ぶものは養成訓練課程に限っても２万人にのぼる規模である。

3. 調査時期

調査期間は、昭和５３年11月14日から23日までの１０日間であった。

２年課程にもかかわらず分布が少し広がったのは、高校中退者が含まれているためであるが、全体の９2.９％は１５才から１７才である。従って学歴はみな中学校卒となる。高校進学率が９０％を越す今日的状況[5]において、訓練校へ進路を決めたその動機は、「就職に有利である（２8.３％）」、「希望する学科がある（１4.7％）」、「自分の学力に合っていた（6.８％）」の回答割合からみれば積極的肯定的と受け止めることができる（図１）。

図１　入校動機



Ⅲ　調査および検査結果

1. 調査対象の一般的特性について

対象者が中学校卒の養成訓練課程の男子に限定されているため、性別は勿論男であり、年令分布は１５才から２０才となった（表１）。

表１　年令分布

年　令	人　数	％
15才	43	12.7
16才	158	46.6
17才	114	33.6
18才	9	2.7
19才	8	2.4
20才	2	0.6
無回答	5	1.5
計	339	100.0

訓練校生の１日の生活は、同世代の高校生と近似していて朝９時始業、夕方３時３０分終業の教育訓練が組まれている。授業科目には専門の学科実技の他に数学もあれば体育もある。そして、夏休みもあれば冬休みもある。住居は親元の自宅がほとんどであったが、他には寮（１4.7％）、親戚の家（0.６％）などがわずかにみられた。[6]家族構成は、平均5.１人で全国平均の3.４人を上回る大きさであったが、父親あるいは母親の欠損率は各々１3.６％、6.２％であり、同世代のそれが9.３％、1.７％[7]であることから比較するといくらか高い欠損率であった。訓練校への通学については、１時間以上を要する遠隔地通学が多いためか、方法も電車（42.2

%）、オートバイ（7.1%）など乗り物を利用するものが目立った（図2、表2）。

図 2　　通 学 時 間

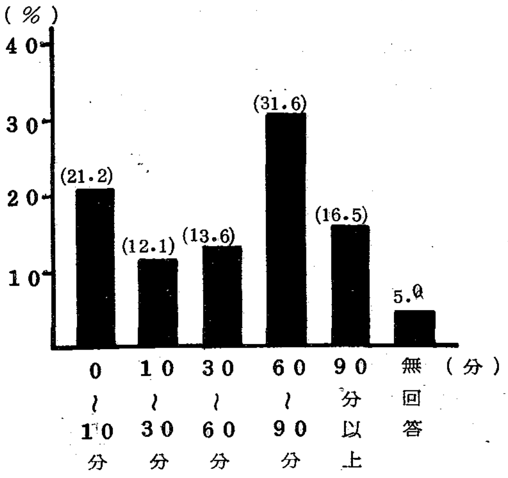
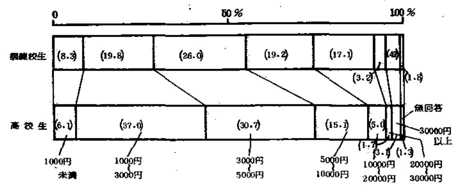


表2　交通手段

交通手段	人数	%
徒　　歩	63	18.6
自 転 車	70	20.6
バ イ ク	24	7.1
バ　　ス	23	6.8
電　　車	143	42.2
そ の 他	12	3.5
無 回 答	4	1.2
計	339	100.0

1ヶ月の小遣いは、5,000円を境に全体が二分されたが、割合からすれば3,000円から5,000円が最も多かった（図3）。

図 3　1ケ月のこずかい



※注　高校生の資料は昭和52年度「青少年白書」から引用。

この幅が最も多いのは高校生⑧も同じであるが訓練校生で1万円以上と答えたものが25.0%にものぼることから相対的には額面は大きい傾向にあるといえよう。表3は、今一番欲しいと思っているものを上位から序列をつけて並べた表である。

表3　いま一番欲しいもの

品　目	人数	%
オートバイ	92	27.1
乗 用 車	64	18.9
ステレオ	64	18.9
カメラ・8ミリ	24	7.1
カラーテレビ	8	2.4
楽　　器	8	2.4
ラジオカセット	7	2.1
テープデッキ	5	1.5
スキー用具	4	1.2
自 転 車	3	0.9
電　　卓	2	0.6
テープレコーダー	1	0.3
扇 風 機	1	0.3
ヘヤードライヤー	1	0.3
和洋ダンス	1	0.3
テニス用具	0	0.0
冷 蔵 庫	0	0.0
ラ ジ オ	0	0.0
白黒テレビ	0	0.0
そ の 他	24	7.1
無 回 答	30	8.8
計	339	100.0

1位のオートバイ（27.1%）は勿論のこと、ステレオなど上位を占めた希望品目は高額商品だが、この希望は同世代の高校生男子⑨にも当てはまり必ずしも訓練校生特有ではないようである。

日ごろの生活全般について、その満足感の度合をたずねた結果は図4にみられるとおりであるが、「どちらともいえない」という中庸的な回答が目立ち、割合も半数の48.7%を占めた。「大いに満足」もしくは「まあ満足」と満足感を表明したものは¼強の26.9%、これに対し「不満」、「どちらかといえば不満」が同じよ

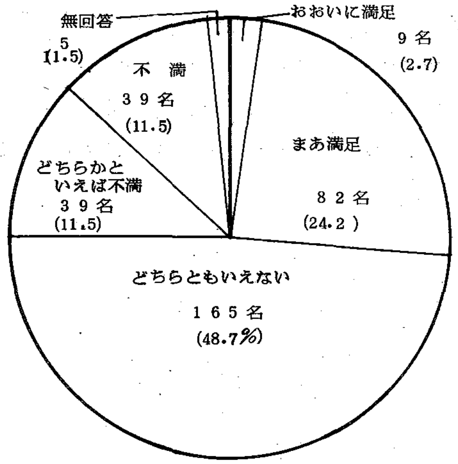


図4　生活満足度

うに¼弱の23.0％となった。不満の主な所在は、家庭と学校に分けてみると、家庭に不満(22.5％）と家の暮しむきが不満（10.0％)、学校がおもしろくない（8.8％）と勉強がおもしろくない（3.8％）となりどちらかといえば、学校より家庭環境に起因する割合が大きかった。しかし、不満の最も大きな理由は、「自由時間の不足」であり、割合も群を抜いて41.3％であった（表4）。一方、現在抱えている悩みや心配ごとについては、「特になし」が半数に近かった（表5）。

表4　不満の所在

理　由	人数	％
専門の勉強	3	3.8
自分の健康	1	1.4
家の暮しむき	8	10.0
自由時間	33	41.3
家　庭	18	22.5
訓練校	7	8.8
その他	10	12.5
無回答	0	0.0
計	80	100.0

表5　現在の悩み

悩みごと	人数	％
特に悩みがない	168	49.6
学校の成績	20	5.9
自分の性格	24	7.1
進路の決定	42	12.4
家庭・家族	9	2.7
異性との交際	38	11.2
友人との交際	20	5.9
その他	9	2.7
無回答	9	2.7
計	339	100.0

この割合は、高校生と比べてみれば、置かれている立場にいくらかの差異はあるものの大枠ではどちらも中等教育（訓練）のシステムの一環にあり、高校生が11.0％[10]であったことを考慮すると大きな生活意識の隔りがあるといわねばならない。特になしを除いた次いで多い割合に「進路の決定」が入ったが、逆に少いのが「家庭、家族」であった。しかしながら、前述の生活満足感で不満と答えた理由が家庭環境に所在する割合が相対的に大きかった結果を考慮すると、悩みごとで示された家庭、家族の割合2.7％は小さい数値である。

2. 自主性診断検査の結果について

下位検査の粗点およびその合計である総点の平均と標本標準偏差を表6に示した。

表6　総点および下位得点の平均と標準偏差

組別＼下位検査	総点	自発性	主体性	自己主張	独創性	自律性
全体 N=339	67.5 17.86	13.5 4.22	14.6 4.67	11.8 4.29	14.5 4.72	13.0 4.72
自主性の高い組 N=110	86.7 7.71	17.0 2.98	18.7 2.83	15.2 3.11	18.6 2.42	17.2 3.59
自主性が中位の組 N=131	66.9 5.13	13.4 2.85	14.7 3.16	11.5 3.17	14.6 3.22	12.7 3.05
自主性の低い組 N=98	46.6 12.23	9.8 3.68	9.9 3.53	8.3 3.71	9.8 3.96	8.8 3.65

注）総点のレンジは、0－120、下位得点は、0－24である。

粗点は、年令による誤差を消去するためにパーセンタイル値に換算する方法が本来ならばとられるが、ここでは適用できないためにそのままの数値を使った。各レンジは０～２４点である。総点も従ってこの場合０～１２０点となる。図５は総点のヒストグラムであるが、比較的正規分布に近い分布を描いていると考えられる。また、訓練校生の粗点が検査適用範囲の制限をうけて、小中学生の延長線上にのってくるとは必ずしもいえないが、参考までに作成したのが図６の学年別平均値と標準偏差である。当検査の

図 5　総点のヒストグラム

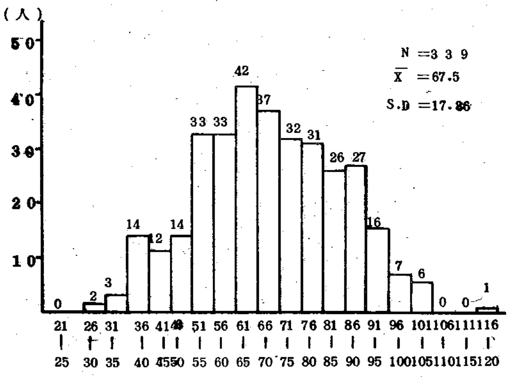
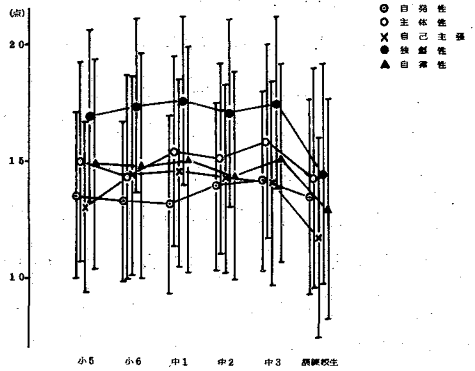


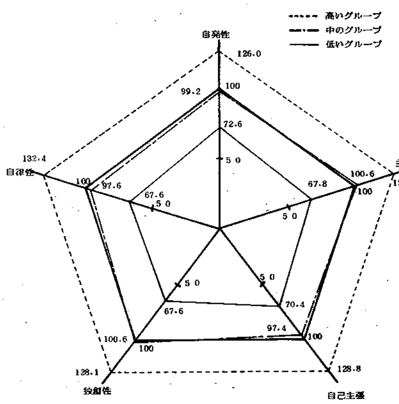
図 6　下位検査の学年別平均と標準偏差



標準化の資料[11]によれば、総点の平均は加令とともにわずかながらも上昇してゆくことを認めているが、下位得点については一様の傾向を認めていない。しかしながら、図6にみることができるように、少くとも訓練校生の粗点はどの下位特性でも中学生を下回っているのは明瞭である。これは、当然として総点でも同じことになり、小学校５年生から中学校３年生までが、順に、７３.７、７４.７、７６.１、７５.２、７７.１と続くのに対して、訓練校生は６７.４と低い水準であった。

総点の平均と標準偏差から全体を３区分してグループ化を試みた。まず、（平均＋½標準偏差）以上を自主性の高いグループ、（平均－½標準偏差）以下を自主性の低いグループ、そしてその中間を中のグループとした（表６）。配分比は、高中低で（８４：１００：７５）になった。それぞれのグループごとに下位得点平均値を平均百分率に換えて五角形ペンタゴナルに線入れしたのが図７であるが、下位特性に各グループの偏りはないとみてよいであろう。

図7　自主性の水準別グループによる下位特性の平均百分率



検査の分析結果から自主性の水準を区分したグループ別に、余暇活動、ひいてはレクリェーション活動の程度差を明らかにしたのが第４章

の考察である。

3. 余暇活動について

余暇時間の過し方を質的量的に把握する手だてとなるように、平日、休日、さらには長期休暇に分けて活動内容や余暇時間量、活動仲間をたずねた。

余暇時間量は、平日では3時間から5時間が最も多く、上限を7時間まで広げると5 7.8％と過半数がその幅に集中した。他方、休日になると9時間以上が5 9.3％を占めた（表7）。

表7 平日および休日の余暇時間

型＼時間量		1時間未満	1～3時間未満	3～5時間未満	5～7時間未満	7～9時間未満	9～11時間未満	11時間以上	無回答	計
平日	人数	1 5	6 0	1 0 0	9 6	3 4	9	5	1 2	3 3 9
	%	4.4	20.1	29.5	28.3	10.0	2.7	1.5	3.5	100.0
休日	人数	3	7	2 2	3 3	6 0	6 7	1 3 4	1 3	3 3 9
	%	0.9	2.1	6.5	9.7	17.7	19.8	39.5	3.8	100.0

昭和5 0年のＮＨＫ国民生活時間調査⑫によれば、同世代（1 6～1 9才）の平均余暇時間が平日5時間3 9分、休日9時間2 9分であることから、訓練校生のそれも大差なく平均的と推察される。

表8 平日・休日および長期休暇の余暇活動 (M・A)

	平　日	休　日	長期休暇	長期休暇時の希望
40％以上	ＴＶ・ラジオ(85.1) 雑誌・マンガ(58.1)	ＴＶ・ラジオ(77.9) ごろね (42.8)	ＴＶ・ラジオ(62.8) 日帰りレジャー(42.5) ごろね (40.7)	
30～40％		雑誌・マンガ(38.1) 交際 (33.9) 日帰りレジャー (33.3)		1泊以上の旅行(36.6) ＴＶ・ラジオ (31.6)
20～30％	何となくぶらつく(28.6) ごろね (27.7) 交際 (23.0) 将棋・トランプ (21.8)	何となくぶらつく(28.9) 将棋 (27.7) ショッピング (24.2) 映画・音楽会 (20.4)	雑誌・マンガ (27.7) 交際 (25.4) 何となくぶらつく (23.3) 映画・音楽会 (20.4) 将棋・トランプ (20.6)	日帰りレジャー(29.8) 映画・音楽会 (26.0) 交際 (23.3)
10～20％	手伝い (14.7) 勉強 (13.6) スポーツ (11.8) 趣味的活動 (11.5) ショッピング (11.2)	趣味的活動 (14.6) 手伝い (14.2) スポーツ (11.5)	1泊以上の旅行 (19.2) 趣味的活動 (13.9) 里帰り (12.7) 野外活動 (11.8) ショッピング (10.9) スポーツ (10.6) 手伝い (10.3)	ごろね (13.3) スポーツ (13.0) 将棋・トランプ (12.1)
5～10％	読書 (8.8) 映画・音楽会 (8.0) 団らん (7.7) ランニング (7.1) 会合 (3.5) ダンス (3.2) 日帰りレジャー(3.2) ボランティヤ活動(1.5) 習いごと (1.2) 野外活動 (0.6)	勉強 (7.7) ダンス (7.4) ランニング (6.5) 団らん (5.6) 会合 (5.6) 読書 (5.3) 1泊以上の旅行 (2.4) 野外活動 (1.8) 里帰り (1.8) 習いごと (0.9)	勉強 (8.8) 読書 (5.9) ダンス (5.6) 会合 (4.7) 団らん (3.8) ランニング (2.9) 習いごと (0.9) ボランティヤ活動(0.9)	野外活動 (9.7) 雑誌・マンガ (9.1) 趣味的活動 (9.1) 何となくぶらつく(8.8) ダンス (7.4) ショッピング (6.2) 里帰り (5.9) 勉強 (5.0) 手伝い (3.5) 読書 (3.2) 会合 (2.9) ランニング (2.4) 団らん (1.5) ボランティヤ活動(0.6)
0～5％	1泊以上の旅行(0.0) 里帰り (0.0)	ボランティヤ活動(0.0)		習いごと (0.0)

表8は、余暇時間の主な過し方を多肢選択法（M・A）でたずね、その結果を割合の多い順に並べた一覧表である。テレビ・ラジオ視聴が、平日休日にかかわらず最も多い余暇の過し方であり、表をみるかぎりこれを越す項目は見当らないが、割合は休日、長期休暇へと移行するにしたがって下降している。同様な傾向を示す過し方には、「雑誌・マンガ」、「なんとなくぶらつく」がある。逆に、平日から休日になるにつれて上昇してゆく過し方があるが、これにはドライブを含めた「日帰りレジャー」、「野外活動」、「映画・音楽会」など日常生活圏域から脱却しようとする過し方が挙げられる。しかし、長期休暇になると休日にいったん上昇した割合が下降してしまうものに、「友人との交際」「ショッピング」、「将棋・トランプ」などがある。また余暇時間量の増加に影響を受けないかのように活動割合が変わらない過し方に、「スポーツ」、「読書」、「趣味的活動」が含まれる。しかしながら、同じ変化量の小さい過し方でも「習いごと」、「ボランティア活動」などは前者に比べて皆無に近い割合にすぎなかった。

このようにみると、訓練校生は青少年でありながらも、全体的には行動型というよりはむしろ休養型余暇の傾向が強くあらわれている。しかし表8の第4列は長期休暇時の希望する過し方であるが、この段になると、「ごろ寝」、「雑誌・マンガ」ばかりでなく「テレビ・ラジオ視聴」の割合も沈降して休養的傾向が消え、代って「1泊以上の旅行」などの観光的活動が浮上してくる。冒頭でも述べたところであるが、余暇の過し方を一義的にレクリエーションに求めることはできないが、代表的レクリエーション活動に該当すると考えられるスポーツ、趣味的活動、野外活動などの実施程度は相対的に低

い水準であった。

自由時間を一緒に過す活動仲間は、小中学校の同窓生という答が約⅓の32.4%を占めた（表9）。クラブ・サークルなど訓練校を中心とした仲間は意外と少なく、どちらかといえば家庭を中心とした居住地域の仲間ん多い傾向がみられた。

表9　余暇活動の仲間

仲　間	人数	%
家　族	29	8.6
下宿・寮	35	10.3
クラブ・サークル	6	1.8
訓練校	43	12.7
小中学校の同窓生	110	32.4
近所の人々	46	13.6
自分ひとり	39	11.5
その他	17	5.0
無回答	14	4.1
計	339	100.0

Ⅳ　結果の考察

余暇の過し方から代表的特徴をもつテレビ視聴とスポーツ活動を取り出して、自主性の水準による差違をとらえてみた。代表とした前者は、自由裁量性の高い時空間において不活発で自律性に欠けやすい活動であり、後者は活発で自律的な活動であるといえよう。

テレビ視聴時間は、表10のとうりであるが、

表10　平日および休日のテレビ視聴時間

型＼時間量		みない	1時間未満	1～2時間未満	2～3時間未満	3～4時間未満	4～5時間未満	5時間以上	無回答	計
平日	人数	33	19	49	53	64	51	63	7	339
	%	9.7	5.6	14.5	15.6	18.9	15.0	18.6	2.1	100.0
休日	人数	20	5	17	30	52	47	153	15	339
	%	5.9	1.5	5.0	8.8	15.3	13.9	45.1	4.4	100.0

1時間単位の時間区分に割合の差が平日では小さいが、休日になると時間増加にともなって割合も漸増し、5時間以上の視聴が45.1%を占めるまでに広がった。この分布状態を二分する境が、平日では3時間、休日では5時間である。ちなみに、NHKの国民生活時間調査[13]によれば、同世代の平均視聴時間は平日2時間21分、休日3時間58分であった。訓練校生の視聴時間は平均よりいくらか長いことになる。視聴時間を3時間を中心に4区分に仕切って、第3章の2節でグループ化した自主性の水準別にみたのが図8である。自主性の高いグループは、

図 8－1　自主性の水準別にみたテレビ視聴時間(平日)

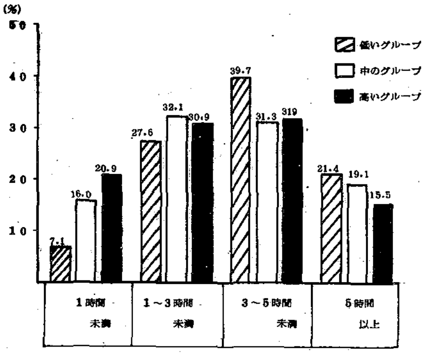
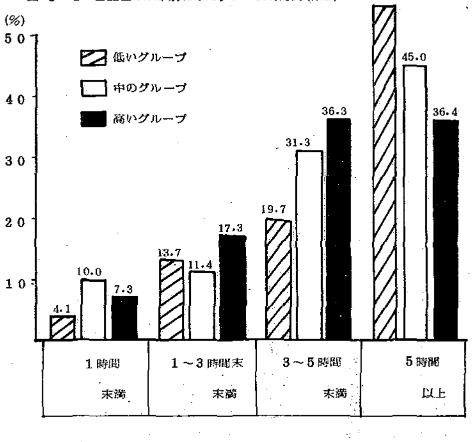


図 8－2　自主性の水準別にみたテレビ視聴時間(休日)



平日休日ともに低いグループと比較して視聴時間は短い傾向が明らかである。そして、時間増加に対する占める割合の相対的逓減率は、休日の方がより顕著にあらわれている。自主性が中のグループは、全体的であり、比例的配分となっている。

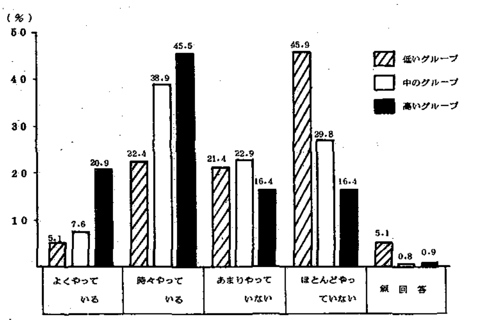
一方、スポーツ活動については、実施程度で「よくやっている」と「時々やっている」を加えるならば、47.5％がスポーツをしていることになり、反対に、「あまりやっていない」と「ほとんどやっていない」を加えた50.2％がスポーツをしていないことになる（表11）。

表11

実施程度	人数	％
よくやっている	38	11.2
時々やっている	123	36.3
あまりやっていない	69	20.4
ほとんどやっていない	101	29.8
無回答	8	2.4
計	339	100.0

すなわち、割合はほぼ半半である。テレビ視聴時間と同じ方法で自主性の水準別に、スポーツ活動の程度を4段階に仕切ってみると、スポーツ活動の実施程度においてもテレビ視聴と同様に、あるいはいっそう顕著に自主性の高いグループと低いグループには差違が生じた（図9）。

図9 自主性の水準別にまたスポーツ実施状況



以上の結果は、分布割合をさらに整理統合した3×2の分割表において、カイ二乗検定によってテレビ視聴時間（休日）は1％水準、スポーツ活動実施は0.5％水準で有意性が認められた（表12、13、14）。

表12　自主性の水準別にみたスポーツ活動

水準＼活動程度	する	しない
高いグループ	73 (66.4)	36 (32.8)
中のグループ	61 (46.6)	69 (57.2)
低いグループ	27 (27.5)	66 (67.3)

注1）数は実数、( )内は％、無回答は除去してある。

注2）3×2の分割表によるカイ二乗検定の結果　$P<0.005$（d.f.=2）

表13　自主性の水準別にみたテレビ視聴時間（平日）

水準＼時間量	3時間未満	3時間以上
高いグループ	57 (51.8)	52 (47.4)
中のグループ	63 (48.1)	66 (50.4)
低いグループ	34 (34.7)	60 (61.1)

注1）数は実数、( )内は％、除去してある。

注2）3×2の分割表によるカイ二乗検定の結果　$0.05<P<0.1$（d.f.=2）

表１４　自主性の水準別にみたテレビ視聴時間（休日）

水準＼時間量	５時間未満	５時間以上
高いグループ	６７ （６０.９）	４０ （３６.４）
中のグループ	６９ （５２.７）	５９ （４５.０）
低いグループ	３６ （３６.７）	５４ （５５.１）

注１）数は実数、( )内は%、無回答は除去してある。

注２）３×２の分割表によるカイ二乗検定の結果　$0.005 < P < 0.01$
(d．f．＝2)

Ｖ 総　括

レクリェーション活動はある特定の活動を指すものではなく、心構えによって活動の意味も価値も大きく変わるものと考えられる。従って、多様な余暇活動の中からレクリェーション活動を形式的に分類することは容易ではないが、今回の調査においては、余暇の過し方としてはもっとも手軽で安易なテレビ視聴と、それなりの準備と配慮を必要とするスポーツ活動に焦点をしぼり、自主性という心理的特性を軸に活動の分析を心みたわけである。

その結果、対象となった訓練校生の余暇活動は全体的に休養的傾向が強く、また、自主性は比較的低い水準であったが、自主性の水準別グループによる差違は、テレビ視聴時間量とスポーツ活動実施程度において明瞭となった。

今後の課題としては、自主性の診断で用いた心理テストの妥当性をより検討するために、同世代である高校生などを対象に実施する必要があると考える。

参考文献

１）江橋慎四郎編「余暇教育学」（講座余暇の科学３、垣内出版、１９７８

２）松原五一、「レクリーダーへの道」、日本レクリェーション協会、１９７５

３）石川　勤他、「自主性診断検査解説」、金子書房、１９７７

４）労働省資料、「全国職業訓練校便覧」

５）文部大臣官房調査統計課、「学校基本調査報告書」

６）総理府統計局編、「日本の統計」、大蔵省印刷局、１９７７

７）総理府青少年対策本部編、「青少年の連帯感などに感する調査」、大蔵省印刷局､1976

８）総理府青少年対策本部編、「青少年白書」１９７７

９）前掲書「青少年白書」

10）前掲書「青少年白書」

11）前掲書「自主性診断検査解説」

12）日本放送協会放送世論調査所、「昭和５０年度　国民生活時間調査」、日本放送出版協会、１９７６

13）前掲書「昭和５０年度　国民生活時間調査」

レクリエーション参与の社会的要件に関する研究

中京大学体育学部　藤　原　健　固

1　研究視点

余暇と所得の増大に伴って余暇活動に多くの関心が寄せられてきた。このことは欧米先進国において一歩先んじており①、１９６０年代以降のわが国においても認められる現象である。そして、最近のレク（レクリエーション）参与の研究は、２つに大別されるといってよい。１つはエリア・アプローチ（area aproach）とも呼ばれるもので、主として年令、性、住居、職業、地位といった多様な特性との関係で特定地域のレク参与をエコロジカルな観点から明らかにし、且つ参与者の意見聴取により動態的に把握しようとするものである②。２つはトピカル・アプローチ（topical aproach)とも呼ばれるもので、特定地域に限定せず内容的にはエリア・アプローチを指考するものである③。

本研究は後者に属するものであるが、従来のアプローチとやや異った視点をあげるとすれば次の２点である。第１に、レク参与の社会的要因の解明に当って家族との関係を重視したことである。第２に、ともすれば陥り易い理論的フレーム・ワークの欠如を避けるべく調査データを社会学的視野内において分析することに努めたことである。

その際、交換理論（exchang theory）④を重視した。それはレク参与を説明する幾つかの理論的フレーム・ワーク⑤のなかにあって、交換理論が次の理由で最も有効であると考えたからである。すなわち、交換理論は個人の課題遂行の本質と深くかかわっており、レク参与の外的要因（レク・チャンスの獲得の容易さ、家族の規模、収入など）と内的要因（レク参与から得られる報酬）の解明に有効な役割を果し得ると考えられるのである⑥。それは個人の思考・行動様式が報酬とコストを基底に決定される、という交換理論の仮定に基づいている。すなわち、個人がレク参与を決定するのは必要なコスト（犠性）以上に得られる報酬が大きい限りにおいてみられる、というものである。それ故、個人もしくは集団は、如何なる理由によるにせよ行動からコスト以上の報酬が期待されなくなると行動を中止する、ということになる。しかし、この場合の報酬は多分に精神的なものも含んでいる⑦。

交換理論を採用して現代社会のレク参与を家族社会学の立場から明らかにしようとする際の家族（family）は、その制度と形態において次のような意味合をもつ。

まず、制度の面から現代の家族をみると直系家族の崩壊という現象があげられる。とくに戦前までの家族は、男系の長子相続制による家制度であり、M．weber のいう家父長制家族（patriachalische familie）であった。すなわち、個人的な恭順関係を土台にした家父長制支配が貫いている家族であった。そして、そこでは戸主の権威に基づく地位が絶対的であって、他の家族構成員は伝統的な犯すべからざる規範（norm）に従順しなくてはならなかったのである。しかしながら、こうした家父長制は第Ⅱ次世界大戦後、①家制度の法制的根拠の崩壊、②デモクラシーを背景にした新しい教育による価値観の変化、③１９６０年代以降の経済の高度成長による所得と余暇の増大による家庭生活上の諸様式や生活感覚の急変、などによって大

きな変化が認められるようになった。

そして、わが国の家族もバージェスの<制度から友愛へ>⑧という方向にあり、相互の愛情に基礎をおく親しい結びつきに基づきつつある。それは主として戦後における夫婦双方の学歴の上昇、急激な経済成長、夫婦共働きの普及、といった言わば生産と消費の分離による消費団体としての家族の出現にその基盤をおいている。そこでは、アメリカ的自由主義としての平等の原理、個人の幸福の追求、配偶者選択の自由、結婚後親との別居の自由、などに支えられた家族構成員相互の愛情と意見の一致を基盤とする。その結果、家族の機能は縮少化・単純化されレクの機能でさえ家族の外にかなりの部分が移譲されるようになったのである。

つぎに。形態の面から家族をみると、世帯の細分化が進行し、世帯数を１００とした場合の直系尊属（世帯主の両親や祖父母）の比率、その他家族構成員の比率など、どれをとってみてもこの１０数年のうちに急激に減少しているのである。そして、婚因によって結ばれた１組の夫婦の結合を中心としてそこから生まれる子供(未婚の）からなる核家族（nuclear family）が一般化したのである。ちなみに、核家族の比率はここ１０数年間増加の一途をたどり、直系家族や傍系親までを含む家族は３割にも満たないのである。⑨

現代の家族は、以上のようにその制度と形態から戦前と大きく変化し、友愛としての家族化と核家族化が定着しつつあると考えられる。

一方、家族の制度的形態的変化が認められるなかで、個人は２つの家族を経験すると言われる。１つは子供の世代から家族をみた場合であり、それは両親と兄弟からなり自己を社会化させた社会的人間に育成させる場としての家族である。２つは親の世代から家族をみた場合であり、それは夫婦と子供からなり子供を生み育てる場としての家族である。前者は、子供にとって全生活的愛護を受けるものであり、いわばコミュニティ的性格をもっており、定位家族（family of orientation）と呼ばれる。後者は、選択の過程を多かれ少なかれ受けた結果形成されたものであり、いわばアソシエーション的性格をもっており、生殖家族（family of procreation）と呼ばれる。

そこで、本稿では現代社会の家族の特徴を踏まえ個人が経験する２つの家族におけるレク参与の社会的要件を、主として次の２点において明らかにしようとした。⑩

(1)　定位家族とレク参与

社会化要素および報酬ーコスト要素との関係で定位家族におけるレク参与を明らかにすること。

(2)　生殖家族とレク参与

絶対要素、意志一決定要素、報酬ーコスト要素との関係で生殖家族におけるレク参与を明らかにすること。

２　調査方法

(イ)被調査者　全国から無作意に抽出された主婦、６２７名（表１）。

表１　被調査者内訳

年令	25才以上30才未満	30才以上35才未満	35才以上40才未満	40才以上45才未満	45才以上50才未満	50才以上				
	2	33	221	264	69	23				
子供の数	1人	2人	3人	4人	5人以上	いない				
	36	321	161	13	10	1				
年収	120万未満	120万以上150万未満	150万以上200万未満	200万以上250万未満	250万以上300万未満	300万以上350万未満	350万以上400万未満	400万以上450万未満	450万以上500万未満	500万以上
	14	27	33	59	51	78	66	55	48	92
学歴	尋常小	中学	高校	専門学校	短大	大学	その他			
	8	213	214	43	19	14	11			

(ロ)調査項目（４４）の概要　ＳＥＳ（所得、学歴、職業）、社会化（兄弟数、育った場所および人口規模、母親の職業の有無）、報酬ーコスト（子供の頃の楽しかった想い出、宗教）、意志ー決定（レクに対する不一致の頻度、最終的決定者）、役割の限定（望ましいレク組織者、実際のレク組織者）、レク組織者に対する役割期待（レクの重要度、満足度、時間）レク参与の実態（内容、時間）。

(ハ)調査方法　郵送法によるアンケート調査。

(ニ)調査時期　昭和５４年５月10日ー同５月31日

３ 結果と考察

(1) 定位家族とレク参与

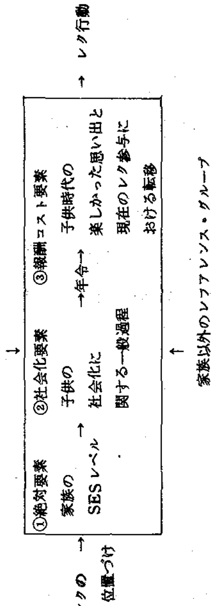


図１　定位家族の側面から見たレク参与に影響を与える社会的要素間の仮定的相互関係

定位家族から生殖家族への移行は、レク参与に重要な意味をもつ。図１は、定位家族（family of orientationの側面からみた家族構成員としての個人のレク参与に影響を与える社会的要素間の仮定的な相互関係のダイアグラムを示したものである。[11]

①社会化要素

表２　兄弟数とレク参与

	レク活動 ＼ 兄弟数 N%	1人 N	1人 %	2人 N	2人 %	3人 N	3人 %	4人 N	4人 %	5人 N	5人 %	6人 N	6人 %	計
レク活動	スポーツ	2	11.8	4	8.5	16	18.4	15	14.0	21	17.5	35	21.5	93
	手芸	2	11.8	10	21.3	16	18.4	25	23.4	20	16.7	27	16.6	100
	芸能	0	0	1	2.1	6	6.9	4	3.7	12	10.0	4	2.5	27
	園芸	5	29.4	3	6.4	9	10.3	10	9.3	14	11.7	17	10.4	58
	おしゃべり	2	11.8	11	23.4	12	13.8	16	15.0	17	14.2	23	14.1	81
	TV・ラジオ	1	5.9	8	17.0	19	21.8	19	17.8	25	20.8	31	19.0	103
	読書	3	17.6	6	12.8	4	4.6	10	9.3	3	2.5	14	8.6	40
	その他	2	11.8	4	8.5	5	5.7	8	7.5	8	6.7	12	7.4	39
	計	17	100.1	47	100.0	87	99.9	107	100.0	120	100.1	163	100.1	541
誰と参加するか	ひとり	2	12.5	4	7.7	9	10.0	8	7.0	21	17.5	16	9.9	60
	夫	4	25.0	3	5.8	2	2.2	6	5.3	6	5.0	4	2.5	25
	夫と子供	4	25.0	17	32.3	24	26.7	33	28.9	25	20.8	39	24.1	142
	子供	0	0	11	21.2	9	10.0	17	14.9	22	18.3	22	13.6	81
	サークル仲間	1	6.3	3	5.8	10	11.1	13	11.4	6	5.0	18	11.1	51
	親・兄弟・親戚	0	0	3	5.8	3	3.3	3	2.6	1	0.8	4	2.5	14
	近所の人	3	18.8	7	13.5	27	30.0	24	21.1	33	27.5	50	30.9	144
	仕事仲間	0	0	1	1.9	2	2.2	4	3.5	3	2.5	2	1.2	12
	その他	2	12.5	3	5.8	4	4.4	6	5.3	3	2.5	7	4.3	25
	計	16	100.1	52	99.8	90	99.9	114	100.0	120	99.5	162	100.1	554

表３　母親の職業の有無とレク参与

レク活動 ＼ 職業 N・%	有 N	有 %	無 N	無 %	計
スポーツ	58	19.0	33	15.1	91
手芸	60	19.7	39	17.8	99
芸能	18	5.9	9	4.1	27
園芸	32	10.5	22	10.0	54
おしゃべり	42	13.8	36	16.4	78
TV・ラジオ	55	18.0	45	20.5	100
読書	22	7.2	17	7.8	39
その他	18	5.9	18	8.2	36
計	305	100.0	219	99.9	524

$(0.05 > X^2_0)$

個人が最初に経験するレク活動は、定位家族においてみられる。とくに、就学前の期間において個人のレク活動は、定位家族に大きな影響を受けるのである。その際、具体的には子供の社会化に関する一般的過程ー兄弟数、母親の職業の有無、育った場所および人口規模などとレク参与の関係が問われなければならない。

まず、表２から兄弟数とレク参与の関係をみたところ、次の２点が指摘された。①「ひとりっ子」および「２人兄弟」の場合、「読書」がかなり高く（１７.５％、１２.８％）、「３人兄

弟」以上になると「読書」指向は１０パーセント以下を示した。また、「スポーツ」についてみると「３人兄弟」以上においてかなり高く、とくに「６人兄弟」以上の場合顕著であった（２1.5％）。㋺誰とレクに参加するかについてみると、「ひとり」でというのは「ひとりっ子」（１2.5％）、「５人兄弟」（１7.5％)であった。そして、「夫と子供」、「近所の人」と一緒にというのが多くみられ、兄弟の数と誰とレクに参加するかという問には特別の関係がないことがわかった。

つぎに、自分の母親の職業の有無とレク参与についてみたところ、0.5パーセントの危険率で両者の間に正の関係を認めることはできなかった（表３）。

また育った場所および人口規模とレク参与の間にも正の関係は認められなかった。

いうまでもなく、社会化（soctalization）は社会の中で演じる多様な役割を個人が発達させる際の影響をもつすべての側面を含んでいる。それ故、社会化要素は以上のほかにも重要な要素を含んでいる。その際、とくに注目されなければならないのは、家族のＳＥＳレベルによる影響である。すなわち、多様なＳＥＳレベルにおいて定位家族のもとに庇護された子供は、異なったタイプのレク活動に組み込まれていくのである。⑫

また、社会化のもう１つの重要な要素は、家族外のレファレンス・グループの影響である。子供は思考・行動様式を形成し補強もしくは修正するレファレンス・グループをもつのが一般的であり、それがレク選択の傾向に影響を与え得るのである。⑬

②報酬―コスト要素

表４　子供の頃の想い出とレク参与

レク活動＼想い出 N・%	スポーツ		遊び		おしゃべり		お話し		一緒に出かけること		その他		小計	楽しかった記憶はない		計
	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%		N	%	
スポーツ	4	36.4	3	8.8	10	22.2	7	13.5	35	15.6	2	11.8	61	23	18.1	84
手芸	2	18.2	6	17.6	11	24.4	9	17.3	44	19.6	3	17.6	75	22	17.3	97
芸能	1	9.1	1	2.9	1	2.2	2	3.8	13	5.8	2	11.8	20	6	4.7	26
園芸	0	0	3	8.8	3	6.7	4	7.7	25	11.1	3	17.6	38	16	12.6	54
おしゃべり	1	9.1	9	26.5	9	20.0	10	19.2	34	15.1	2	11.8	65	12	9.4	77
TV・ラジオ	1	9.1	6	17.6	5	11.1	13	25.0	47	20.8	1	5.9	73	28	22.0	101
読書	2	18.2	1	2.9	4	8.9	6	11.5	12	5.3	2	11.8	27	8	6.3	35
その他	0	0	5	14.7	2	4.4	1	1.9	15	6.7	2	11.8	25	12	9.4	37
計	11	100.1	34	99.8	45	99.9	52	99.9	225	100.0	17	100.1	384	127	99.8	511

表５　子供の頃の想い出とレク時間

時間＼想い出 N・%	スポーツ		遊び		おしゃべり		お話し		一緒に出かけること		その他		小計	楽しかった記憶はない		計
	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%		N	%	
～　30分	0	0	2	6.1	2	4.3	3	5.6	17	6.8	5	27.8	29	9	5.9	38
30分～　1時間	2	20.0	4	12.1	4	8.5	4	7.4	27	10.8	0	0	41	13	8.5	54
1時間～　2時間	1	10.0	7	21.2	12	25.5	7	13.0	47	18.9	2	11.1	76	25	16.3	101
2時間～　3時間	1	10.0	1	3.0	4	8.5	5	9.3	29	11.6	4	22.2	44	10	6.5	54
3時間～　4時間	1	10.0	1	3.0	2	4.3	3	5.6	19	7.6	0	0	26	10	6.5	36
4時間～　5時間	2	20.0	3	9.1	3	6.4	2	3.7	12	4.8	0	0	22	4	2.6	26
5時間～　6時間	1	10.0	1	3.0	4	8.5	6	11.1	7	2.8	1	5.6	20	3	2.0	23
6時間～14時間	1	10.0	3	9.1	3	6.4	7	13.0	19	7.6	3	16.7	36	6	3.9	42
14時間～21時間	0	0	0	0	1	2.1	0	0	6	2.4	0	0	7	4	2.6	11
小計	9	90.0	22	66.6	35	74.5	68.7	37	183	73.3	15	83.4	301	84	54.8	385
しない	1	10.0	11	33.3	12	25.5	31.5	17	66	26.5	3	16.7	110	69	45.1	179
計	10	100.0	33	99.9	47	100.0	1002	54	249	99.8	18	100.1	411	153	99.9	564

レク選択は、個人の多様なレク経験の実際的な結果に関係しており、交換理論に基づいていると考えられる。すなわち、個人は自分にとって一連の選択可能な――最大の理益をもたらし得る――活動を抽出するものである。これらの活動のあるものは新しいレク経験に対する持続的なかかわりの結果であったり、子供時代の楽しかった活動であったりする。広い意味で、子供時代に最も報酬が大きかったレク活動が成人後においても合理的な支払われるべきコストとして位置づけられるのである。

まず、表４から子供の頃の楽しかった想い出とレク活動についてみたところ、次の２点が指摘された。㋑「子供の頃の楽しかった想い出」は、「一緒に出かける」（４4.0％）が最も多く、ついで「お話し」（１0.2％）「おしゃべり」（8.8％）、「遊び」（6.7％）であり、「スポーツ」はわずか２パーセントに過ぎなかった。また、「楽しかった記憶はない」とするものは、２4.9パーセントを占めていた。㋺子

供の頃の楽しかった想い出が「スポーツ」であるものの、現在のレク活動の第1位は「スポーツ」（36.4％）であり、「遊び」のそれは「おしゃべり」（26.5％）、「お話し」のそれは「TV・ラジオ視聴」（25.0％）であり、「一緒に出かけること」のそれは「TV・ラジオ視聴」（20.8％）であった。すなわち、「スポーツ」に楽しかった記憶をもつのが、子供の頃の経験を成人後も持続する傾向は0.1％の危険率で認められたのである。

つぎに、表5から子供の楽しかった想い出とレク時間についてみたところ、「想い出」の有無との間に有意な差が認められ、「想い出」をもつものはもたないものに比べて現在のレク活動により多くの時間を当てることがわかった。とくに、子供の頃の楽しかった想い出が「遊び」「おしゃべり」のものに、このことが明らかであった。

表6 SESとレク参与

④年収とレク参与

年収単位：万円

レク活動＼年収 N・%	－120		120－150		150－200		200－250		250－300		300－350		350－400		400－450		450－500		500－		計
	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	
スポーツ	2	14.3	4	14.8	5	15.2	8	13.6	12	23.5	12	15.4	10	15.2	12	21.8	11	22.9	14	15.2	90
手芸	2	14.3	6	22.2	3	9.1	7	11.9	5	9.8	15	19.2	21	31.8	6	10.9	11	22.9	18	19.6	94
芸能	2	14.3	0	0	3	9.1	1	1.7	3	5.8	5	6.4	2	3.0	3	5.5	4	8.3	4	4.3	27
園芸	2	14.3	5	18.5	3	9.1	7	11.9	3	5.8	8	10.3	8	12.1	7	12.7	5	10.4	10	10.9	58
おしゃべり	1	7.1	4	14.8	9	27.3	13	22.0	12	23.5	6	7.7	9	13.6	7	12.7	7	14.6	12	13.0	80
TV・ラジオ	3	21.4	7	25.9	6	18.2	17	28.8	11	21.6	18	23.1	9	13.6	10	18.2	6	12.5	14	15.2	101
読書	2	14.3	1	3.3	3	9.1	2	3.4	2	3.9	8	10.3	6	9.1	4	7.3	1	2.1	7	7.6	36
その他	0	0	0	0	1	3.0	4	6.8	3	5.8	6	7.7	1	1.5	6	10.9	3	6.3	13	14.1	37
計	14	100.0	27	99.9	33	100.1	59	100.1	51	99.7	78	100.1	66	99.9	55	100.0	48	100.0	92	99.9	523

⑫職業とレク参与

レク活動＼学歴 N・%	会社団体役員		農業		商業		専門職		公務員		その他		計
	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	
スポーツ	8	23.5	6	15.8	15	13.9	28	15.9	5	13.2	28	22.4	90
手芸	2	5.9	5	13.2	24	22.2	37	21.0	6	15.8	18	14.4	92
芸能	1	2.9	2	5.3	3	2.8	10	5.7	4	10.5	6	4.8	26
園芸	2	5.9	8	21.1	10	9.3	17	9.7	5	13.2	14	11.2	56
おしゃべり	10	29.4	8	21.1	20	18.5	25	14.2	4	10.5	12	9.6	79
TV・ラジオ	7	20.6	6	15.8	24	22.2	32	18.2	5	13.2	26	20.8	100
読書	2	5.9	1	2.6	5	4.6	19	10.8	3	7.9	8	6.4	38
その他	2	5.9	2	5.3	7	6.5	8	4.5	6	15.8	13	10.4	38
計	34	100.0	38	100.2	108	100.0	176	100.0	38	100.1	125	100.0	519

⑬学歴とレク参与

レク活動＼学歴 N・%	尋常小		中学		高校		専門学校		短大		大学		その他		計
	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	
スポーツ	1	12.5	31	14.6	43	20.1	11	25.6	0	0	2	14.3	2	18.2	90
手芸	1	12.5	38	17.8	41	19.2	7	16.3	5	26.3	1	7.1	1	9.1	94
芸能	1	12.5	6	2.8	16	7.5	1	2.3	0	0	2	14.3	1	9.1	27
園芸	0	0	26	12.2	23	10.7	2	4.6	2	10.5	3	21.4	2	18.2	58
おしゃべり	2	25.0	40	18.8	23	10.7	10	23.3	2	10.5	1	7.1	2	18.2	80
TV・ラジオ	1	12.5	48	22.5	41	19.2	5	11.6	1	5.3	2	14.3	2	18.2	100
読書	1	12.5	13	6.1	11	5.1	3	7.0	6	31.6	1	7.1	1	9.1	36
その他	1	12.5	11	5.2	16	7.5	4	9.3	3	15.8	2	14.3	0	0	37
計	8	100.0	213	100.0	214	100.0	43	100.0	19	100.0	14	99.9	11	100.1	522

表7 子供の数とレク参与

レク活動＼子供数 N・%	1人		2人		3人		4人		5人		いない		計
	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	
スポーツ	2	5.6	61	19.0	26	16.3	3	23.1	2	20.0	0	0	94
手芸	11	30.6	54	16.8	32	20.0	1	7.7	2	20.0	0	0	100
芸能	2	5.6	20	6.2	2	1.3	2	15.4	1	10.0	0	0	27
園芸	3	8.3	38	11.8	16	10.0	0	0	1	10.0	0	0	58
おしゃべり	4	11.1	51	15.9	25	15.6	1	7.7	0	0	0	0	81
TV・ラジオ	5	13.9	54	16.8	41	25.6	1	7.7	2	20.0	0	0	103
読書	5	13.9	21	6.5	8	5.0	2	15.4	2	20.0	1	100	39
その他	4	11.1	22	6.9	10	6.3	3	23.1	0	0	0	0	39
計	36	100.1	321	99.9	160	100.1	13	100.1	10	100.0	1	100	541

(2) 生殖家族とレク参与

図2 生殖家族の側面からみたレク参与に影響を与える社会的要素間の仮定的相互関係

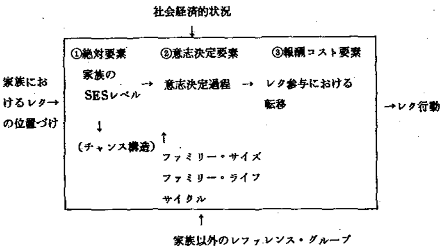


図2は、生殖家族（family of procreation）の側面からみた家族構成員としての個人のレク参与に影響を与える社会的要素間の仮定的な相互間のダイアグラムを示したものである。

①絶対要素

家族のSES（Social Economic Standard）[14]は個人の生活様式を決定する際の1つの基本的な要件であり、レク参与の分析において重要な役割を果す。

④年　収　全体的なレク参与は「TV・ラジオ視聴」（19.3％）と「スポーツ」（17.2％）が高く、「芸能」（5.2％）と「読書」（

6.9％）は低かった。また、家族の年収の程度が個人（主婦）のレク参与を規定する1つの社会的要件であることが判った。すなわち、年収250万以下の場合「TV・ラジオ視聴」が高く、350万円以上の場合「スポーツ」と「手芸」が高かった（表6－㋑）。すなわち、年収が高い場合、積極的なレク活動に参与し、（低い年収の場合比較的消極的レク活動に参与する傾向を示したのである。

ⓑ職　業　職業との関係でみると、[15]比較的余暇時間の多い職業従事者の場合「芸能」と「読書」指向が強く、そうでないものの場合「TV・ラジオ視聴」と「おしゃべり」指向が認められた（表6－㋺）。また、全体的に「スポーツ」（17.3％）指向もかなり高く、「TV・ラジオ視聴」（19.3％）と「手芸」（17.7％）についで第3位であった。以上のことは余暇時間の多い職業従事者は、より積極的なレク活動を指向し、その内容も自己求心的な傾向を示唆するものである。

ⓒ学　歴　学歴とレク参与の関係をみたところ、明らかな関係は認められなかった。強いて言えば、若干ではあるが高学歴者は「読書」と「園芸」指向であり、低学歴者は「TV・ラジオ視聴」指向であった（表6－㋩）。

以上みてきたように、SESは個人のレク参与を規定する際の1つの社会的要因となり得る。すなわち、家族の収入は個人のレク活動と関係をもっており、同時に職業と学歴も例外ではなかったのである。しかし、その程度はあまり高くなかった。[16]それは主として次の2点に負っている。1つは、わが国の場合、アメリカのような多民族国家と異なり、単一民族であることから国民の思考・行動様式がかなりワン・パターン化されていること。2つは経済的格差がそれほど強くないこと。

しかしながら、SESに高いプレスティジをもつ人々が、より多様で変化のあるレク活動を追求する傾向を認めることはできる。それは家族のSESレベルが個人のレク選択のチャンスにかなり影響を与えるからである。すなわち、レクのチャンス構造は、SESレベルに影響を受けて決定されるのである。[17]例えば、低いSESレベルの人々は、時間的経済的負担を強いられ且つ努力を要するレク活動に参加する度合は多いとは言えないのである。

生殖家族におけるレク参与の問題を考察する際、以上みてきたSESとの関係の他に2つの社会的要因との関係を明らかにする必要がある。1つはファミリー・サイズ（子供の数）であり、2つはファミリー・ライフ・サイクル（年令）である。

表8　年令とレク参与

㋑　時　間

レク時間 ＼ 年令 N・％	25才－30才		30才－35才		35才－40才		40才－45才		45才－50才		50才－		計
	N	％	N	％	N	％	N	％	N	％	N	％	
－　30分	1	50.0	1	3.0	24	11.4	12	4.8	1	1.4	0	0	39
30分　1時間	0	0	4	12.1	23	11.0	22	8.9	7	10.1	2	9.1	58
1時間－2時間	0	0	4	12.1	39	18.6	49	19.8	11	15.9	1	4.5	104
2時間－3時間	0	0	4	12.1	20	9.5	25	10.1	5	7.2	1	4.5	55
3時間－4時間	0	0	2	6.0	17	8.1	14	5.6	2	2.9	2	9.1	37
4時間－5時間	0	0	4	12.1	9	4.3	11	4.4	1	1.4	1	4.5	26
5時間－6時間	0	0	2	6.0	6	2.9	9	3.6	6	8.7	0	0	23
6時間－14時間	0	0	1	3.0	14	6.7	17	6.9	5	7.2	5	22.7	42
14時間－21時間	1	50.0	1	3.0	1	0.5	4	1.6	2	2.9	3	13.6	12
小　計	2	100.0	23	69.7	153	72.9	163	65.7	40	58.0	15	68.2	396
し な い	0	0	10	30.3	57	27.1	85	34.3	29	42.0	7	31.8	188
計	2	100.0	33	100.0	210	100.0	248	100.0	69	100.0	22	100.0	584

㋺　活動内容

レク活動 ＼ 年令 N・％	25才－30才		30才－35才		35才－40才		40才－45才		45才－50才		50才－		計
	N	％	N	％	N	％	N	％	N	％	N	％	
スポーツ	0	0	8	30.8	43	21.8	38	16.0	4	6.7	1	5.9	94
手　芸	1	50.0	5	19.2	38	19.3	44	18.6	9	15.0	1	5.9	98
芸　能	0	0	0	0	10	5.1	12	5.1	5	8.3	0	0	27
園　芸	0	0	1	3.8	20	10.2	27	11.4	8	13.3	2	11.8	58
おしゃべり	1	50.0	3	11.5	26	13.2	35	14.8	10	16.7	6	35.3	81
TV・ラジオ	0	0	4	15.4	32	16.2	53	22.4	9	15.0	5	29.4	103
読　書	0	0	1	3.8	14	7.1	13	5.5	9	15.0	2	11.8	39
そ の 他	0	0	4	15.4	14	7.1	15	6.3	6	10.0	0	0	39
計	2	100.0	26	99.9	197	100.0	237	100.1	60	100.0	17	100.1	539

まず、ファミリー・サイズ（子供の数）とレク参与についてみたところ、次の2点が指摘された（表7）。㋑「子供の数」は「2人」（59.3％）が最も多く、現代社会の核家族的状況をよく表わしており、「2人」から「3人」の子供をもつ家族は全体の88.9パーセントを占めていた。㋺「子供の数」が「1人」から「4人」までの家族についてみると「1人」の子供をもつ家族では「手芸」（30.6％）が最も多く、「2人」のそれは「スポーツ」（19.0％）「3人」のそれは「TV・ラジオ視聴」（25.6％）「4人」のそれは、「スポーツ」（23.1％）であった。これらの調査結果は「2人」以上「4人」までの子供をもつ家族においては、「スポーツ」が比較的高い報酬をもたらすレク活動であることを示している。さらに、子供の数と週当りのレク時間の関係をみたところ、「子供の数」が「1人」から「4人」までの家族では「1時間」から「2時間」が最も多かった。

つぎに、ファミリー・ライフ・サイクル（年令）とレク参与の関係についてみたところ（表8）、次の2点が明らかにされた。㋑全体の67.8パーセントがレク活動に時間をとっており、週当り「1時間以上－2時間未満」（26.3％）が最も多く、ついで「30分－1時間未満」（14.6％）、「2時間以上－3時間未満」（13.9％）であり、年令による差異は認められなかった。㋺レク活動の内容をみると、「30才以上－35才未満」では「スポーツ」（30.8％）「手芸」（19.2％）、「TV・ラジオ視聴」（15.4％）：「35才以上－40才未満」、「スポーツ」（21.8％）、「手芸」（19.3％）、「TV・ラジオ視聴」（16.2％）：「40才以上－45才未満」では「TV・ラジオ視聴」（22.4％）、「手芸」（18.6％）「スポーツ」（16.0％）：「45才以上－50才未満」では「おしゃべり」（16.7％）、「手芸・読書・TV・ラジオ視聴」（各15.0％）、「スポーツ」（6.7％）：「50才以上」では「おしゃべり」（35.3％）、「TV・ラジオ視聴」（29.4％）、「読書」（11.8％）であり、年令が高くなるに従って「スポーツ」や「手芸」といった積極的なレク活動から離れる傾向が認められた。

②意志一決定要素

生殖家族における家族構成員の思考・行動様式の最も重要な側面の1つは、家族内の意志一決定プロセスに関係している。いうまでもなく、個人の思考・行動様式は、家族内の他の成員の規制を受ける。[18] その際、家族内でのレク参与の決定タイプ、レクに対する不一致、レク組織者に対する役割期待、および役割遂行に対する態度が問われなければならない。

ⓐレク参与の決定タイプ　いつ、どこで、誰と、どういう方法で家族のレク行動をとるかを決定する際、3つの基本的な決定タイプが考えられる。[19] すなわち、合意の決定、調和的決定、そして事実上の決定である。

合意の決定は、家族レクの決定に際しすべての家族構成員が明らかな全体的合意を示し、且つ決定に参加する最も民主的なタイプである。これに対し調和的決定は、すべての家族構成員が決定に同意はするものの、決定に参加しないタイプである。事実上の決定は、レク行動への決定が特定の家族構成員によってなされ、決定はそうした事実の後になされるタイプである。

家族レクに関するこれら3つの決定タイプは、家族としての小集団の2つの重要な側面に密接に関係している。それは、家族構成員間の価値観とコミュニケーションの程度である。すなわち、家族レクについての決定は家族構成員間の

価値の一致と相互のコミュニケーションの確保の度合によって、決定されるのである。すなわち、価値の一致と相互のコミュニケーションの確保が最高にみられる場合、合意の決定がなされ得るのである。また、合意の決定は、すべての家族構成員に対して最大の報酬を提供し得る。これに対し調和的決定は、一般に家族構成員間の別々の価値志向の結果であり、且つコミュニケーションを通じて合意が得られない場合にみられるタイプである。また事実上の決定は、決定が事実の後になされるため家族構成員間のコミニュケーションが不可能であり、価値の一致も確保され得ないのが一般的である。

ⓑ家族レクリェーションにおける不一致と意志一決定　まず、家族レクリェーションについての不一致の頻度についてみたところ（表9）、全体の半分以上（56.2％）に不一致が認められた。しかし、「非常にある」（7.4％）は少なかった。また、家族レクについての不一致が認められる度合は、低い年令ほど多かった。さ

表9　家族レクについての不一致の頻度

年令／N・％／不一致	25才－30才		30才－35才		35才－40才		40才－45才		45才－50才		50才－		計
	N	％	N	％	N	％	N	％	N	％	N	％	
非常によくある	0	0	1	3.2	12	5.7	19	7.6	7	11.3	4	19.0	43
時々ある	1	50.0	18	58.1	107	50.5	126	50.4	26	41.9	4	19.0	282
ほとんどない	0	0	8	25.8	66	31.1	76	30.4	19	30.6	9	42.9	178
全くない	1	50.0	4	12.9	27	12.7	29	11.6	10	16.1	4	19.0	75
計	2	100.0	31	100.0	212	100.0	250	100.0	.62	99.9	21	99.9	578

表10　家族レクについて最終的な判断を下す者

年令／N・％／判断	25才－30才		30才－35才		35才－40才		40才－45才		45才－50才		50才－		計
	N	％	N	％	N	％	N	％	N	％	N	％	
いつも夫	0	0	4	12.9	47	23.2	63	26.1	21	33.3	6	33.3	141
どちらかといえば夫	1	50.0	14	45.2	65	32.0	57	23.7	12	19.0	4	22.2	153
夫と妻が同じ程度	1	50.0	8	25.8	43	21.2	62	25.7	17	27.0	1	5.6	132
どちらかといえば妻	0	0	2	6.5	30	14.8	25	10.4	7	11.1	1	5.6	65
いつも妻	0	0	0	0	9	4.4	14	5.8	2	3.2	4	22.2	29
その他	0	0	3	9.7	9	4.4	20	8.3	4	6.3	2	11.1	38
計	2	100.0	31	100.1	203	100.0	241	100.0	63	99.9	18	100.0	558

表11　家族レクについての不一致と意志決定　　（％）

		不一致	夫の決定権
夫の学歴	中学	56.8	44.0
	高校	59.5	58.6
	専門学校以上	51.2	53.8
家の宗教	キリスト教	66.5	41.7
	法華教	60.0	55.6
	真宗	54.3	45.5
	浄土真宗	55.3	54.6
	禅宗	53.1	51.7
	創価学会	60.9	59.1
	知らない	62.2	53.3
	その他	57.1	50.0
夫の職業	会社団体役員	56.1	51.4
	農業	40.9	45.0
	商業	58.1	51.8
	専門職	57.6	51.8
	公務員	54.1	54.3
	その他	56.8	56.6
子供の数	1人	51.3	45.9
	2人	54.7	54.8
	3人	63.4	49.1
	4人	27.8	56.3
	5人～	45.5	33.3
	いない	0.0	100.0
妻のサークル活動	教会の活動	80.0	33.3
	お寺の活動	30.8	61.5
	婦人会の活動	55.3	56.3
	スポーツ・グループ	43.5	63.6
	手芸グループ	45.0	61.1
	学習グループ	57.1	41.7
	政治団体	100.0	100.0
	文芸グループ	62.5	28.6
	その他	81.3	54.8
	入っていない	55.2	48.6

らに、「非常によくある」度合は高い年令ほど高く、「時々ある」度合は逆に低い年令ほど低かった。

つぎに、家族レクについて最終的な判断を下す者についてみると（表１０）、全体的には「夫」（５2.7％）が多く、ついで「夫と妻」（２3.7％）であり、「妻」（１6.8％）の決定権は比較的低かった。さらに、「いつも夫」が決定者である場合は２5.3パーセントであるのに対し、「いつも妻」の割合はわずか5.2パーセントであった。とくに、この傾向は低い年令において強かった。また、「夫と妻」が同程度に決定権をもつ割合は、２3.7パーセントであった。

以上の調査結果は、家族レクの決定において次の点を意味するものである。すなわち、家族レクについての決定においてかなりの不一致が認められ、多くの場合夫が決定者であり、妻も決定に参与している。このことは家族レクについての思考・行動様式が基本的には合意に基づくものではあるが、事実上の決定パターンがかなり支配していることを示している。そして、仮りに調和的決定を認めても、妻よりも夫がイニシアティブを握っていると考えられるのである。

さらに、家族レクについての不一致と意志一決定を掘り下げて分析したところ（表１１）、次のようなことが判った。

まず、家族レクについての不一致は半分以上の家族において認められたが、夫が「高校」の学歴をもつ場合最も高く（５9.5％）、同時に「夫の決定権」（５8.6％）も高かった。一方、「中学」の学歴をもつ場合「夫の決定権」（４4.0％）はそれほど高くなかった。「専門学校」以上の高学歴をもつ場合、不一致も「夫の決定権」もそれほど高くなく調和的決定パターンがかなり顕著であることが認められた。また、宗教との関係でみると不一致の程度にそれほど差を認めることはできなかった。さらに、職業との関係でみると、不一致と夫の決定権は、ともに「農業」を除いて半分以上の家族において認められた。

つぎに、子供の数との関係でみると、子供が「いない」家族では、不一致は少なかったものの夫の決定権は強かった。そして、「４人」の子供をもつ家族の場合不一致は少なく、「５人以上」の子供をもつ家族では夫の決定権は弱かった。また、妻のサークル活動所属との関係でみると、妻が何らかのサークル活動に所属している家族の方がそうでない家族に比べて不一致は高く、夫の決定権も若干強かった。そして、「お寺の活動」、「スポーツ・グループ」、「手芸グループ」に所属している場合、不一致は少なく、「教会の活動」、「学習グループ」、「文芸グループ」に所属している場合夫の決定権は弱かった。

ⓒ家族レクの組織者に対する役割期待

表１２　望ましい家族レクの組織者

組織者＼年令・N・%	25才－30才 N	%	30才－35才 N	%	35才－40才 N	%	40才－45才 N	%	45才－50才 N	%	50才－ N	%	計
いつも夫	0	0	3	9.1	30	13.6	39	14.8	13	20.0	3	13.0	88
どちらかといえば夫	0	0	8	24.2	32	14.5	23	8.7	9	13.8	2	8.7	74
夫と妻が同程度	2	100.0	10	30.3	61	27.6	72	27.3	12	18.5	3	13.0	160
誰でもよい	0	0	10	30.3	78	35.3	105	39.8	26	40.0	11	47.8	230
どちらかといえば妻	0	0	0	0	7	3.2	12	4.5	2	3.0	2	8.7	23
いつも妻	0	0	1	3.0	3	1.4	3	1.1	1	1.5	0	0	8
子　供	0	0	1	3.0	10	4.5	10	3.8	2	3.0	2	8.7	5
計	2	100.0	33	99.9	221	100.1	264	100.0	65	99.8	23	99.9	608

家族構成員は各々家族集団内において各々の地位を与えられる。そして、各々期待される一定の思考・行動様式というものが存在する。これが役割期待である。レク活動においては、とくに夫婦の役割期待が大きな力をもっていると考えられる。とくに、伝統的な家族行動の決定

権は、特定の家族構成員（夫）に限定されているのが普通である。それは、しばしば、役割期待にたいする伝統的な力を提供することであり、多様なサブ・カルチュア的イデオロギーに結合されている。他方、戦後における急激な社会変動の結果、家族行動は強力な役割期待を少なくしていると考えられてきた。こうした文脈のなかで、家族レクの組織者に対する役割期待の多様性を考察した。

まず、望ましい家族レクの組織者についてみると（表１２）、「誰でもよい」（３8.0％）が最も多く、ついで「夫と妻が同程度」が２6.1パーセントであった。「夫」と「妻」に絞ってみると「夫」（２6.7％）が断然多く、「妻」はわずか5.1パーセントであった。すなわち、全体的に「夫」への傾斜が強かった。とくに、「３０才以上ー３５才未満」と「45才以上ー５０才未満」において強かった。

表１３　誰が家族レクを組織しているか

組織者＼年令・N・%	25才－30才 N	%	30才－35才 N	%	35才－40才 N	%	40才－45才 N	%	45才－50才 N	%	50才－ N	%	計
いつも夫	0	0	5	15.2	39	18.1	42	16.7	10	14.7	2	9.1	98
どちらかといえば夫	1	50.0	5	15.2	41	19.0	43	17.1	13	19.1	3	13.6	106
夫と妻が同程度	0	0	8	24.2	48	22.2	66	26.2	15	22.1	3	13.6	140
どちらかといえば妻	0	0	7	21.2	30	13.9	32	12.7	6	8.8	1	4.5	76
いつも妻	1	50.0	2	6.0	17	7.9	22	8.7	6	8.8	4	18.2	52
子供	0	0	0	0	10	4.6	10	4.0	6	8.8	2	9.1	28
その他	0	0	1	3.0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
いない	0	0	5	15.2	31	14.4	37	14.7	12	17.6	7	31.8	92
計	2	100.0	33	100.0	216	100.1	252	100.1	68	99.9	22	99.9	593

つぎに、実際に誰が家族レクを組織しているかについてみたところ（表１３）、「夫」（３4.4％）、「妻」（２1.6％）、「夫と妻が同程度」（２3.6％）であり、実際の組織者において「夫」への傾斜が一層明確にされた。しかし、「妻」の存在も無視できなかった。これは戦後わが国における妻の座が強くなったことを示す一証左である。とはいうものの、表１０との関係でみると、やはり家族レクに対する夫婦の規範は「夫」に強く傾斜していることが判るし家族レクの最終判断者は「夫」であり、全体の５2.7パーセントを占め、妻のそれは１6.8パーセント）。

以上の分析結果は、家族レクについての役割期待が認められたものの、「夫」または「妻」に限定して考えることの非妥当性を示唆するものである。

ⓓ役割遂行に対する態度

表１４　家族レクに対する態度と時間

態度＼年令・N・%		25才－30才 N	%	30才－35才 N	%	35才－40才 N	%	40才－45才 N	%	45才－50才 N	%	50才－ N	%	計
重要度	非常に重要	1	100.0	1	7.7	24	22.6	12	11.1	1	4.2	0	0	39
	まあ重要	0	0	4	30.8	23	21.7	22	20.4	7	29.2	2	50.0	58
	どちらでもない	0	0	4	30.8	39	36.8	49	45.4	11	45.8	1	25.0	104
	重要ではない	0	0	4	30.8	20	18.9	25	23.1	5	20.8	1	25.0	55
	計	1	100.0	13	100.1	106	100.0	108	100.0	24	100.8	4	100.0	256
満足度	非常に不満足	0	0	4	12.9	4	1.9	6	2.5	3	4.8	0	0	17
	どちらでもない	1	50.0	2	6.5	27	12.7	26	10.7	8	12.7	7	35.0	71
	だいたい満足	0	0	23	74.2	149	70.3	183	75.3	43	68.3	10	50.0	398
	非常に満足	1	50.0	2	6.5	32	15.1	28	11.5	9	14.3	3	15.0	85
	計	2	100.0	31	100.1	212	100.0	243	100.0	63	100.1	20	100.0	561
時間	全く足りない	1	50.0	10	30.3	40	18.8	68	27.3	16	26.2	10	43.5	145
	少し足りない	0	0	9	27.3	77	36.2	96	38.6	23	37.7	3	13.0	208
	だいたい満足	1	50.0	14	42.4	90	42.3	82	32.9	22	36.1	10	43.5	219
	あまり気味	0	0	0	0	4	1.9	2	0.8	0	0	0	0	6
	ありすぎる	0	0	0	0	2	0.9	1	0.4	0	0	0	0	3
	計	2	100.0	33	100.0	213	100.1	249	100.0	61	100.0	23	100.0	581

表１５　家族レクに使われる時間と満足度

満足度＼時間・N・%	－0.5 N	%	0.5－1 N	%	1－2 N	%	2－3 N	%	3－4 N	%	4－5 N	%	5－6 N	%	6－14 N	%	14－21 N	%	計
全く足りない	10	25.6	14	25.5	17	16.5	10	18.9	8	22.9	5	19.2	3	13.0	9	20.9	4	33.3	80
少し足りない	12	30.8	20	36.4	53	51.5	19	35.8	14	40.0	6	23.1	7	30.4	10	23.3	4	33.3	145
だいたい満足	17	43.6	21	38.2	32	31.1	24	45.3	12	34.3	14	53.8	13	56.5	23	53.5	4	33.3	160
あまり気味	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2.9	1	3.8	0	0	1	2.3	0	0	3
ありすぎる	0	0	0	0	1	0.9	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
計	39	100.0	55	100.1	103	100.0	53	100.0	35	100.1	26	99.9	23	99.9	43	100.0	12	99.9	389

分析のこの部分は、家族レクの重要度と満足度および時間に対する態度に向けられる(表14)。

まず、家族レクの重要度についてみたところ（表１４）、重要（３7.9％）、「どちらでもない」（４0.6％）、「重要ではない」（２1.5％）となっており、重要度はそれほど高くなかった。

また、家族レクの満足度についてみたところ、「満足」（８6.1％）、「どちらでもない」（１2.7％）、「不満足」（3.0％）であった。

さらに、家族レクに使われる時間についてみ

たところ、「十分ある」（1.5％）、「だいたい満足」（37.7％）、「足りない」（60.8％）であった。さらに、家族レクに使われる実際の時間とそれに対する満足度をみたところ（表15）、両者の間に明らかな関係は認められなかった。

以上の調査結果は、家族レクに対してその重要性をそれほど感じていないにもかかわらず、参加する立場からは多くのものが満足していることを示唆している。そして、時間についてはかなりのものが足りないと答えており、家族レク参与の1つの問題点として指摘される。

③報酬ーコスト要素

絶対要素、意志ー決定要素について生殖家族におけるレク参与の最終的な要素は、交換理論に基づく報酬ーコスト要素である。すなわち、それは転移の問題であるが、ここでは「サークル所属」および「宗教」との関係で考察した。

まず、サークル所属とレク参与についてみたところ、次の2点が指摘された。①サークル所属とレク参与の間には、サークル所属のものがそうでないものに比べて活動により多くの時間を当てていた。回レク活動の内容とサークル活動の内容の間には、とくに明らかな関係は認められなかった。

さらに、宗教と家族レク参与の間にも正の関係は認められなかった。

4 結　　語

以上、レク参与の社会的要件について調査結果をもとに考察した。しかしながら、調査結果は定位家族と生殖家族双方においてレク参与の社会的要件が、それほど際立って明確なものでないことを明らかにした。

それは被調査者の——広い意味で—— 画一性に基づくものと考えられる。すなわち、大多数の国民は現在自らを「中流」と考えており、じじつ国民の間にドラマティックな差はそれほど強くないのである（とくに外国と比べて）。こうした平均化・画一化された国民の一部を構成する被調査者のなかにあっては、それほど思考・行動様式の差も認められないのが一般的であり、今回の調査結果はレク参与との関係でこれを証明したにすぎない。

しかしながら、レク参与の社会的要件を家族との関係で究明しようとする際、いくつかの問題点が残された。1つは、定位家族におけるSESとレク参与の問題である。今回の調査では、主婦に重点をおいたためこの問題は割愛せざるを得なかった。2つは、本稿で扱わなかったレク参与に影響を与える種々の社会的要件の解明である。3つは、レク参与の社会的要件を解明するための理論的モの構築である。しかしながら、とくに第3番目の課題に対する見通しは、現在のところ立っていない。

注・文　　献

(1)歴史的には、既に1950年代にレク研究に1つのエポック・メーキングがなされた。

(2)例えば、Lucas,R., "Recreation Use of the Quetico-Superior Area.", Lake States Forest Experiment Station Bulletin,No.Ls—8,1964; Toylor,C.D.and R.Y. Edwards,"A survey of summer visitors to Wells Gray Park,British Columbia", the Forestry Chronide, 36,pp.346—354, 1960.

(3)例えば、Clark,A.,"The use of leisure and its relation to levels of occupational prestige.",American Sociological Review,21:pp 301—307, 1956.

(4)Homans,G.,Social Behavior:

Its Elementary Forms ,New York: Harcourt,Brace and World, 1961, Thibaut ,J .and H.Kelley,The Social Psychology of Groups,New York:John Willey and Sons, pp. 14−15, 1959.

(5)レク参与を説明する他の主要な理論的フレーム・ワークとして次の如きものがある。

㋑代償仮説（Compensatory Hypothesis）：この仮説は、職業によって活動が決定される、という前提にたっており、且つ安全弁（safety-valve)の効果をも前提にしている。すなわち、個人の退屈したとき何かすっきりしたことを探すというのである（Burch, W, "The social circlet of leisure: Competing explanations.", Journal of Leisure Research, I ,pp. 125−145, 1969）．㋺類似仮説（Similarity Hypothesis）：この仮説は、代償仮説と正反対のものであり、個人はその生活スタイルにおいて首尾一貫性を求める、という前提にたっている。この仮説は、家族の行動パターンにおける"習慣の力"に関連した社会心理学的研究においてよく援用される概念であり、個人は緊張をもたらすような状況をさけ、行動に首尾一貫性をもたらす状況を求める、という前提に立っている。この仮説は、チャンスが与えられれば個人は自分の好みに合った思考・行動様式を持続させるためのレク活動を選択することを示唆している（Burch,W. ,op.cit.）㋩準拠集団理論（Reference Group Theory: この理論は、個人の社会的行動は職場の同僚、友人といった準拠集団によって規制される、との前提に立っている。そこでは、準拠集団の社会規範と価値が大きな力をもつ。Burch はキャンパーに関する研究で、レク・スタイルの決定に及ぼす準拠集団の影響を扱った（Burch,W., op.cit.）．㊁チャンス理論（Opportunity Theory）：この理論は、多様なレク参加は効用価値と関係するというものである。そして、この理論は、農村と都市のレクを論ずる際よく援用され、都市の住民は農村の活動に参加する機会（チャンス）が少ないという理由でそれに興味をもつと主張する（Hendee,J., "Rural−urban differences reflected in outdoor recreation participation," Journal of Leisure Reseach,1 ,pp.333 − 341.1969）．

(6)同時に、交換理論（Exchange Theory）は家族理論の構築にも大きな理論的根拠を提供し得るものと考えられる（Edwards,J." Family behavior as social exchange",Journal of Marridge and the Family,31,pp.518 − 526,1969.

(7)例えば、報酬なしに他人に奉仕するような場合でさえ、精神的な満足を得ることが可能である。

(8)Burgess,E.W. and H.J.Locke,The Family:from institution to companionship, 1945.

(9)松原治郎、『現代の家族』、日本経済新聞社、１９６４；同「現代の家族」東京大学公開講座『家』東京大学出版会、１９６８。

(10)従来のレク研究において、あまり関心が払われてこなかった問題領域である。

(11)本稿では主婦を対象に調査したため、定位家族におけるＳＥＳとレク参与の解明はできなかった。

(12)Kohn, M. ,Class and Conformity :A study in Values,Homewood,Illinois:Dorsey Press,1969.

(13)例えば、少年サッカークラブに所属するこ

とは、家族では味わえない集団行動への興味を発展させ得る。しかし、本稿では調査によってこの点を考察することは、できなかった。

(14)本稿では、年収、学歴、職業でとらえた。

(15)現職と仮定職を含んでいる。

(16)ちなみに、米国の場合はかなり高い（Sessons,H. D.," An analysis of selected uariables affecting outdoor recreation patterns.," Social Forces, 42, pp.112−115,1963.

(17)この点はアメリカにおいても指摘されているところである。「……より高いプレスティイジをもった人々は、より多様で変化のあるレク活動を追求する傾向がある」（Sessons,H.D., "An Analysis of selected variables affecting outdoor recreation patterns." Social Forces , 42,pp. 112−115.

(18) もちろん、図２に示す通り、他の要因による規制も受ける。

(19)Turner,R.,Family Interaction, New York:John Wiley and Sons,1970.

レクリエーションの企画と運営に関する実践研究

ーあそこどもジャンボリーからー

福岡教育大学　秋　吉　嘉　範

はじめに

“遊びを知らない子どもたち”と呼ばれる現代っこを思いきり大自然の中で遊ばせようと、企画、実践したのが“あそこどもジャンボリー”である。

さて、今日ほど子どもの遊びが、社会的な話題になっていることは、過去に例をみないといってよい。とくに、本年は国際児童年として世界的に子どもの成長発達に大人が助力している。

ところで、子どもの遊びの教育的意義はいまさら論ずるまでもない、子どもが遊びを通して体力や精神力、社会性を身につけ、全人的に成長することは教育の基本であり、理想である。しかしながら、子どもにとって、“よく学びよく遊べ”は単なる理想であり、現実には“よく学べ”が優先している。遊びは余り、ひまの感覚のまま、“よく学ぶ’ための補助的役割しかはたしていない。

そこで、子どもたちに、“よく学びよく遊ぶ”生活習慣を身につけさせる。そのためには、まずよく遊ぶ、思い切り遊ぶ、上手に遊ぶ、仲間と遊ぶ、自然の中で遊ぶことを身につけさせようと、意図的に計画したのが、“あそこどもジャンボリー”である。

あそこどもジャンボリーは、昭和５３年夏にはじめて実施し、同年冬にウインタージャンボリー、昭和５４年夏と合計３回実施したのである。

そこで各回実施した、内容や方法、その結果をまとめたものが以下の実践研究報告である。

1 昭和53年夏あそこどもジャンボリー

1. 時　期

昭和５３年７月２２日（土）から８月８日(火)までを５回に分け、１回を３泊４日で実施した。

１回目　７月２２(土)～７月２５日(火)
２回目　７月２５(火)～７月２８日(金)
３回目　７月２８(金)～７月３１日(月)
４回目　８月　２(水)～８月　５日(土)
５回目　８月　５(土)　８月　８日(火)

2 対　象

小学校４年、５年、６年の男女、なお３年が数名含まれている。１回から５回まで合計417名が参加した。参加者は福岡市、北九州市を中心に、鹿児島、長崎（対島）、熊本、大分、佐賀、久留米、大牟田　宮崎、山口、広島などと広範囲にまたがり、最も遠いのは千葉から参加した。

3 場　所

熊本県阿蘇郡阿蘇町赤水、阿蘇白雲山荘を中心に、阿蘇外輪山（二重峠）や黒川河畔などである。

4 プログラム（日程）

プログラムは表１のとおりである。プログラム作成にあたっては、日本交通公社福岡エースセンター担当者と数回の会合を持ち、現地下検分打合せ２回、こどもの遊びの好き嫌い調査などの結果を参考にして作成したものである。

（表１）

表1　日程表（プログラム）　昭和53年夏のこどもジャンボリー

	6	7	8	9	12	13	14	15	16	17	18	19	21
1日目					到着	開校式	親睦のつどい		入浴	夕食		星空のもとで歌おう	ーおやすみー
2日目	ーおはようー	朝のつどい	朝食	ワイドハイキング	昼食	スケッチ大会				夕食	入浴	きもだめし	ーおやすみー
3日目	ーおはようー	朝のつどい	朝食	なんでもつくろう（野外工作）	昼食	水泳大会			入浴	夕食		キャンプファイヤー	ーおやすみー
4日目	ーおはようー	朝のつどい	朝食	むかしのあそびをおぼえよう（軽スポーツ）	昼食	別れのつどい							

5　評　価

(1)　自由記述による感想文

(2)　質問紙法による評価

(3)　指導者（スタッフ）全員討議による評価

6　結果と考察

指導者（指導員、看護婦など）延22名の事前打合せ、オリエンテーションを2回実施、あそこどもジャンボリーの目的や内容、指導方法、用具準備などの打合せと、指導方法の学習をかさねた。なお、指導者は実施前日に現地集合し、仕事の打合せと準備にあたった。

あそこどもジャンボリーの目標をつぎの3つに決めた。(1)、きびしく、(2)、なかよく、(3)、たのしく、である。まず「きびしく」は、共同生活を送るための規則を守ること、あそびのルールを守ることなどである。こどもにとって遊びが、社会的、道徳的訓練の場であることは、よく知られたことである。こどもは遊びを通して、他人とどう協力すべきかを学ぶのである。また、集団的活動に参加することによって、集団の基準に従って行動する必然性を体験するのである。このような集団的活動は、現代の子どもに欠けているといわれる協力、奉仕、自己統制、自己出張などの社会的態度を身につけさせようとしたのである。とくに現代っこに欠けている“きびしさ”を学ばせようとしたのである。

いくつかの具体例をあげよう、①テレビ、ラジオの視聴禁止、②インベーダーゲームなど遊戯機器の利用禁止、③自宅からの電話を遠慮願った、④こずかいは300円を残し、あとは全部あずかり最終日にかえした、⑤生活上の規則はきびしく守らせた食事は黙想に始まり、「いただきます」、「ごちそおさま」を合掌していわせた。また、食事中は正座、始き嫌いの食品もできるだけ食べるように指導した。以上のこ

とは、開校式の諸注意のなかで、こどもにわかりやすく説明し、理解を求めて実行した。

つぎに、「なかよく」である。お互いはじめての人ばかりという個人参加であるため、お互いの人間関係をよくすることに重点をおいた。また指導者とこどもたちのコミュニケーション十分にはかるようにして、指導者となかよくするようにした。

一方、グループの編成は、地域や学年をごちゃまぜにして、知らない者同士が、なかのよい友達になるようにした。また、6年の年長者を中心に“ガキ大将”の系例ができるようにした。このことは、同学年のよく知った仲としか遊ばない今のこども達が既製のタテ社会で、助け合いなかよくすることをねらったものである。この方針に対して、なかよし同士でやってきたのだから、同室、同じ班にして欲しいという、こどもや親の希望があったが、この方針を説明し、理解を得た。

3つめの「たのしく」は、思いきり遊ぼうということに視点をおいた。たのしいとは、満足で愉快で明るい気分になることである。//しかし、たのしく感じるのは個人差がある。みんなが楽しくする活動は理想であって現実には、不不可能に近い。そこで、活動そのものの楽しさは、もちろんであるが、活動後の満足度、すなわち、結果にポイントをおき「たのしかった」という情況をつくるように、指導上留意した。また、たのしさは、享楽的な刹那的な楽しさだけでなくて、苦るしさをのりこえた楽しさも重要であると考えた。くるしさ、きびしさをのりこえた楽しさを探索した。とくに、遊びではきびしいルールがあってはじめて楽しいことを学ばせたのである。

1日目

北九州および福岡から貸切バスでこども達が到着するのは12時頃である。現地集合のこども達と合流して、大広間に入れ昼食をとらせる。とくに、はじめての旅のこどももいるので、指導者にできるだけ親切に対応させた。親切のなかには、やさしさ、わかりやすさ、を含めて行動させた。指導者は全部共通のユニホームを着用して、こども達に一目でわかるようにした。

食事後、班分け、名札くばり、荷物の整理をして、班ごとに宿泊部屋へ案内した。一つの班は7～8名とし、各班ごとに担当の指導者をつけた。またこどもたちには互選させて、班長、福班長を決めさせた。班長、福班長は6年、5年の年長者から出る場合が多かった。班長は班の世話役として、班員の行動や健康把握など指導者の連絡役として責任をもたせた。

開校式（13：00～13：30）

1. はじめのことば
2. 校長先生のあいさつ
3. 阿蘇白雲山荘代表歓迎のことば
4. 日本交通公社代表歓迎のことば
5. こども代表約束のことば
6. 指導者（スタッフ）紹介
7. 諸注意
8. 日程説明
9. おわりのことば

開校式は厳粛ななかにも、楽しい希望をもたせるセレモニーにした。なお、指導者紹介のあとこども全員に、指導者の名まえを覚えるゲームをして、指導者全員の顔となまえを早く覚えてもらう努力をした。

- 親睦のつどい（13:30～15:00）
- うた(1)森の熊さん(2)山賊の唄(3)七つの子
- ゲーム (1)指キャッチ、(2)せっしゃの刀はサビ刀、(3)勝抜き集団ジャンケン、(4)両手ジャンケン (5)負けたらまわれ

(6)団結おどり、(7)あっちむいてホイ

ジャンボリーの活動プログラム最初のため、子ども達の気持ちを盛りあげるのに苦労した。

各地方から集まっているなかで、お互いの名まえと顔を覚えさせるため、なるべく単純で楽しめるゲームを選んだ。結果としては、こちらの意図通り、こども達は、すぐにうちとけてしまった。

このプログラムは親睦が中心であるから、なかよく楽しく短時間に実施したのは成功であった。

。入浴（16.：00～）

班ごとに入浴させ、お互いの背中を流させたりして、スキンシップをはかった。指導者も同時に入浴させたのは、こどもと早く仲よくなるためにもよかった。

。夕食（17：30～18：00）

狩場鍋（牛肉・鶏肉・野菜・餅・うどん等）班のみんなが仲よくなるため、鍋のものを注文して、おなじ釜（鍋）の食事をとるようにした。

星空のもとで歌おう（19：00～20：00）

。うた(1)森の熊さん、(2)山賊の歌、(3)青春時代、(4)アルプス一万尺、(5)ハメハメハ大王（おどり）(6)ピンクレディー特集（うたとおどり）

。バンド演奏（西南大学ケープホーン）

。フォークダンス

西南大学バンドの協力で、2倍も3倍も楽しくなったようだ。テレビやラジオではいつも聞いているメロディーでも、生の演奏を聞くことは初めてのこどもが多く、新鮮さもあって、大いに楽しみ喜んだ。また、日頃に経験しない屋外で実施したため、大きな声を出さないと声が聞こえないということがわかった。星空のもとであるから、星座の勉強をして、こども達に話してあげたらよかったと反省した。初日の夜であるから、あまり疲れないように配慮した。

。就寝（21：30）

日頃、早目に寝ていないこどもが多かったことと、はじめての旅行で興奮して、なかなか寝つけない子が多かった。全員が寝いきをかきはじめたのは23：00頃であった。

指導者のなかから、深夜当番を決め、部屋の巡回と健康管理に留意した。

2日目

。起床（6：30）

。朝のつどい（7:00~7:30）

1. あいさつ
2. 体操（ラジオ体操）
3. 校長先生のことば
4. 日程説明
5. ゲーム
6. 団結おどり
7. おわり

。散歩（グループごと）

。朝食（8：00）

ごはん、みそ汁、海苔、卵

。ワイドハイキング（9：20）

ゲーム(1)草原ワイドゲーム(2)すもう(3)チャンバラごっこ(4)戦争ごっこ

。探検（班で行動：岩穴や牛などをみてまわる。）

。昼食（弁当）

白雲山荘から阿蘇外輪山の二重峠まで、片道約5Kmを、徒歩でハイキングした。二重峠は眺めがよくて、阿蘇中岳の噴煙がよく見えた。だらだらと続く登り坂を、こども達は喘ぎながら登った。

苦しい汗のなかで登った満足感は、格別のようであった。

屋外に出るため、車やその他、交通安全に注

意し、こども達の管理に苦労した。一度、雨のそめプログラムを変更したが、翌日に実施したため問題はなかった。こども達は、プログラムを十分知って参加しているため、プログラムの変更はできるだけさけた。こどもの期待を裏切らないためにもである。

◦スケッチ大会（13：00〜14：30）

白雲山荘のまわりの景色を2時間程度で描かせたその後、全員の絵をキャンパスにあつめて全員で批評会を開いた。また、外来の大人5人に審査員になっていただき、「好きな絵」を5点ずつ選んで、表彰した。表彰は「素敵な絵で賞」「上手に描けましたで賞」「努力賞」「うまいで賞」などに分けて、言葉による表彰と、審査員がほめて、頭をなでてやる“ほうび”をあげた。

結果的にはみんなの絵をほめてやり、下手なこどもも上手に描けるという希望を持たせた。終了後、食事をする大広間に全員の絵をはった。またその絵は最終日に返して、自宅にみやげとして持ち帰らせた。

◦入浴（16：00）

◦夕食（17：30）

鍋もの（ミートボール、野菜等）茶わん蒸し

◦きもだめし大会（19：00〜21：00）

男女2組に分け、怪談話をした。途中、部屋の中にかくれていた“おばけ”を出したりして、恐怖のパニック状態をつくりあげた。

その後、男女、2コースに分けて、きもだめしのコースへ行かせた。人数が多くて、時間的に、予定どおりに終わらないことがあった。また、2人1組で歩かせたのだが、出発する時間の間隔が限られたため、2〜3組がいっしょになったりした。“恐いものみたさということで”泣き出すこも多かった。お化けや“ヒトダマ”を見てこんな恐いことははじめてという子どもが多かった。しかし、こども達にとっては一番思い出になる活動ではなかっただろうか、と思う。きもだめしの終了後のこどもの晴ればれした顔は忘れられない。恐怖感、緊張感から解放されて面白さを満喫した。

レクレーションの極意とでもいえるのではないだろうか。なかには、恐くて眠れぬという子どもがいたので、指導者がめんどうを見た例がある。

◦就寝（21：30）

3日目

◦起床（6：30）

◦朝のつどい（7：00）

◦朝食（8：00）

ご飯・みそ汁・海苔・卵

◦野外工作（9：20〜11：20）なんでも作ろう。

◦インディアンの家づくり、古代人の家づくり。

場所は、白雲山荘の近くの広場で実施した。家を解体した廃材を使って、インディアンの家をみんなでつくった。材料が不足した分は、小竹の笹を切って使用した。なかなか思うようなものができないので、班員が知恵を出し合って、チームワークよろしくつくりあげた。こども自身が自らの手で大きな建物をつくることがないのが現実である。縄や針金などを作って作りあげて行くこども達は喜々としていた。完成した時は、みんなでバンザイしていた。汗と泥にまみれた創造の喜び、完成の喜びは、レクリェーションとして重要だと思う。

◦昼食（12：00）

カレーライス

◦昼寝（そろそろ疲れる頃になるので、昼寝は大切な時間となる。）

。水泳大会（１４：００～１５：３０）

。水遊び　(1)水中ジャンケン(2)鯉の滝のぼり
(3)水中逆立ち(4)水中鬼ごっこ
(5)騎馬戦(6)ふやし鬼(7)猫とねずみ

。自由遊泳

。リレー（班対抗）

水が２１度程度で冷たかったので、体操や水あそびなどで、冷たさを感じさせないようにした。こどもたちは楽しんでゲームなどをしていた。また冷たい水中で、長く泳がせないように配慮した。

しかしながら、水泳大会は、こども達が当初から楽しみにしていた種目だから、期待度は大きかった。ここでも裸同士のスキンシップを、指導者とこども、またはこども同士でかわした。最後のリレーは、苦しいながらも、よく健闘した。泳げないこどもは、歩いたり、腕こぎで泳がせた。

。入浴（１６：００）

。夕食（１７：３０）

重箱弁当（とうもろこし、ゼリー、鶏肉など）

。キャンプファイヤー（19：30～21：00）

キャンプファイヤーは、事前の準備が大切であり、またたいへんでもある。とくに、各班の演じもの（うたやスタンツ・ゲームなど）は、事前に企画し準備し、練習しておかなくては、うまくいかない。各班とも班長をリーダーとして、話し合い、知恵を出し合って、計画、練習をしていた。練習は他の班に見られぬよう、本番まで知られないように、こっそり場所を変えて実施していた。班によっては、何をやってよいかわからない場合があったので、指導者と相談させ、ヒントをもらっていたようである。こども達が短時間に考えて実践するのだから、例え幼稚なものでも、ほめたたえてやることが大切である。

キャンプファイヤーが実際はじまるのは、すこし暗くなってからであるから、２０時近くになった。それまで、うたやゲームを楽しんだりした。

キャンプファイヤー

プロローグ　　うたやゲームなどの事前指導第一部　火を迎えるつどい

(1)　入場

(2)　夜のうた　トーチ入場（女神が持って）

(3)　営火長のことば。阿蘇のはなし

(4)　分火　誓いのことば（各班代表）

(5)　営火の祈り

(6)　点火　燃えるよ燃えろ合唱

(7)　詩のろう読

第二部　楽しいつどい（交換と親睦）

(8)　全員でうたやゲーム

(9)　各班の演じもの

(10)　全員でのうたやゲーム、おどり

第三部　火を送るつどい

(11)　静かなうた

(12)　営火長のことば

(13)　こども代表の感想

(14)　静かなうた・採火

(15)　送火　つどいをとじることば

こども達の心に強く残ったものに、キャンプファイヤーである。

それだけに、第１部と第３部のセレモニーは厳粛に、第２部は楽しく、愉快に、すなわち、静と動のたくみな演出がなくては、盛りあがらない。とくに、こどもの場合、長時間（１時間３０分以上）にわたると、あきがきてしまう。そのためこどもが、さわいだり、だらだらしたりすると、指導者が注意したり、しかったりする。しかり方によっては、こども達がしらけてしまうことがある。そこで、第二部の終りのほう、すなわち、なかだるみがくる時点に、はなやかな演じものを準備した。それは指導者５名による団結おどりである。なお、女神の選出は、

その日に一番近い誕生日の女子にお願いした。

キャンプファイヤー終了後、最後の夜でもあり、就寝時間は３０分延長し、２２時とした。

就寝（２２：００）

夜の時間は、こども同士各部屋ごとの交歓会をやったり、サイン帖を出し合って、サインをたのんだりしていた。こども達にとって、短い自由時間であるが、楽しく思い出をつくる貴重な時間であったといえる。

４日目

◦起床（６：３０）

こどもの中でも早くから目を覚すものがいて、早朝から便所や洗面所、廊下をあるきまわるのがいた。注意するとすぐやめるが、日頃の生活習慣になっている人もいる。そこで人に迷惑をかけないようにするようにと注意した。

◦朝のつどい（７：００）

◦朝食（８：００）

ご飯・みそ汁・つけもの・のり・卵

◦軽スポーツ（９：２０～１１：００）

ー昔の遊びをおぼえようー

(1) 竹馬つくりと竹馬のり
(2) 花いちもんめ
(3) なわとび（大波　小波　さざ波）
(4) 馬のり
(5) かわらけり
(6) かくれんぼ
(7) かんけり
(8) 動物リレー

青の遊びを教えようとしたのであるが、こども達の半数近くは知っていた。

まず竹馬づくりは、竹を切り、針金や縄をくくりつけて、竹馬をつくった。当初、のこやペンチ、小刀などで、けがをしないかと心配したが、予想外にけがはなく安心した。指導者に道具の使い方を、最初にわかりやすく、実施指導をさせたのがよかったと思う。

あそびの内容は、男子向き、女子向きがあり、小学生といえども、性差は考えねばならないと思う。事実、花いちもんめなどは、男子がいやがったし、女子は馬のりにちゅうちょしたことからもうなずける。

あそびに夢中になると、けがをしたりするので、ときどき休憩をとった。その間、便所へ行ったり、お茶をのんだり、指導者の話を入れたりした。

◦昼食（１１：３０）

チキンライス

昼食後、あずかっていた、こずかいをかえして、みやげを買う時間をあたえる。

◦閉校式

1. はじめのことば
2. 校長先生の別れのことば
3. 阿蘇白雲山荘代表別れのあいさつ
4. 日本交通公社代表別れのあいさつ
5. 指導者全員からひとこと
6. こども代表わかれのことば
7. 別れのうた
   (1)七つの子　(2)くつがなる
   (3)夕やけこやけ　(4)今日の日はさようなら
8. 退場（ほたるの光演奏のなか、指導者がつくったアーチをくぐる）

校長先生の別れのことばは、開校式で約束した３つの目標をどれだけ守れたか、楽しかった思い出をふりかえりながら、別れを惜しむ、そして、残された夏休みを大切にすることを話した。指導者全員がひとことずつ別れのことばを述べる。別れのうたは、こどもと指導者全員が円陣になり、手をつないで静かにうたう。今日の日はさようならをうたいながら、校長先生がこどもひとりひとりと握手、頭をなでながら別

れを惜しむ、このとき大多数の女子と、約半数の男子は涙ぐむ、なかには泣き出す女の子もいた。クライマックスは、ほたるの光の音楽のなかで、指導者のアーチをくぐる。別れのとき、泣き出す子が多かった。とくに、高学年は、感情的にセンチメンタルになりやすいのだろう。

。別れのセレモニーは、しめくくりの行事として、重要な意味づけをもっている。こどもに対する満足感、充実感をもたせてかえすことが、レクリェーション事業の企画としては、最も大切なことである。

。バス見送り

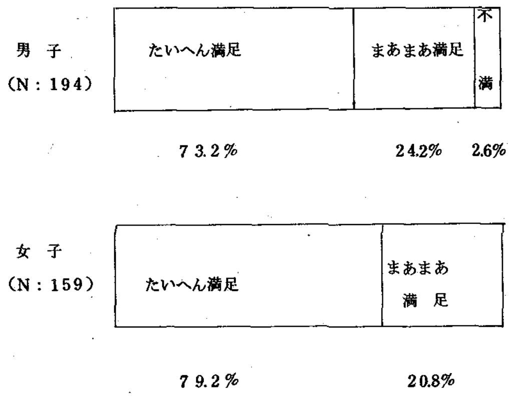
全員でバスのなかのこども達を見送る、また会おうなという気持をこめてである。

ここで健康管理面についてふれておこう。健康管理の立場から、看護婦を1名常時いてもらった。看護婦がいるという安心感は、こどもにとって大きかったようである。持病のあるこどもは事前に連絡していただき、家庭からの指示どおりにしてあげた。例えば、ぜんそくの場合の薬の飲ませ方などである。幸い睡眠不足からくる頭痛、かるい切傷程度で、病院のお世話になったこどもはいなかった。

表2　性別・学年別・満足度　昭和５３年度夏 あそこどもジャンボリー

	学　年	たいへん満足	まあまあ満足	不　　満
男子	4（42）	32人 73.4%	9人 24.5%	1人 2.1%
	5（58）	41　70.7	15　25.9	2　3.4
	6（94）	69　76.2	23　21.4	2　2.4
女子	4（23）	15　74.5	8　25.5	0　0
	5（82）	70　85.4	12　14.6	0　0
	6（54）	41　65.2	13　34.8	0　0

図1　昭和５３年度夏あそこどもジャンボリー
性別・満足度



評　　価

あそこどもジャンボリーのこどもの評価は表2、図1のとおりである。ほとんどが満足という結果であり、企画、運営、指導面からみて成功であったといえる（表2、図1）。

また、こどもの感想文による評価も、事実を正確にとらえていること、運営や指導など、よい点、悪い点をはっきり指摘している。とくに、各班担当指導者との親密度が深くなっていることである。今回の企画がうまくいった要因として指導者とこどもとの結びつきが、強かったことがあげられよう。こどもが日頃接する学校教師よりも、若くて活動的、めんどうをよくみる。スキンシップをはかる。つとめていっしょに遊ぶ、など日頃学校で、味合うことのできない指導をしたからであろう。

わずか3泊4日のふれ合いで、純真なこども達が目を輝やかして、喜び楽しむ姿は、レクリェーションとして十分であったといえる。

一方、場所的条件がよかったことも、成功の要因と思われる。雄大な阿蘇、神秘的な火口や噴煙〃広々とした高原や草原の景観をバックに思う存分、あそべたことは、思い出をつくるのにふさわしかった。

感想文

6年　古　賀　善　子

私は阿蘇子供ジャンボリーに来てよかったと、第一印象に思った。先生は、おもしろく、やさしく、親しくしてくれて、とてもうれしかったです。5班の友だちともすぐなかよくなり、班長として責任をもたされたり、いろいろなことを学び、いろんな行事もして、毎日が楽しかったです。

二重峠のワイドハイキングは、遠くてきつかった。でも山の上で牛をみたりゲームをしたり、けっこうたのしかった。先生と遊んだり、いたずらしたり、また、先生のくつをかくしたり、何もかもがおもしろく、思い出としてうきだされてきます。きもだめしでみんなが泣いた時、私は、「女はこれだから」と思いました。はじめ、こしひもをなげて「わ〜〜。」とおどろかすけど私達は「ばかばかしい。」といってしまったこと、とても悪く思いました。水泳大会の時、ぜんぜんふかいところへつれていってくれなかったけど、最後に、井野先生につれていってもらったこと、とてもうれしかったです。キャンプファイヤーで、ほかの人の前で出し物をしたこと、とてもはずかしかったけどいっしょうけんめい声を出しました。

先生といっしょにいろいろなことをしたけど、いちばんうれしかったことと言えば、やっぱり、やさしく、きびしく、親しく、おもしろくしてくれたことです。このかんげき、どうあらわせばよいのか言葉ではとてもあらわすことができません。とてもおもしろかった先生がた、どうもありがとう。来年もあればいいけどね。

6年　桜　井　靖　久

あそ子どもジャンボリーに参加してぼくは貴重な経験をしたと思う。なぜなら、友達がたくさんできたからだ。そして、先生がたがあたたかくむかえてくれたことも、その経験というようなものだと思う。ぼくは楽しかった。友だちというものの大切さがわかった。そして、きもだめしの時友達というものがたのもしく見えた。

そして、この4日間を「友情の日」と名ずけよう。ぼくは、この日のことをけっしてわすれないようにしようと思う。

このような楽しい日々は、30日の3人ものお金のふんしつで、たちまち暗くなった。しかしいずれも本人の不注意ということでほっとした。

ぼくは、この経験を生かして将来りっぱな社会人となるように努力しようと思います。

5年　山　下　映　子

私は、この阿蘇子どもジャンボリーに来てたいへんよかったと思います。そのわけは、見しらぬ人といっしょにくらし、毎日時間をむだにせずにくらせたからです。ワイドハイキング、キャンプファイヤー、スケッチ大会、たのしいことがあり、時間がたつのをわすれたくらいです。

でも、いやなこともありました。その一つは、きもだめしです。へやで、かいだん話を聞いてなく人もいましたが、私は、こわかったけど、はをくいしばってなきませんでした。でも実際道を行く前は、一番最後だったせいか、ばば先生や、秋吉校長先生からおどかされ、おもわずないてしまいました。私は、一時ばば先生がにくたらしかったけど、ぜんぶ私がこわいことにもたえる人間になるようにだとわかり感謝しています。

スケッチ大会では、あまりつかったことのないクレパスで書いて、自分ではまんぞくのいかない作品でした。でもたくさんの先生方からほ

められて、たいへんうれしく思いました。

このジャンボリーで学んだことを忘れません。

昭和53年冬あそこども ウインタージャンボリー

◦ねらい

ねらいは夏のこどもジャンボリーと同じであるが、冬休みを利用して、レクリェーション事業を企画、実践したものである。

1. 時　期

昭和53年12月24日(日)～27日(水)

2. 対　象

小学校4年、5年、6年の男女、一部3年が含まれている。参加者は135名、参加地域は、九州一円にまたがっている。

3. 場　所

熊本県阿蘇郡阿蘇町赤水、阿蘇白雲山荘を中心に、阿蘇山中岳火口付近、草千里などである。

4. プログラム（日程）

プログラム（日程）は表3のとおりである。プログラム作成にあたっては、現地下検分打合せ2回、ほか日本交通公社福岡エースセンター担当者との打合せを数回持つ（表3）。

表3　昭和53年あそこどもウインタージャンボリー

12月24日～27日

（時刻目盛：6　7　8　9　10　11　12　13　14　15　16　17　18　19　20　21　22）

1日目	ー到着ー	開校式	親睦のつどい		入浴	夕食	工作（たこつくり）	就寝（おやすみ）				
2日目	ーおはようー	朝のつどい	朝食		阿蘇山登山 ・宇宙冒険 ・ハイキング	昼食	・くま祭り ・たこあげ大会	入浴	夕食		クリスマスのつどい	就寝（おやすみ）
3日目	ーおはようー	朝のつどい	朝食	アイススケート		昼食		・もちつき大会 ・やきいも	入浴	夕食	・怪談ばなし ・屋内ゲーム大会	就寝（おやすみ）
4日目	ーおはようー	朝のつどい	朝食	アイススケート 軽スポーツ	昼食	別れのつどい	さようなら					

5　評　価

1. 自由記述による感想文
2. 指導者（スタッフ）全員討議による評価

6　結果と考察

指導者（指導員、看護婦など）延16名の事前打合せ、オリエンテーションを2回実施、夏のジャンボリー参加指導者を優先した。というのは、夏に参加したこども達が、冬のジャンボリーで先生達にぜひ会いたい、先生達がくるなら参加したいという希望が強かったからである。

夏の企画と違って、冬の季節的な特徴をいれたプログラムを組んだ。そこでプログラムの内容を指導できるメンバーであることが、指導者の

条件となる。

こどもウインタージャンボリーの目標は、夏と同じく、(1)きびしく、(2)なかよく、(3)たのしく、の３つにきめた。

さて、遊べないこどもが、増えている事実は認めなければならない。昔にくらべて、あばれまわれる山野や河川も少なくなった。勉強や塾、おけいこごと、それにテレビ視聴が、こどもの遊びを少なくしたともいえる、とくに、都市や団地に住むこどもは、遊ぶことでも、仕事することでも、勉強することでも、力いっぱいやることができない。すなわち、「きびしさ」にたえることができないのである。

つぎに、一人ではかしこくなれない。すばらしい仕事やスポーツもできない。お互いささえあい、せっさたくましていく中で、ほんとうの人間的喜びがあることを知らない。そこで「なかよく」は人間的な連帯感をもたせることを強調した。

さて、小学生の親から、よく「勉強もしないで、遊んでばかりいる」という声を聞く。全力を傾注して遊べない子どもが、全力を傾注して勉強できるだろうか。幼児の頃から、心ゆくまで遊べなかった欠乏感が、積極的な学習や、仕事、スポーツへの取り組みを困難にしているのではないかという疑問もなりたつ。よく学び、よく遊ぶが双補的であればこそ、こどもの生活は生き生きとしてくる。今回の企画は、とりもなおさず、よく遊ぶ方法を学ぶことにあるといってよい。

第１日目

夏のこどもジャンボリーと同様、１２時頃阿蘇白雲荘にこども達が到着、班分け、部屋割などすませて、昼食させる。昼食はチキンライスである。

開校式（１３：００～１３：３０）

(1) はじめのことば
(2) 校長先生のあいさつ
(3) 阿蘇白雲山荘歓迎のことば
(4) 日本交通公社歓迎のことば
(5) こども代表約束のことば
(6) 指導者（スタッフ）紹介
(7) 諸注意
(8) 日程説明
(9) おわりのことば

開校式終了後１０分程休憩して親睦のつどいをする。

◦親睦のつどい（１３：４０～１５：００）

(1) 歌合戦（うさぎとかめ対浦島太郎）
(2) ポーキ、ポーキ
(3) ウルトラマンゲーム
(4) お弁当箱（手あそび）
(5) ジャンケン　ゲーム
　(イ)男女対抗　(ロ)班別対抗　(ハ)地域別対抗
(6) うた
　(イ)森の熊さん　(ロ)雪山讃歌
(7) 団結おどり

今回は１３５名という多人数のため、夏のジャンボリー（各回１００名程度）の場合より、親睦のつどいに力を入れた。とくに、男は男同士、女は女同士、親しくなることが多いので、異性を知り、なかよくなるようなゲームをとり入れた。

また、夏のジャンボリーに参加したこどもも、多数きたので、彼等の興味をひくような種目をとりいれ、あきがこないようにした。

入　浴（１６：００）

入浴は班別、性別に実施した。なかには恥しいため、海水パンツをはいて入浴しようとしたこどもも数名いたので、当然ながらぬがせた。

◦夕食（１７：３０）

狩場鍋

。たこつくり（19：00～20：30）

各班別に、たこつくりをはじめる。たこは一応材料を用意していたので、比較的早くできた。問題はたこに絵を描くことである。どんな絵を描くのか、阿蘇の大空にあげてめだつものがよい。ということで。先生の顔や、自分の顔、あるいは、花、鳥など、班ごとに知恵を出し合ってつくりあげた。自分たち自身の発想で、品物をつくり出すのはよかったと思う。

。就寝（21：30）

就寝に至るひとときは、こどもにとって、最も楽しい自由時間といえる。禁止してはいるが、まくらなげ、ざぶとんとり、すもう、トランプなどこども同士が、部屋ごとに楽しんでいた。

2日目

。起床（6：30）

。朝のつどい（7：00）

早朝は寒いので、かけあし、班ごとのゲームなどで、身体をよせあい、からだを暖めあった。

。朝食（8：00）

ごはん・みそ汁・のり・卵

。宇宙冒険ハイキング（9：00）

貸切バスで、阿蘇中岳の阿蘇神社、ロープウェイの登り口まで行く、入口から火口までの約1Kmは歩いて登れる。雪が30cm程度深いところでは50cm位つもっていたので、こども達は大喜びであった。ところが、雪深い急坂の山を登るのは、たいへん苦しいことであった。こども達は道なき道をあえぎながら、そして雪のなかをころびながら火口へと登った。

山上では、指導者2人がシルバグレイの宇宙服を着て待来していた。こども達は、予期しない宇宙人の出現に大喜び。"宇宙人"をついせきして、火口周辺を走らせた。最後は"宇宙人"に雪を投げたり、つかまえてかく闘したりして、やっつけた。

広大な火口付近での冒険ハイキングはあたかも宇宙世界のごとき幻想を、こどもに味合せた。うまく成功した。

最後に、指導者対こども達との雪合戦をやった。谷間から多人数のこども達、その上の岩かげから20名の指導者、距離にして約25mの雪合戦は、こども達を最高潮に喜ばせ、すばらしい闘志をかきたてた。こども達はかん声をあげ、わきにわいた。

昼食（12：00）

草千里のレストハウスで、弁当を開いたが、空腹のため、全部たべてしまった。普通ならば好き嫌いな食物を残すはずなのに、全員がペロりと食べてしまったのには驚いた。

。くま祭りと、たこあげ大会（13:00～15:00）

くま祭りは、ほんとうのくま1頭を、阿蘇くま牧場から借りた。また、くまのぬいぐるみ1頭を京都の貸衣しょう屋から借りた。アイヌのくま祭の衣しょうも、くま牧場から借りた。事前に練習していた、くま祭りの踊りを、こども達に踊ってみせた。アイヌの酋長が、神への祈りりをささげ、「イヨマンテ、ウポポ、ポロランランラル、ウハラハ、カパチェポ、ヌフイニフフ、バハイポポ」と、わけのわからぬ勝手なことばをならべると、こども達は、大喜びであった。くまをまんなかに、アイヌの酋長とメノコが、きみょうな声をあげて踊ると、こども達も輪になって踊った。またほんもののくまは、こどもの人気を呼んで、大もてであった。この企画はまったくあたったと思う。

さて、たこあげは、最初困った。雪の草千里は、大雪原とかわって、雄大であったが、風がとまっていた。そのためたこがあがらなかった。せっかくの手づくりたこを、とばすのに苦労した。低い丘の頂に登って風をまった。幸い風が

吹きはじめ、草千里一体に約１４０個のたこがまいあがった。こども達は、自分でつくったたこをあげるため、草原を走った。雪で、着ていた服や、靴がぬれて困るのを忘れた位である。連だこをあげたこどもが、３人程いたが人気の中心であった。

大自然のなか、しかも雪のなかで、全員であげた、たこ合戦はたしかに成功であったと思う。

阿蘇白雲山荘へは３時半頃に帰りついた。

◦入浴（１６：００）

入浴後、各班ごとに、クリスマスパーティ第２部楽しいつどいの演しものの練習をした。

◦クリスマスのつどい（１９：００〜２０：３０）

第１部キャンドルのつどい

(1) 全員入場
(2) うた（聖しこの夜）
(3) キャンドル入場（女神）
(4) 校長先生のことば
(5) 分火、誓いのことば（各班代表）
(6) キャンドルへの祈り
(7) 詩のろう読
(8) うた（ジングルベル）

第２部　立食パーティ

立食パーティは、デコレーション大ケーキ８個、フルーツポンチ、すし、ローストチキン、サンドウィッチ、串かつ（その場であげる）、三色にぎり、煮もの、サラダ、ジュース、みかんなど自由に食べれるだけ、食べさせた。ひととおり食べ終った頃サンタクロースが登場、こども達は大喜び。サンタクロースは、クリスマスのいわれを話し、クリスマスプレゼントをこどもにあげた。

第３部　交換のつどい

別の大広間へ移り、各班の演しものをやってもらった。全部で１７班あったので、かなりの時間がかかった。こども達独自で考えたものだけあって、こども同士が喜んだ。大人にとって、たいした演しもくでなくても、こども同士では、愉快であったり、しんけんであったり、楽しそうであった。

◦就寝（２１：３０）

よるは、２３時まで暖房が入っている。その後阿蘇は冷えこむので、指導者を各部屋に回らせ、健康管理に注意した。

３日目

◦起床（６：３０）

◦朝のつどい（７：００）

◦朝食（ご飯・みそ汁・のり・卵）

◦アイススケート（９：００〜１１：００）

アイススケートは、はじめて滑るこどもが約半数、そのため、初心者グループと、経験者グループに分けて指導する。経験者グループは、上級と中級の能力別に分けて、指導した。初心者は７班に分けて初歩から指導した。

初心者は、(1)ころび方の練習、(2)歩く、(3)滑走という手順で、短時間にマスターさせなければならない。滑れるようになるためには、きびしく指導した。それでも、こども達はお互い手をつないだり、ひっぱってもらったり、ころんだりして、楽しんでいた。

最後に、全員で氷上ゲームとリレー滑走をした。初心者のこどものうち約半数は滑れるようになった。こども達は、屋外リンクでのアイススケートに満足していたようである。

◦昼食（１２：００）

チキンライス・スープ

◦もちつきとやきいも大会（１３：３０〜１５：００）

屋外ガーデンに、うす４台を用意した。実際にせいろで餅米をむして、餅をついた。はじめてきねを持ち、餅つきするこどもが大半であった。それだけに、みんな楽しそうであり、また、

しんけんでもあった。班別に、餅をつくこども、まるめるこども、あんこを入れるこども、きなこにまぶすこどもなど、みずから「つくる」ことを満喫していた。つきあげた餅は、その場でほとんど食べてしまった。

焼いもは、丸のまま、たき火のなかに入れて焼くため、多少時間がかかった。こどもは、焼きかげんをみるため、何度も灰のなかから、いもを出して焼けぐあいをみていた。結局、食べる頃には、くろこげになっていたり、泥まみれになったりしたが、おいしそうに食べていた。

餅にしても、焼いもにしても、家庭では、つくってたべるまでの経験が少なくなっている。こどもにとって、初めての経験であった子が多く、それだけ成功したといえる。

◦入浴（１６：００）

◦夕食（１７：３０）

中華定食

◦屋内ゲーム大会（１９：００～２０：００）

(1) ジャンケン　まわれ

(2) ジャンケン　小さくなあれ

(3) ジャンケン　またひらき

(4) ジャンケン　くすぐり

(5) 西部劇　ジャンケン

(6) ボートこき競争

(7) 動物リレー

(8) 輪ゴムわたし

ゲームにはこども達が、なれてしまっているので、できるだけ、新鮮に、手早く、あきがこないように指導した。

◦怪談ばなし（２０：００～２０：４０）

怪談ばなしは３つのグループに分けた。

(1) 夏にジャンボリーにきたこども

(2) それ以外の男子

(3) 〃 女子

夏にジャンボリーにきたこどもは、怪談話の事情を知っているので、はじめてきたこども達と分けて実施した。それ以外の男子と女子では、話の内容をかえること、今一つは、多人数では恐怖心をひき出すのに苦労するからである。

怪談とはいうものの、あらかじめ、部屋のなかに、おばけやゆう霊を用意して、話がクライマックスにたっした時に出すようにした。ローソク１本のあかりのなかで、こども達をよりそわせ、こわい話をして行く、途中、擬音をつかって一層恐怖感をつのらせる。最後のクライマックスには、恐怖のパニック状態をつくりあげた。

怪談話もみごとに成功した。問題はあまりにものこわさに、便所へ行けないこども、１人でねむれないこどもなどが、連鎖反応のようにでた。あまりこわくしないと、不満がるこども、少しでもこわいと泣き出すこどもなど、恐怖心には個人差があるのでつかみにくい。それだけに、怪談話はむずかしいと思った。

◦就寝（２２：００）

４日目

◦起床（６：３０）

◦朝のつどい（７：１０）

◦朝食（８：００）

ご飯・みそ汁・のり・卵

◦アイススケートと軽スポーツ（９：００～１１：００）

アイススケートは、前日実施したが、希望者が多いので、当初の予定を変更して、希望者のみを再び実施した。その結果、軽スポーツ希望は３０名になった。

軽スポーツは

(1)輪なげ、(2)的あて、(3)バタカ、(4)陣とり、などである。

軽スポーツは、少人数でできたことと、指導者を５名ほどつけたので、こども達は喜んでい

た。

◦昼食（11：30）

お子さまランチ

閉校式（13：00～13：30）

1. 開会のことば
2. 校長先生の別れのことば
3. 阿蘇白雲山荘代表別れのあいさつ
4. 日本交通公社代表別れのあいさつ
5. こども代表の別れのことば
6. 指導者の別れのことば
7. 別れのうた
   (イ)七つの子　(ロ)くつがなる　(ハ)夕やけこやけ　(ニ)今日の日はさようなら

校長先生は、こども達が当初の目標を守れたかどうか聞いた。そして4日間をふりかえり、こども達の満足感をたしかめた。別れのうたのとき、校長先生は、こども全員と握手、一人一人の頭をなでた。こども達は、「先生どうもありがとうございました」、「来年もお願いします。また来ます」とあいさつした。こどもの顔には、涙がひかるものが多かった。わずか3泊4日のふれあいで、純真なこども達の涙を誘うことができてよかった。ドライといわれる現代っ子のウェットな一面を、かい間みると同時に、人間関係の大切さを改めて痛感した。

評　価

こども達の感想文にみられるとおりである。ほとんどのこどもは、よかった、満足した、楽しかった、こわかった、と評価している。

指導者の全員討議のなかでも、企画、運営がよかったというのがみんなの声であった。

反省すべき点は、集合時間がややルーズになったこと、パーティの食事がたべきれなかったこと、男女の交流をもっとはかったら、などの意見に集約された。

感想文

5年　宮　嶋　晴　子

わたしがこのあそウインタージャンボリーで一番心に残ったことは、やっぱり友達のことです。いつでも、どこをみても友達。わたしたちの班はみんなじょうだんがきくたのしい友達ばかりです。けれど初めてきた時わたしと仲よしの友達と班は別れた。このとき、「こういうことになるならこないほうがよかった。」と思ったこともありました。けれど、きたとたん仲よくなり心の中ではほっとした。それから友達との楽しい生活が始まった。みんなでたこをつくったり、みんなで部屋を整理したこともありました。ときには先生をからかってこまらせたこともありました。しかし、楽しいことばかりではなく、苦しいこと、かなしいこともありました。あそ山の雪、それはわたしたちをおもうぞんぶん苦しめているように思えました。足はこおり、足が動かず、死ぬ思いでした。そしてかいだん話。こわいときは、「先生はわたしたちばかりいじめて……。」と思ったけれど、今思うとなんとなく親しみを感じます。

友達とキャーキャー言ったりゲラゲラわらったり、ときにはシクシクきこえる人もいました。けれどとても楽しく、きびしく、なかよく心に残るあそのこどもジャンボリーでした。

5年　森　　晋太郎

ぼくは、三ぱく四日のウインタージャンボリーで特に楽しかったのは、あそ山の冒険ハイキングとかいだん話でした。

あそ山の冒険ハイキングの時、たくさん雪がつもっていました。あんなにたくさんつもっていたのを見たのは初めてでした。その上を歩いてのぼりましたが、苦しくてなきそうでした。でも火口の近くで先生たちと雪合戦をしたのが楽しかった。

草千里でのたこあげで試しに上げた時は、全然上がらなかったが、そのうちだんだん上がるようになった。高く上がるようになってとてもうれしかったけれど、本当にみんなで上げる時になってしっぽがとれて上がらなくなり、残念でした。

かいだん話のとき、おばけがにせものだったら「八百長.／」と言ってやろうと思っていたけれどそれどころじゃありませんこわくてたまりませんでした。校長先生が、黒川の墓地に連れていくといった時はこわかったけれど、終ってから先生が、「今日は中止。」といったので、「やっぱり。」と思ってほっとした。それで、その日はこわくて全然ねむれないと思っていたけれど、三泊のうちで、一番ぐっすりねむれました。

アイススケートなどとにかく思い出に残るウインタージャンボリーでした。

54年度夏あそこどもジャンボリー

1. 時 期

昭和５４年７月２２日(日)から８月１２日(日)までを６回に分け、１回３泊４日で実施した。

１回目　７月２２日(日)～７月２５日(木)

２回目　７月２５日(木)～７月２８日(土)

３回目　７月２８日(土)～７月３１日(火)

４回目　８月　３日(金)～８月　６日(月)

５回目　８月　６日(月)～８月　９日(木)

６回目　８月　９日(木)～８月１２日(日)

2. 対 象

小学校４年、５年、６年の男女、なお、昨年度参加した中学１年女子が５名参加した。また、３年が数名参加した。１回から６回まで合計５４２名である。参加者の地域別では、福岡、北九州市およびその周辺、鹿児島、長崎（対島）の順に多く、熊本、大分、宮崎（都城）、佐賀久留米、大牟田などであった。

3. 場 所

熊本県阿蘇郡阿蘇町赤水、阿蘇白雲山荘を中心に、阿蘇山中岳、草千里などである。

4. プログラム（日程）

プログラムは表４に示すとおりである。プログラム作成にあたっては、現地下見打合せ２回

表４　昭和５４年　夏のジャンボリー

日 程 表

（時刻目盛：6　7　8　9　10　11　12　13　14　15　16　17　18　19　20　21　22）

1日目		到着 昼食	開校式 親睦のつどい		入浴	夕食	バンドと共にうたおう、ゲームしよう。	ーおやすみー		
2日目	ーおはようー	朝のつどい	朝食	阿蘇アドベンチャー 登山	昼食 草千里で軽スポーツ（野外クッキング）		入浴	夕食	グループ秘密活動 きもだめし	ーおやすみー
3日目	ーおはようー	朝のつどい	朝食	手作りであそぼう いかだ遊び	野外パーティー（バーベキュー）	いかだ遊び 手づくりであそぼう		入浴	夕食	キャンプファイヤー	ーおやすみー
4日目	ーおはようー	朝のつどい	朝食		プールで遊ぼう（水泳大会）	昼食	別れのつどい			

日本交通公社福岡エースセンター担当者との打合せをした。

今年のプログラム作成に留意したのは、昨年度、人気のあった内容は残こす。怪談ばなし、キャンプファイヤーなどである。また、こどもの要求に合った内容をもりこむ。いかだづくりといかだのり、野外手づくりクッキングなどである。

5. 評 価

(1) 自由記述による感想文

(2) 質問紙による事前、事後評価

(3) 指導者全員討議による評価

6. 結果と考察

指導者（指導者、看護婦など）延２５名の事前打合せ、オリエンテーションを２回実施、また、７月２１日の１回目の前日、指導者を現地に集合させ、準備にあたらせた。

今回のジャンボリーも、目標を３つにおいた、内容は従来のものと同じで、(1)きびしく、(2)なかよく、(3)たのしく、である。

生活パターンは、過去、２回実施したものを変えないで行った。

◦１日目

北九州および福岡から貸切バスで到着するのが１２時すぎである。ただちに昼食させた。２回以降は、同一日に閉校式と開校式をやるので、時間的に苦労した。開・閉校式には、指導者全員があたるためである。

食事後、あらかじめ班分けしているので、名札とジャンボリーのＴシャツ（個人名前入り）をくばり、班ごと宿泊部屋へ案内した。

健康状態については、看護婦を中心に、毎日観察し、疾病やケガの報告をさせた。なお、救急急用の部屋を１部屋もうけて、看護婦をそこにおいた。

◦開校式　(13:00～13:30)

(1) はじめのことば

(2) 校長先生のあいさつ

(3) 阿蘇白雲山荘代表歓迎のことば

(4) 日本交通公社代表歓迎のことば

(5) こども代表約束のことば

(6) 指導者の紹介

(7) 諸注意

(8) 日程説明

今回は、阿蘇こどもジャンボリー用のそろいのＴシャツを、指導者、こども全員が着用した。

◦親睦のつどい（１３：４０～１５：００）

1.なかよし、ジャンケンゲーム

(イ) 校長先生とジャンケンしよう

(ロ) 勝抜きジャンケン

(ハ) グーチョキパー

(ニ) 両手両足ジャンケン

(ホ) ジャンプ、ジャンケン

(ヘ) お尻あわせジャンケン

2. せっしゃの刀はさび刀

3. すもうゲーム

4. うた（紅白尻とりうた） 5. 団結おどり

なんといってもジャンケンゲームが導入にもってこいである。対人ジャンケンから、集団ジャンケンへ移行、再びスキンシップをともなうゲームを実施した。

こども達が、なかよくなるのは早い。とにかく、異性を意識させないで、すばやく導入すれば、盛りあがりも早いのである。

つぎに、全員の名札をとりはずして、お互いの名前を覚えさせる。当初、自分の所属する班員の名前を覚えさせ、ついで別の班員の覚えさせる。名前を覚えさせるのは、親しくなる有力な手段である。

親睦のつどいは、こころとからだのスキンシップが中心になるのである。

◦入浴（１６：００）

◦夕食（１７：３０）

狩場鍋

ここで自由時間のあそびについてふれておこ

う。少ない自由時間を上手にあそぶように指導する。こども達は、あらかじめトランプなど、遊び道具を持ってきている。各部屋ごとで、トランプをしたり、ざぶとん取りゲーム、なかには禁止しているのに、まくらなげ、ベランダまわり、ふとんむしなどこども同士が経験をとおしてあそんでいた。また、指導者へ自由時間は、各部屋をまわって、こども達とあそぶように指示していた。

考えてみると、あらかじめ決められた、あそびもたのしんだが、短い自由時間での、自由なあそびもまた、こども達のたのしみの一つであったといえる。

◦うたとゲーム（19：00～20：30）

1. うた（歌唱指導）
   (1)森の熊さん、(2)四季の歌
   (3)遠き山に火はおちて、(4)燃えろよ燃えろ、(5)今日の日はさようなら、(6)アルプス一万尺
2. ゲーム
   (1)ゴム輪送り、(2)肩たたき
3. バンド演奏とともにおどろう
   (1)YMCA、(3)ビューティフルネーム
   (3)燃えろいい女、(4)ピンクタイフーン
   (5)銀河鉄道999
4. おどりユーポイヤイヤイ
5. 団結おどり（エイホーエンヤラヤー）
6. エール交換（各班ごとに全員）

阿蘇白雲山荘の広い芝生の庭で、西南大学バンドとともに、あそんだ。バンド演奏は、こどもの知っている流行歌を中心にしたので喜んだ。うす暗い星空のもとで、うたったり、おどったり、ゲームしたりするのは、白昼とちがって意外に導入しやすいし、はにかみやのこどももすっかりとけこんだ。

◦就寝（21：30）

2日目

◦起床（6：30）

◦朝のつどい（7：10）

◦阿蘇アドベンチャー登山（7:50～11:00）

当初の計画では、中岳火口へ登山の予定であった。しかし、中岳爆発のため登山規制をされたので、ロープウェイ下の広場までしか行けなくなった。そこで、まず米塚登山にきりかえた。貸切バスで米塚のふもとまで行き、ふもとから米塚へ登った。海抜940ｍとはいうものの、米塚のふもとからは約150ｍ、時間にして10分程度、急坂できついが、登りやすいので、こども達は一息で登った。山頂は直径40ｍ位の火口あとがあり、火口周りを散歩しながら楽しんだ。

山頂から全員で、それぞれの、ねがいごとやいいたいことを大声でさけんだ。あるこどもは、「おかあさんー。」といい、別のこどもは「水のみたい」「阿蘇はきれいだー。」「おなかすいたー。」などさまざまな言葉がきかれた。山頂での発声は、気分転換、欲求不満の解消などを求めて、意図的に実施したのである。

米塚登山後、バスで中岳のふもとの、ロープウェイターミナル博物館食堂で朝食をとった。朝食はおにぎり3色3個、おかずは、ちくわ、するめのつくだに、こんにゃく、肉、つけもの、などである。おにぎりのつつみには、竹のかわをつかった。竹のかわのつつみは、昔はつかわれていたが、現在はほとんどつかわれていない。こども達は、竹のかわをめずらしがって、これはなんでできているのですかと質問した。こどもの質問に応じて、昔のおにぎりのことなどを説明した。

朝の米塚登山で、すっかり空腹になっていたので、おにぎりはほとんど食べた。朝食として

は、めずらしい食欲である。毎日の生活では、朝起きて、ほとんど仕事なしの食習慣がついているため、空腹時のおいしさを満喫したといってよい。

食事後、班別に指導者とともに、アドベンチャーに出かけた。火山灰の降る山道をあちら、こちらまわって、新しい発見をしていた。また、目の前で、雄大な噴煙をみて、阿蘇のすばらしさ、火山の不思議さを感じていたようである。

◦野外クッキング（12:30～13:30）

中岳のふもとから、草千里へ移動し、野外クッキングの準備にとりかかった。

草千里は、国定公園内にあるため、当初、野外でのたき火を禁じられた。そこでガスボンベを使用することで許可を得て、野外でカレーラレーライスづくりにとりかかった。あらかじめご飯は炊いていた。そこで、カレーづくりをはじめた。そのための用具の準備は、全員で手分けして運んだ。

カレーづくりは、男女別に分け、それぞれ準備した、カレーを混ぜるもの、ご飯をつくるもの、カレーを盛るもの、みんなの協力によって、おいしいカレーができた。

阿蘇五岳の1つ、烏帽子岳をみながら、野外で手づくりのカレーを食べるのは、こども達にとって最高の思い出になったと思う。最後にデザートの西瓜を食べ食事を終った。

◦ワイドスポーツ（13:30～15:00）

(1)宝さがし、(2)すもう　(3)ジャンケンリレー、(4)指導者とのかけっこ、(5)アーチェリー

宝さがしは、やはり人気があった。広い草千里に、番号を書いた紙をかくし、さがさせた。その紙をさがしあてたものを読みあげ、賞品をわたした。1等、女子の先生におんぶしてもらって、みんなのまわりを1周する。2等、先生のさかだち、3等、先生がくまのまねをしてうたう。などで賞品はキャラメル1個、ガム1個と最小限にした。

こどもが一番喜んだのは、アーチェリーであった。野外に的をつくり、初めて経験するアーチェリーの矢を引かせた。思うようにとぶもの、予想外のところへとぶもの、意外に力がいることを知ったようである。

◦入浴（16：00）

◦夕食（17：30）

中華料理（酢豚、シューマイ、春雨のスープ、西瓜など）

◦グループひみつ活動

1. UFO探検

阿蘇山で写されたUFOの写真の説明をする。あらかじめ、それとなく阿蘇山博物館でUFOの写真をみんなにみせておいた。

UFO探検の場所を説明、近くの森へ案内する。指導者がふんする宇宙人を出現させ、トランシーバーの交信によってあたかも宇宙人が話ししている状況をつくる。これには、カラクリを知らぬこども達は、本当だと信じて驚く。また、UFOからのおくりものとして、花火をうちあげた。

この探検は、ひみつだから、参加したこどもに、明日までだまっておくことを約束させた。UFO探検は、きもだめしをこわがる人が中心になったが、やはり宇宙人の出現が、おもしろかったようで、宇宙人に近よるもの、こわごわさわるものなど、スリル満点であった。

2. 怪談ばなしときもだめし

怪談ばなしときもだめしは、希望者に限った。まず、怪談ばなしは、2班に分け、非常にこわい話、ややこわい話にした。こどもは、恐いものへの興味がつのり、話の途中で泣きだすもの、きもだめしに行くのはいやといいだすもの、平

気でいるものなどさまざまであった。

実際、きもだめしの現場に行くのは、そのなかの約半数であった。2人1組で、おばけの出る場所へ行かせたが、お互いこわごわとして、先をゆずり合っていたようである。まわって帰えりついたあとも、恐怖感が残り、就寝の時間まで、おばけの話をしていたようである。恐い経験のあと、こども達は、なかなか寝つけなかったようである。

◦就寝（21：30）

3日目

◦起床（6：30）

◦朝のつどい（7：00）

◦朝食（8：00）

ご飯・みそ汁・のり・卵

◦手づくりであそぼう（9:00〜11:00）

(1)水鉄砲、(2)竹馬、(3)紙鉄砲、(4)いかだ

自分の手で、実際になにかをつくることは、こども達にとって、興味あることである。野外工作として、ノコ、小刀、ハサミ、カナツチなどを使用させて、手づくりさせた。

いかだは、あらかじめ、板を組み、ドラム管を板の下にしいて、浮力をつけておいた。こども達は、板の上にたてる竹などをつくった。

いかだは、阿蘇白雲山荘のまわりの、堀にうかべて、自分達でこがせた。長い竹をあやつりながら、人を乗せたいかだをこぐのは、力の入る仕事であった。こども達は、いっしょうけんめいにこいだ。

水鉄砲、紙鉄砲も、実際に使用してた。また、竹馬はつくったものを乗りまわして、楽しそうであった。

◦野外パーティ・バーベキュー（12:00〜13:00）

広い庭の芝の上で、肉、野菜、とうもろこし、しいたけなどを、4〜5人のグループごとに自ら焼いて食べた。自分達の好きな程度に焼き、それぞれを好きな程度食べた。みんなおなかいっぱいになったといっていた。ご飯や、デザートの西瓜は、食べきれなかったようである。

◦昼寝（13：30〜14：30）

昼寝ののちに、各班ごとにキャンプファイヤーの演しものの練習をした。各班とも独自な演しものを考え、練習したのは、チームワークづくりくりに役立った。

◦入浴（16：00）

◦夕食（17：30）

重箱定食　スープつき

◦キャンプファイヤー（19：30〜21：00）

1. 第1部　火を迎えるつどい
   (1) 全員入場
   (2) 夜のうた、トーチ入場（女神）
   (3) 営火長のことば・阿蘇のはなし
   (4) 分火　誓いのことば（各班代表）
   (5) 点火　詩のろう読
   (6) うた　燃えろよ燃えろ合唱

   第2部　たのしいつどい
   (1) 全員でのうたやゲーム
   (2) 各班の演しもの
   (3) インディアンのおどり（指導者）
   (4) 団結おどり

   第3部
   (1) 静かなうた
   (2) 営火長のことば
   (3) こども代表のことば
   (4) 静かなうた　採火
   (5) 送火（ほたるのひかり）
   (6) 全員退場

こどもの事前調査をみても、キャンプファイヤーに対する人気は高い。また、それだけ期待も大きいので、指導者も全力をあげて指導した。

薪を燃やすので、風向きによっては、火のこがふりかかるため、途中こども達を一部移動させたりした。

◦就寝（２２：００）

４日目

◦起床（６：３０）

◦朝のつどい（７：００）

◦朝食（８：００）

ご飯・みそ汁・きんぴらごぼう・大根おろし・ゆで卵

◦水泳大会（９：３０〜１０：３０）

1. 準備体操

2. 水遊び

(イ)鯉の滝のぼり、(ロ)騎馬戦、(ハ)ふやし鬼

(ニ)水中逆立ち、(ホ)ねことねずみ

(ヘ)水中鬼ごっこ

3. 自由水泳

4. 班別対抗リレー

高原のプールは、わき水であるため、水温が２１度位までになる。とくに、朝の間泳ぐのだから一層冷たく感じる。午後に変更しようと考えたが、午後も水温がほとんど上昇しないので、予定どおりに実施した。

水温が低いため、こどもの口びるや、寒がる状態によって、泳ぎをやめさせ、風呂に入れた。それでも三分の二程度は最後まで泳いだ。

◦感想文を書く（１１：３０）

◦昼食（１２：００）

親子どんぶり

◦閉校式（１３：００〜１３：３０）

1.閉会のことば

2.校長先生の別れのことば

3.阿蘇白雲山荘代表わかれのあいさつ

4.日本交通公社代表別れのあいさつ

5.こども代表の別れのことば

6.指導者のわかれのことば

7.別れのうた

(1)七つの子、(2)くつがなる、(3)夕やけこやけ、(4)今日の日はさようなら

8.退場（校長先生がこどもの頭をなでながら１人１人と握手、指導者がつくったアーチをくぐりながら全員退場する。）

ほたるの光の音楽を流す

こども達は別れを惜んで涙をこぼす。なかには声をたてて泣く女の子も多い。３泊４日のフィナーレにふさわしい感激、惜別のひとときである。

◦貸切バスなどで帰るこども達を、指導者全員および阿蘇白雲山荘の人たちで送る。

評価

表５によると、あそこどもジャンボリー参加の動機は、男子で父母にすすめられて、30.9%女子は／友人にさそわれてが44.2%と多い。ついで男子は／友人にさそわれて、26.8%。女子は父母にすすめられて23.6%となっている。新聞テレビやパンフレットなどは、男女とも12〜13%で予想外に少ない。その他は、自分からすすんで、学校の先生からすすめられて、などである。友人にさそわれて、お互い参加しようといったのが、断然多いこども同士による口こみが、大きかったといえる。

表６によると、参加の目的は、男子で楽しくあそぶため63.9％、ついで友だちをつくるため57.7%、集団生活に慣れるため43.3%、自然に親しむため42.3%、体力をつけるため32.6%などの順になっている。女子は友だちをつくるため74.0％、楽しく遊ぶため69.8％がめだって多い。ついで、自然に親しむ53.7％、集団生活に慣れるため45.5％などとなっている。男女とも、楽しくあそび、友だちをつくるために参加したものが多い。

表5　参加の動機　昭和54年度夏あそこどもジャンボリー

	父母にすすめられて		新聞・テレビやパンフレットなどによって		友人にさそわれて		その他	
男子（291人）	90	30.9%	40	13.7%	78	26.8%	83	28.6%
女子（242人）	57	23.3%	29	12.0%	107	44.2%	65	26.9%

表6　参加の目的　　昭和54年度夏のあそこどもジャンボリー

		友だちをつくるため	体力をつけるため	規則正しい生活をするため	自然に親しむため	集団生活に慣れるため	楽しくあそぶため	その他
男子		168	95	61	123	126	186	11
(291)		57.7%	32.6%	21.0%	42.3%	43.3%	63.9%	3.8%
女子		179	68	43	130	110	169	19
(242)		74.0%	28.1%	17.8%	53.7%	45.5%	69.8%	7.9%

表7は、あそこどもジャンボリーで、楽しみにしている活動を事前調査したものである。表7によると、男子では、きもだめし、67.0%、水泳大会58.1%手づくりであそぼう57.0%、軽スポーツ51.2%、ひみつ活動50.5%、キャンプファイヤー47.4%、アドベンチャー登山45.0%、野外クッキング33.0%の順となっている。女子は男子同様、きもだめし66.9%が最も多く、ついでキャンプファイヤー59.9%、水泳大会58.7%、野外クッキング57.9%、手づくりであそぼう、45.9%、軽スポーツ45.0の順となっている。この結果からも、きもだめしや、水泳大会などを最も楽しみにしていることがわかる。

事前調査の結果から、こどもの意向が十分つかめた。そこで、期待度の高いものは一層工夫した。また、期待度の低い種目でもこども達が興味をもつように、研究し配慮した。

表8は終了後、楽しかった活動を調べたものである。表8によると、男子は軽スポーツ67.0%、手づくりで遊ぼう66.3%、キャンプファイヤー56.0%などが期待どおり、またはそれ以上よかったと評価している。女子はキャンプファイヤー71.9%、アドベンチャー登山48.3%、手づくりで遊ぼう60.3%などが期待ど

表7　昭和54年度夏あそこどもジャンボリー
楽しみにしている活動（事前調査）

	男子全体（291人）				女子全体（242人）			
	◎	○	△	×	◎	○	△	×
ひみつ	147	101	31	13	95	73	35	18
活　動	50.5%	34.7%	10.7%	4.5%	39.2%	30.2%	14.5%	7.4%
野　外	96	89	67	36	140	78	22	9
クッキング	33.0%	30.6%	23.0%	12.4%	57.9%	32.2%	9.1%	3.7%
き　も	195	57	22	19	162	38	21	29
だめし	67.0%	19.6%	7.6%	6.5%	66.9%	15.7%	8.7%	12.0%
アドベンチャー	131	101	47	11	76	102	54	18
登　山	45.0%	34.7%	16.2%	3.8%	31.4%	42.1%	22.3%	7.4%
手づくりで	166	78	33	12	111	94	35	9
あそぼう	57.0%	26.8%	11.3%	4.1%	45.9%	38.8%	14.5%	3.7%
水　泳	169	83	29	9	142	65	31	10
大　会	58.1%	28.5%	9.9%	3.0%	58.7%	26.9%	12.8%	4.1%
キャンプ	138	100	37	16	145	69	29	5
ファイヤー	47.4%	34.4%	12.7%	5.5%	59.9%	28.5%	12.0%	2.1%
軽スポーツ	149	95	41	4	109	78	53	13
	51.2%	32.6%	14.1%	1.4%	45.0%	32.2%	21.9%	5.4%
その他	53	1	0	5	21	1	0	0
	18.2%	0.3%	0%	1.7%	8.7%	0.4%	0%	0%

おりになっている。ひみつ活動は、きもだめしと抱き合せに実施したので、実際に参加したものの評価は、極めて高かったといえる。感想文はつぎにあげるとおりである。

4年　大　石　和　香

バスで約7時間半、鹿児島から、ここ熊本県のあそにやってきました。さいしょわたしがこの4日間をすごすことになっている部屋についたら、知らないこどもが、いっぱいいるので、わたしはびっくりしました。部屋をまちがえたかなと思い、もう一度ドアのところの名簿をみると、ちゃんと自分の名前がかいてあったので安心しました。

その部屋の8人がなかよしになったのは夜です。みんなでマクラなげをしたときでした。それからみんな楽しく生活をはじめました。

二日目の夜のきもだめし大会は、こわいよう

表8昭和54年度夏あそこどもジャンボリー
楽しかった活動（事後調査）

	男子全体（291人）				女子全体（242人）			
	◎	○	△	×	◎	○	△	×
ひみつ	96	24	41	13	41	25	33	69
活動	33.0%	8.2%	14.1%	4.5%	16.9%	10.3%	13.6%	28.5%
野外	100	76	87	25	93	69	70	17
クッキング	34.4%	26.1%	29.9%	8.6%	38.4%	28.5%	28.9%	7.0%
きも	149	44	25	26	107	34	36	56
だめし	51.2%	15.1%	8.6%	8.9%	44.2%	14.0%	14.9%	23.1%
アドベンチャー	132	74	66	16	117	77	39	17
登山	45.4%	25.4%	22.7%	5.5%	48.3%	31.8%	16.1%	7.0%
手づくり	193	53	21	8	146	66	28	3
で遊ぼう	66.3%	18.2%	7.2%	2.7%	60.3%	27.3%	11.6%	1.2%
水泳	144	51	50	17	121	55	45	19
大会	49.5%	17.5%	17.2%	5.8%	50.0%	22.7%	18.6%	7.9%
キャンプ	163	77	37	10	174	57	14	6
ファイヤー	56.0%	26.5%	12.7%	3.4%	71.9%	23.6%	5.8%	2.5%
軽スポーツ	195	46	33	6	148	50	39	10
	67.0%	15.8%	11.3%	2.1%	61.2%	20.1%	16.1%	4.1%
その他	41	0	3	1	24	2	0	0
	14.1%	0%	1.0%	0.3%	9.9%	0.8%	0%	0%

な楽しいような気持ちでいっぱいでした。先生の話でほとんどの女子がなきました。でも、話と実さいやってみたのと、ずいぶんちがっていて、わたしは、オバケが先生だということが、すぐにわかりました。でも、こわかったなぁ～。

三日目は、水泳大会でした。わたしは、水がつめたかったので、すぐにあがりました。わたしは水に弱いのかな。その夜は楽しいキャンプファイヤーでした。各はんごとのだし物や歌、みんな楽しいものばかりでした。そして4日目今日はもう鹿児島に帰るのです。4日間てはやいなぁ。ほんとうに楽しい4日間でした。

5年　川畑　　譲

ぼくは友達にさそわれてこのジャンボリーに来ました。

行きがけに「友達できるかなぁ。」とか話していたけど着いてみるとアッという間に友達ができてろうかや部屋で大あばれしました。

一日目の夜はみんなうれしくてまったくねむ

れませんでした。

次の日の朝は早くからトランプで遊んだりしました。そしてこの日の米塚登山はとっても急な坂で登りにくかったけどとっても楽しかったです。草千里で作ったカレーもみんなで協力して作ったのでとってもおいしくて、おなかいっぱい食べました。

中岳のけむりは世界一のカルデラ火山だけあってとてもすごかったです。

夜のきもだめしも、とってもびくびくしてあまり進めませんでした。

三日目には先生とプロレスをしたりしてとてもおもしろかったです。

また来年もきたいと思いますので、今年よりももっと楽しいものにしておいて下さい。

6年　甲　斐　美紀子

ジャンボリーに来た時、不安だった。

私は、人と仲よくするのはにがてだったからです。でも思ったよりも人とせっすることができたし、美人の先生達がたくさんいました。

きもだめしは心ぞうがはれつしそうだったけどこわくありませんでした。

校長先生はとてもはりきっていたし、先生たちもみんなはりきっていました。

私はものすごくあばれまわり、まいごになろうとしたし、こわいかいだん話もきいたし、クッキングや軽スポーツをしたり、あたまの中に入りきれないぐらいの思い出ができました。前よりも明るい心になれてジャンボリーに来て本当によかったなあと思いました。

白雲山荘の人たち、先生方、四日間おせわになりました。こられたらまた来ます。きっとそのときもよろしくおねがいします。

ありがとうございました。

さて、満足度を図2表9でみると、

図2　満　足　度　　昭和54年度あそこどもジャンボリー

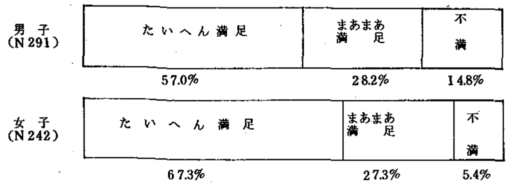


表9

	学年	たいへん満足		まあまあ満足		不	満
男	4 (107)	58	54.2%	34	31.8%	15	14.4%
	5 (114)	76	66.7%	25	21.9%	13	11.4%
子	6 (70)	32	45.7%	23	32.9%	15	21.4%
女	4 (76)	50	65.8%	21	27.6%	5	6.6%
	5 (85)	65	76.5%	17	20.0%	3	3.5%
子	6 (81)	48	59.2%	28	34.6%	5	6.2%

男子でたいへん満足57.0%、まあまあ満足28.2%、合計すると85%が満足といっている。女子はたいへん満足67.3%、まあまあ満足27.3%、合計すると94%が満足といっている。

一方、不満をみると、男子で14.8%、女子で5.4%となっている。男子で不満は、この催しに2度参加した人が多い。その理由として、もっと自由にやりたい、もっと同じことをつっこんでやりたい。などが多い。2回、3回と参加するこどもにとって、同じような内容や方法では不満も増えるだろう。何回参加しても新鮮さを感じ、満足度を高めるプログラムをつくることが課題となる。

要　　約

あそこどもジャンボリーを53年夏、冬、54年夏の合計3回実施した。

その結果各回とも参加者の85%は、参加してよかったといっている。すなわち、満足度が極めて高かった。

プログラムの内容は、各回によって異なるが、こどもたちに人気がある種目は、きもだめし、怪談ばなし、ついで、アドベンチャー登山、キャンプファイヤー、軽スポーツ、手づくりで遊ぼう、水泳、野外クッキングなどである。

各回とも指導目標に、きびしく、なかよく、たのしくをあげたが、こどもたちは、よく守った。あそびをたのしくもりあげるためにはやはり守るべきルールが必要である。

以上わずか3泊4日の生活で、純真なこども達が、目を輝やかせ、喜び合い、楽しむ姿は、レクリェーションとして、十分であったといえる。

一方、場所的条件もよかった。雄大な阿蘇、神秘的な火口や噴煙、広々とした高原や草原の景観をバックに思う存分、あそべたことは、思い出をつくるにふさわしかった。

ところで、課題はいくつか残る。その一つは経費の問題である。昭和53年夏は19000円昭和53年冬と昭和54年夏は24000円である。運営面を考えると、貸切バス代、ホテル代、指導費、用具代など多額のお金がかかる。とくに、指導面では、指導者を多くして、こどもとのふれあいに重点をおいたので、費用もかかった。このままでは収支の計算が合わない。こどももを中心に利益をぬきで考えている企画、運営であるが、日本交通公社という企業が実施しているのである。せめて、いくらかの利益があるような金額にしなければならない。そのための企画、運営を検討したい。

最後に、この事業には多くの人たちの参加協力によりなり立った。

福岡教育大学運動学秋吉研究室のオールスタッフ、日本交通公社九州営業本部、福岡エースセンター、阿蘇白雲山荘など多くの人たちの採算を忘れた働きがあったことを付記し、深く感謝の意を表したい。

ソヴエト連邦における「自由時間」とフイジカル・レクリエーション

明治大学　寺島善一

序

高度に発達した、今日の産業社会の中にあって、人間の生活のための必要労働時間は、減少の一途をたどり、自由時間が増加している。こうして増加した自由時間の、その利用の実態についての調査研究は、それを利用する人々の「生活の質」を究明することになる。自由時間の編成構造の内容は、その人々の文化レベルを反映し、刻印しているのである。

国民の生活を、国家の政策でリードしてゆく、社会主義国においては、こうした社会調査は重要な意味を持つ。ソヴエト連邦においても比較的古くからこうした「自由時間」の費消の研究は存在した。

本研究は、こうした、自由時間の費消構造の調査に現われた、体育・スポーツ・ツーリズムといった身体的レクリエーションに費やされる時間を分析することによって、ソヴエト連邦の国民の生活の中に、身体的レクリエーションがどのような位置を持ち、その状況を克服し、発展するためにはまたどのような課題が存在しているのかを検討してゆくものである。

I. ソヴエト連邦における「自由時間」の諸問題

1. ソヴエト連邦における「自由時間」論

ソヴエト共産党書記長ブレジネフ(　　　　)の次のような言葉「自由時間は、それが人間の全面発達の可能性と、全社会の物質的・精神的力の、さらなる増大の為に利用される時に、本当に“社会的富”だと言える」(注1)が、現代ソヴエトにおける「自由時間」の概念を明確に表現している。

ソヴエトの社会学者プルウデンスキー(Г.А. Прудзнский)は1960年10月号の、「コムニスト」誌で「社会主義下の自由時間(свободное время)は、人格の全面発展のため使われる時間」(注2)と規定している。さらに「勤労者の作業外時間の研究の経験」の著作の中で、作業外時間を分析し、四つの主要部分に細分している。1. 生産現場の作業に関連した時間(作業現場への往復の時間費消、作業後のシャワー、着換え時間等) 2. 家庭労働の時間、また個人の家政内での場合もあり、生活関係の公共施設やその他の施設、企業のサーヴィス、セルフサーヴィスに費消する時間(物品購買、食物調理、子供の世話、家屋や家具、衣服や履物の手入れ、身のまわりの整理、その他の種類の家庭労働。) 3. 生理的要求をみたす時間(睡眠、食事) 4. 学習技能向上、独習、子女の教育、社会的活動、アマチュア芸術活動、休息、体育・スポーツ、手工芸制作、その他に費やされる時間を含んだ自由時間。プルウデンスキーは、こうして作業外時間を分析して、4.にあたる時間を自由時間と規定するのである。(注3)そしてその著作でさらに「豊かさの尺度になるのはすでに作業時間ではなく、自由時間なのである。まさに自由時間が、それを利用する性格が、人間の調和的発達、彼の能力および創造的天ぴんの開花の基となるであろう。」(注4)と論じている。

つまり、ソヴエトにおける「自由時間」の概

念の中には、生産活動に費やされた、肉体と神経の力を回復させるだけではなく、人間の創造的、人格的発展の為の時間であるという志向性が強く存在している。このことは自由時間における行動の型が、休養型でなく活動型であることを示すものである。（表１）

このようにソヴエトにおいては、自由時間を無為無策に利用したり、単に暇をつぶすなどということを強く戒めている。プルウデンスキーは、その自由時間費消の合理的・積極的利用の意義を次のように強調する。「自由時間は、平均して年に４００時間増大した。ソ連邦工業全体の労働者にすると、その増加分は、ほゞ６０億ないし８０億時間になる。労働生産性が増大した結果得られたこの資源は、人間のために、また全体としての社会のために、最大限有益に利用されなければならないのである。(注5)

また、ゲ．ベ．オシポーフ（Г.В. Осипов）は、「人格の社会化を方向づけるために、さまざまな種類の作業外時間の費消を意識的に規制することは、社会発展のきわめて重要な社会的問題となる。(注6)」と主張している。（傍点筆者）

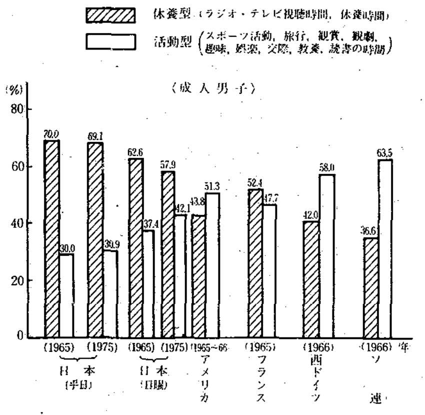
このように、自由時間を社会的資源とみなし、その資源を合理的積極的に組織化しようと試みるのである。そして、このような社会学の研究者らの論潮に援用されて、第２５回共産党大会で「勤労者の自分自身の自由時間編成の完成をめざす方法・手段」についての決定がなされ、国民を文化的・建設的方向に自由時間費消させようと指導するのである。

こうした、自由時間の編成に対する、国家、社会の指導性に対して、資本主義社会の社会学者らは１９７４年にブリッセルで開催された「工業化社会におけるレジャー活動」についての国際会議において、批判を浴せた。その論旨は「自由時間における活動は『自由』であらねばならない(注7)」というものであった。

こうした自由時間論に対してストリヤロフ（В.И. Столяров）は、「自由時間における人々の活動は、ある程度個人の選択、意志、判断によるものである。しかし、この自由な絶体化されない。第一に、自由時間の何れかの活動の選択は一定程度、社会的・経済的条件、産業の水準、交際、文化、生活環境、周囲の人間、教育程度などの諸要因によって条件づけられ、制限されている。……『自由時間における組織とその内容の可能性は、社会そのものの可能性を反映する(注8)』（Н.Н. Пономарев）(注9)」と反論している。人間が意志や欲求のまま自由に行動するとしても、その行動をおこす必然性を認識すること、外的諸条件を吟味することを抜いては考えられないことを強調するのである。

こうしたソヴエトにおける自由時間についての指導・規制は、人間の全面的発達に向けて自由時間が使用されるべきであるという sollen が強く存在しているということであって、ソヴエト国民の自由時間配分・費消に対する直接的に介入し、特定の目的の為に時間を費消させようとするものではない。時間を合理的・積極的に利用することによって、勤労者の全面発達の巨大な可能性を切り開き、社会生活や経済生活において、また、それを計画する際に、国民の自由時間を、政策の中に組織化することの必要性を強調しているのである。

表1. 自由時間行動の休養型と活動型の諸外国との比較



（備考）1. 通産省「我が国の余暇の現状と余暇時代への展望」（48年）
2. 日本はNHK「国民生活時間調査」(50年) による。

2. 「自由時間」の歴史的発展

今日の社会学研究の中において、タイム・バセット（Time Budgets）の研究が、国民生活のあり方を研究する基礎的資料として、広く世界に関心を呼んでいる。このタイム・バセットの研究は、生活時間の配分・費消構造を研究する中から「生活の質」(注10)を吟味してゆこうとする。

こうした生活時間の配分・費消の研究は、国家レベルで政策を推進する社会主義国においては、その必要性が高かったので、早くから研究が進展していた。ソヴェト連邦においては、革命成立後の政策立案の参考とするために、ストゥルミリン（С.Г. Струмилина）によって、1922年～24年に最初の調査が行なわれている。(注11) その調査内容は、主として生活時間の中における作業時間についてであった。各職業別の作業時間の実態について調査し、社会主義社会の計画経済の発展計画のための、適正な作業時間のあり方を策定する資料にしていった。

しかし、タイム・バセットの本格的な調査研究は1959年のプルウデンスキーらの報告によればクラスノヤルスク管区の時間支出の実態調査をしたことが端緒となり、続々と研究が展開されてゆく。1959年に行なわれたクラスノヤルスクの調査（表2）では、自由時間の週あたりの総量は男子で約29時間、女子で約20.5時間である。またこの調査では、より高度の教育水準をもつ労働者にあっては、自由時間が合理的に利用されている。教養ある人間は、通例、一般に自由時間をより組織的に利用する。教育程度が上昇するとともに、学習、独習、自己陶冶などさまざまな文化的欲求の充足への時間費消が増大する(注12)傾向が判明する。このクラスノヤルスクにおける調査は1963年に大量に反復研究が行なわれている。（表4のクラスノヤルスク州参照）

続いて、1962年には、ゲ.ベ.オシポーフらはゴーリキー州の五つの大工場で時間配分構造の研究を行っている。（表3） 自由時間はここにおいても、その人の教育程度が高いほど、なおいっそう教養的・文化的に、より多くの時間を費やすことを知ることができる。(注13)

また、男子の自由時間の総量は約30時間、女子は18.7時間である。

1963年には、プルウデンスキー、ベ.テ.コルパーコフ（В.Т. Колпаков）の報告によれば、ゴーリキー、イワノウォ、ロトロフ、スヴェルドロフスクの四州の家族について、ロシア共和国中央統計局により実態調査が行なわれている。（表4） また同じ1963年にはゲ.テ.ジュラヴリョフ（Г.Т.Жулаврев）によってカザン市の織物工場と化学工場において、自由時間量ならびにその利用のしかたを明確にする為に調査が行なわれた。（表5）

こうした一連の生活時間配分ー自由時間配分

構造の調査研究により、プルウデンスキーは、国民の自由時間をよりいっそう増加させ得る可能性を指摘して「かが国には、自由時間を増す非常に大きな余力があり、勤労者の時間支出構造の研究がそれを示している。勤労者の物質的、文化的水準の向上、また社会主義社会における勤労者の自由時間の増大の基本的条件として、労働生産性の引きあげや作業時間のよりよい利用、節約ということがある。ところがすでに指摘されたように、自由時間を増す大きな余力は、主として、家庭労働への時間や、生産現場の作業に関係ある時間の費消がまだ非常に大きいのを縮少することによって作業外時間の全体をより合理的に利用することにも関連している。」(注14)と述べている。また婦人のもつ自由時間の少なさにもふれて、「家庭労働の時間費消を短縮することは、勤労者の自由時間を増す基本的源泉の一つである。」(注15)とし「ソ連邦における家庭労働は一人に換算して約1000億を喰っている。それはすぐれて女子労働なのだ。労働能力をもつ年令の女性の総数の約三分の一が家政や自家副業にのみ従事していることになる。」と述べ、その問題を指摘する。家庭におけるあまり生産的でない労働を軽減短縮するさまざまな機械(洗濯など)、設備を生活に定着させる必要性、さらに公共食堂確保状況の改善の必要性をプルウデンスキーは主張する。(注16)

こうした一連の調査研究の後、その結果を分析し、1967年に革命50周年を記念して、ソヴェト連邦政府は週休二日制導入に踏み切った。このことによってソ連邦勤労者の持つ、自由時間は年間1500時間〜1900時間となり、勤労者の年間作業時間ファンドとほゞ等しくなる。(注17) 共産党、コムソモールなどの社会団体は、こうした増加した自由時間の組織的、合理的、創造的利用にむけて、それぞれの団体の任務に応じて努力をしてゆく。その頂点にブレジネフ演説があり、第25回共産党大会決定が存在するのである。自由時間における、国民の無為無策の「暇つぶし」を排除し、自由時間を文化的建設的に利用し、人間の全面発達を目指すように指導・宣伝してゆくのである。

表2. 教育水準による勤労者の自由時間の利用のしかた(一週間あたり)

(クラスノヤールスク, 1959年)

	4学年以下				5学年—9学年				内等，教育，高等教育中退			
	男子		女子		男子		女子		男子		女子	
	時間	%	時間	%	時間	%	時間	%	時間	%	時間	%
学習	1.3	5.3	0.6	4.2	4.4	15.2	3.6	17.1	7.6	22.8	8.2	31.0
独習・自己陶冶	5.4	22.0	1.9	13.5	7.2	24.8	4.0	19.0	8.3	24.8	5.3	20.0
体育・スポーツ	1.2	4.9	—	—	1.4	4.8	0.1	0.5	1.2	3.6	0.5	2.0
気晴らし	12.7	51.9	8.4	59.6	12.2	42.1	10.1	47.4	12.5	37.4	10.0	38.0
手芸的労働	0.2	0.8	0.2	1.4	0.3	1.0	0.2	0.9	0.3	0.9	0.3	1.1
社会活動	0.3	1.2	0.5	3.5	0.2	0.7	0.4	1.9	0.5	1.5	0.8	3.0
無為の休息	2.1	8.6	1.2	8.5	2.0	6.9	1.8	8.5	1.8	5.4	0.6	2.3
その他	1.3	5.3	1.3	9.2	1.3	4.5	1.0	4.7	1.2	3.6	0.7	2.6
計	24.5	100.0	14.1	100.0	29.0	100.0	21.1	100.0	33.4	100.0	26.4	100.0

表 3.　教育程度別による作業外時間配分構造（一週間あたり）

労働外時間の内容 ＼ 教育程度	時間費消の一般構造				
	労働時間と関連する時間（通勤時間や超過勤務時間）	自然の生理的要求の充足（睡眠・食事および入浴）	家事労働および雑用（買物、食事の準備、家具、衣服の手入れ）	スポーツ・散歩・ダンス・来客の接待、訪問	文化水準や職能の向上に費やされる時間（書籍、雑誌、新聞を読む時間、ラジオ、テレビを見る時間、社会活動）
4 年級以下	48.69	62.81	38.72	7.31	10.42
7 年級以下	47.93	62.97	32.16	9.71	15.21
10年級以下	47.81	62.67	26.56	12.30	18.55
職業学校 普通工養成所	49.12	64.10	25.56	12.18	17.04
技術者	48.81	64.43	26.05	10.36	18.22
技師	50.56	62.43	24.49	11.10	19.36

表4.

自由時間の費消種別	自由時間の週1人当り費消量（時間）				
	両合工場算	ヴェ・ヴェ・クイブィシェフ記念化学工場			織物製品工場
		男子	女子	工場全体	女子
自由時間	31.48	43.12	27.60	31.60	31.14
学習	7.05	15.38	5.40	8.04	5.94
書籍，新聞，雑誌の読書	7.84	8.63	9.03	8.94	6.64
アマチュア芸術活動サークルで活動（音楽，実用芸術，教養大学をふくむ）	1.31	0.25	0.48	0.42	2.31
社会的活動	3.18	4.50	3.03	3.42	2.92
合理化運動・発明	0.34	2.18	0.01	0.58	—
体育・スポーツ	0.79	1.75	0.65	0.94	0.64
映画（テレヴィ）・演劇観覧	5.98	6.17	7.23	6.95	4.86
その他の費消	4.99	4.26	1.77	2.31	7.83

表5.

工業企業の被調査労働者の週自由時間フォンド利用状況
（1人当り平均の1週間の時間）

自由時間費消の種類	男子					女子				
	イワノヴォ州	ゴリキー州	ロストフ州	スヴェルドロフスク州	クラスノヤルスク州	イワノヴォ州	ゴリキー州	ロストフ州	スヴェルドロフスク州	クラスノヤルスク州
学習	4.0	2.6	3.8	1.9	5.1	0.5	1.5	2.2	0.7	3.8
独習	5.1	5.1	5.4	5.6	7.2	2.8	2.2	2.5	2.9	3.9
社会的活動	0.7	1.9	1.5	1.5	1.8	1.9	1.4	1.6	1.4	0.8
子女の教育	—	1.2	1.3	1.1	2.0	0.6	1.6	0.7	1.0	2.4
発明・合理化研究，手工芸	—	0.6	—	0.2	1.1	—	—	—	—	0.6
休息と慰安	24.4	20.7	19.3	18.8	14.3	14.3	14.4	13.7	11.6	9.7
体育・スポーツ	0.6	2.3	1.3	3.3	2.2	—	0.4	0.8	0.2	0.5
1週合計	34.8	34.4	32.6	32.4	33.7	20.1	21.5	21.5	17.8	21.7

Ⅱ.「自由時間」におけるフィジカルレクリエーション

1.「自由時間」におけるフィジカルレクリエーションの歴史的展開過程

ソヴエト連邦における生活時間の配分ならびに自由時間の費消の実態は、前述の如くである。自由時間を人間の発達のため、豊かな生活のために費消させようという国家社会の期待・要求が強い。自由時間費消の中に占める身体的レクリエーションの位置は、どのように考えられているのか。(注18) イーペー・モケロフ(И.П.Мокеров)は、「生産過程において消費された、生活のエネルギーを補充し、それにより労働力の向上をもたらす。それのみならず、労働者の文化的技術的水準を向上させる前提を作り出す。そしてこれらは労働生産性と生産効率を高めているが、同様に、健康を強化し、肉体的、精神的可能性を完成させるのに役立つ。」(注19)と規定する。こうした身体的レクリエーションに対する認識は、モケロフのみならず、ソヴエトの自由時間費消構造の創始者であるストウルミリンの時代から堅持されている。「肉体・精神労働の合理的組織化を計り、生活慣習、生産、休日などにおいて、体育・ツーリズムを結合させ、自然を最も広く利用する≪積極的休息≫機関に関する政策システムを科学的に研究する。」(注20)ために、自由時間を分析し、身体的レクリエーションに使用されている時間を解明するのであった。

ストウルミリンが1922年〜24年に行った調査の報告によれば、その時代に身体的レクリエーション活動に参加した時間は、勤労者男子で月に1.5時間〜2.9時間、週に20分〜40分であった。これはその当時の自由時間の全体量の、わずかに1.0〜1.7%にしか相当しない。しかもその上、婦人におけるレクリエーションはわずかに散歩、ダンスが行なわれるのみであった。またこの時代に恒常的にスポーツ活動を行っているものは、国民全体の6〜8%にすぎなかった。(注21) その後、1929年にストウルミリンが行ったモスクワ市の調査では、労働者が、何らかの体育・スポーツ活動を行っている時間は、週に男性で1.6時間、女性で0.2時間しかない。自由時間の総量の中で、体育・スポーツ活働の占める割合は男性で3.8%、女性で1.8%にあたる。しかも定期的にそれを行っているものは男性で33%、女性で6〜7%であるという結果が出ている。(注22) このように、ソヴエト連邦建国初期においては、体育・スポーツ(身体的レクリエーション)が自由時間編成構造の中に占める割合は極度に低いものであった。

1922年〜24年の調査、1929年の調査に続いて、自由時間の調査が大規模に行なわれたのは1959年〜63年のクラスノヤルスクで行われたものである。(表2) この1959年の調査報告では、体育・スポーツに参加している時間は週当り男性で1.26時間、女性で0.3時間であり、四年後の1963年の調査(表4)では、男性2.2時間、女性0.5時間と増加している。(注23) 同様に1963年のアルテモフのクラスノヤルスクの調査では、週あたり、男性で2.6時間、女性で0.7時間であり、自由時間総量の平日で男性は5.8%、女性で1.3%、休日で男性9.5%、女性5.6%を体育・スポーツ活動に消費している。さらに最低週一回は体育・スポーツ活動に参加している国民は男性で60%、女性で20%という高率を示している。(注24)

このように1959年から1963年の四年間における、体育・スポーツ活動に従事する勤労者の増加現象は、自由時間全体量が28時間

→32.4時間と増加するのに伴って自由時間費消構造の中に文化的欲求が高まり、体育・スポーツに対する認識・要求が高くなっていったことを反映している。またこの時期は、ソヴエト共産党中央委員会及びソ連邦閣僚会議により提出（1959年1月9日）された「国における体育・スポーツの指導について」≪О руководстве физической культурой и спортом в стране≫が、国家としての体育・スポーツ運動の組織の本質的改善をして、体育・スポーツに参加する人口を増加させようとしている。[注25] この傾向はモケロフのウラルのスベルドロフスクの二つの工場における調査にもあらわれている。1957年のその工場における体育・スポーツ・ツーリングなどに参加している人は1000人中47人しかいなかったが、1967年の調査では、1000人中179人と3.8倍にスポーツ参加の人口が増加している。[注26]（表6）

しかし、自由時間における体育・スポーツへの参加の時間と人員は上昇しつつあるものの、さらなる発展の為に障害となる本質的欠陥も顕在化してきた。その一つは、身体的レクリエーションにとってもっとも簡単に行いえて、しかも身体的効果からすれば非常に重要な要素となる「朝の体操」などを行っている人々が非常に少ないということである。今一つは、恒常的に体育・スポーツ活動に参加する基本的要素であるスポーツクラブへの加入している人々が少ないことがある。こうした欠陥の克服には、体育・スポーツの宣伝の質を急速に上げ、全人口が、体育に対する認識を高めさせることが必要になり、またスポーツクラブや練習場を勤労者の労働体制に一致させる保障が必要となる。[注27] こうした状況を克服する中から、国民の中に質の高い自由時間活動としての体育・スポーツ活動を保障してゆこうと、体育・スポーツ運動の組織に本質的改善を加えていくのであった。

表6. 年令別における体育・スポーツの参加者数

（労働諸機関グループの中の1000人の労働者を対象とした）

年令	年			増加倍数		
	1957	1967	1977	1957から1967	1967から1977	1957から1977
29才まで	58	292	626	5	2.1	10.8
30～39才	39	133	536	3.4	4	13.7
40～49才	38	84	380	2.2	4.5	10
50才以上	30	43	254	1.4	5.9	8.5
全年令平均	47	179	470	3.8	2.6	10.

による

2.　「自由時間」におけるフィジカルリクリエーションの現状

１９６７年の革命５０周年を記念した週休二日制の導入により、勤労者の持つ自由時間の量は、さらに増大されていく。現在では、ゲ．ズズボロスキー（Г. Зборовский）の報告によれば、労働日には平均して一日３～５時間、休祭日には１０～１２時間の自由時間が存在する。(注28) こうした自由時間の増加の中で、体育・スポーツ・ツーリズムなどの身体的レクリエーションに参加する人々の数は、建国以来６０年に満たない間に、体育・スポーツの参加人口の全体量では１０００倍以上、費消する自由時間の量は２倍になっている。(注29) また１９７４年に、ア．ゴシュコ（М.А. Гошко）がウクライナ州ルヴォヴォフの四つの大企業で行った調査では、自由時間費の中で、体育・スポーツに一番多く時間を費いやしている勤労者が全体の約６０％も存在すると報告されている。

今日の、ソヴエト連邦の体育・スポーツ団体は２０万以上存在し、それに参加している人口は５０００万人以上おり、１９才～５９才までの２５％以上を組織している。さらに６０才以上の１５００万人が健康クラブ、ツーリスト運動、つりのグループ等に参加している。(注30) モケロフが、１９７７年ウラル州のスベルドロフスクの工場で行った調査によれば１０００人の中で、４７０人の人々がスポーツに参加してきている。これは１９６７年の１０００人の中で１７９人が参加していたのに比較しても2.6倍になっている。さらに１９５７年と比較すれば１０倍にもなっている。（表6）　その参加している運動種目の内容は（表7）の如くである。さらにこの調査では、こうした身体的レクリエーション活動に参加した後の効果について質問している。この活動に積極的に参加しているものは、消極的なものより 1.罹病率が少なく、しかも病気になっても回復が早いこと。2.健康を強化し、疲労回復が早く、労働生産生に好影響を及ぼしていることを報告している。(注31)

今日のこうした隆盛をもたらした原因は、１９５７年の決定に続き、１９６６年に「体育・スポーツの今後の発展に関する方法について」≪О мерах по дальнейшему развитию физической культуры≫を決定したことが要因となっている。その決定内容は「ソヴエト連邦の体育・スポーツの発展ならびに、勤労者の共産主義教育、健康強化の実現化にとって、大衆的体育・スポーツ組織の役割が増大している」として、共産党やその他の各種社会団体に対して「スポーツ種目への勤労者の定期的参加を組織すること、中高年の人々のための体育グループを作ること、生産体操を行うこと、スポーツ施設、旅行施設、保養所、釣の家や猟の家の設立に大きな指導性を発揮すること」(注32)を義務づけている。この決定により、ソヴエトの大衆的、生　的、国民的スポーツ路線が敷かれてゆく。そしてこの決定は、その後の体育・スポーツ運動の指導と、国民の全面的に調和した発達を創り出す可能性を広い層に浸透させることが出来た。(注33) さらにこの決定により、スポーツ広場、スタジアム、スポーツ殿堂、郊外スポーツの家の建設が活発化し、体育・スポーツ用具の生産量が増大し、スポーツの指導者養成が集約的に行なわれてゆくのであった。このように、共産党、閣僚会議が政策を決定し、党やコムソモールや労働組合等、各々の組織がその決定をうけて種々のスポーツ施設などのハードシステムを指導者などのソフトシステムを整備し、国民の積極的な体育・スポーツへの参

加を呼びかけている。(注34) そして、その積極的な身体的レクリエーション活動に参加する自由時間において、人々は充分に休息し、生産活動に費やされた肉体と神経の力を回復させるだけでなく、調和し、全面的に発達し、精神的にも肉体的にも完成されることを、国家社会は期待するのである。こうした組織化、指導性といったところにソヴエト連邦の自由時間政策の端緒が伺い知れるのである。

表7. 運動の種類と年令別による体育・スポーツ参加者構成

(1977年)

運動の種類　年令	29 才まで	30〜39才	40〜49才	50 才以上	全 年 令
スキー	19.0	22.2	12.8	6.1	15.8
つり及び猟	4.9	10.0	11.8	11.6	8.8
チェス	4.0	3.8	4.2	1.7	3.7
陸上競技	5.2	3.1	0.6	−	2.5
バレーボール	7.1	1.1	−	0.6	2.5
フットボール	5.8	1.5	0.3	−	2.2
ツーリズム	0.9	3.8	1.9	1.7	1.8
テニス	3.8	0.8	−	−	1.1
ホッケー	1.8	1.9	−	−	1.0
その他	9.3	5.4	6.4	3.7	7.1
計	62.6	53.6	38.0	25.4	47.0

3. 「自由時間」におけるフィジカルレクリエーションの課題

ポノマレフが「自由時間における組織と内容の可能性は、社会そのものの可能性を反映する」と述べているように、今日のソヴエト連邦における、自由時間の文化的・健康的利用としての体育・スポーツに対する諸政策は、今日のソヴエト連邦の社会主義社会としての到達点を反映している。自由時間の知的・文化的使用による人間の全面発達への志向の中に、体育・スポーツが重要な課題として存在していることは、諸々の決定、各政策、指導、宣伝の中に伺い知ることが出来る。しかし現段階はソウエト連邦にとっても共産主義社会を目指す過渡期であるので、そうした社会の反映として、体育・スポーツなどの身体的レクリエーションにとっても、未だ充分ではない。体育・スポーツが未来社会を築き上げてゆくために重要な課題として存在しているために、またより一層、現在の生活の中に定着させゆくための課題はどのようなものが存在するのであろうか。

その課題の第一は、自由時間のより多くの増加ということである。(注35) ソヴエト連邦の持つ現代科学の水準からみれば、週休二日制の導入な

どにより自由時間は増加したものの、まだまだ自由時間を獲得し得るのである。とくに、婦人においては、その自由時間量は圧倒的に少ない。婦人の体育・スポーツへの参加率の低さは、この自由時間の少なさと直接に関係があり、その原因の大部分を占めている。(注36) 婦人が家庭労働に費やしている時間はソ連邦全体で1000億時間にものぼる。これは労働能力を持つ婦人の総数の三分の一が家政や自家副業にのみ従事していることになる。それ故に、家庭労働の時間費消の短縮は勤労者全体の自由時間を増す基本的源泉であるとされるのである。これには、公共食堂施設の改善・拡充、洗濯等の大規模機械化、保育施設の改良といった公共施設の社会的環境の整備がその課題解決に必要となってくる。

婦人のみならず、現代科学のレベルからみれば、国民全体にも自由時間の増加が可能である。その可能性を追求するために次のようなことが考えられる。 1. 自由時間増加のための物質的・技術的基盤を作ること。即ち、勤労者の自由時間の組織化のために効果的、機能的な施設、学校を保障すること。 2. 労働時間量の調整、公共施設（食堂などの）、保育施設、商業輸送、合理的都市計画、などの社会的環境を整備すること。 3. 以上のような条件整備により、社会的・個人的要求や現実的可能性に基づき。自由時間が公平に分配されるように配慮すること。(注37)

こうしてその次には、国民の中に増加した自由時間は、どのように組織的、合理的に利用されるべきなのか検討されなければならない。この問題に関してストリヤロフは次のような指摘をする。「自由時間の合理的費消、すなわち、年令、性別、職業、住所、個人的関心、能力等を考慮して適切にその時間を利用すること、さらにその時間を、どのような比率で、各種の活動を自由時間の中に組み込むのかということに関する、科学的根拠のある情報と宣伝が必要である。」(注38) そしてそれに続いて、「国民種々のグループの自由時間の全体のバランスの中における体育・スポーツ活動に用いる時間と、他の活動に用いる時間との相互関係や、自由時間におけるスポーツ活動の最適時間はどれぐらいなのかといった生理学的証明に注意を向けるべきである。(注39)

その具体的内容としては、 1. 住民の多様な生活時間における、一人一人の適切な運動量は如何なるものであるのかという点について、社会学と運動生理学の中から検討してゆくこと。身体の正常な機能、健康の強化と維持、さらに種々の活動を効果的に遂行させてゆくための適切な運動量の検討。 2. 各年令や職業グループの相違による多様な条件のもとにある人々の運動に向けるべき時間の具体的指示や、適切なノルマの科学的研究の成果の発表。(注40) が考えられている。こうした、人間の日常・労働生活をその研究視野に入れ、国民の適性な運動量などを研究し、それを国民の中に発表し、啓蒙してゆこうとするのである。

しかし、社会的環境整備、指導者の配置、適切な運動量の検討など、政府や研究者の努力のみでは、体育・スポーツは発展しえない。国民自身が、主体的に取り組む姿勢を持たねばならない。国民の中に、体育・スポーツの持つ価値を正しく認識させる中で、その主体性の確立をせまるのである。このことについて、ストリヤロフは「スポーツの分野で形成される文化的価値を明らかにし、それを他の社会的価値と比較し、その相互関係、影響を認識することが重要である。」(注41) 「体育・スポーツは人間の肉体の訓練、肉体的完成、健康の強化、回復の手段として考える場合にのみ、体育・スポーツの重要性

を評価するという偏見が現在でもしばしば見受られる。」と述べ、体育・スポーツの持つ文化的価値の深い認識の必要性を主張する。そうした価値付与によって、体育・スポーツ・ツーリズムといった、身体的レクリエーションを、国民の文化的・全面的発達にとって、かけがえのないものとして位置づけるのである。↓

結　び

今日のソビエトにおける「自由時間」は人間の全面的発達にむけて利用されるべきであるという強い志向性が存在する。ソヴエトの科学技術の発展、工業の近代化などによって得られた「自由時間」を貴重な資源とし、その時間をより合理的・積極的に費消することにより、より質の高い人的能力を確保しようとするのである。そして、そこで形成された質の高い人的能力がさらに社会発展に寄与するというフィードバックを期待するのである。そのため国家・政府は、社会的諸環境の整備といったハードシステムから、人的配置といったソフトシステムを検討し、整備・拡充してゆく。それは「自由時間における組織とその内容の可能性は、社会そのものの可能性を反映する」からである。そうした自由時間の中における、体育・スポーツ・ツーリズムといった身体的レクリエーションは、積極的休息となり、生産活動に費やされた、肉体と神経の力を回復させるだけでなく、人間としても調和し、全面的に発達し、精神的にも肉体的にも完成され、より一層、健康を強化するのに役立つのである。故に体育・スポーツは、今日の増大する「自由時間」の中に、重要な文化的活動として位置づけられ、国家的政策の庇護の中で着実に発展してきている。今後も、国家や党は社会的諸条件を整備し、国民の労働生活を視野に入れ、国民自身の運動適量の診断を与え、よりよいスポーツ組織を作り積極的に身体的レクリエーションを発展させるべく努力を継続してゆく。こうした過程の中から、国民の生活の中に、体育・スポーツ活動が定着してゆく。それは社会主義的生活様式の優位性を表現することでもある。

注

1. Л. N. Брежинев「Ленинским курсом речи и статьи」 1974. No. 1 стр 92

2. 辻村明編「現代ソヴエト社会論」4章「余暇」寺谷弘壬、1976 国際問題研究所 P. 115

3. オシポーフ編、田中清助訳「ソヴエト社会学」第2分冊、1967、青木書店 P. 555、10章 勤労者の作業外時間研究の経験

4. オシポーフ編「同上書」 P. 553 同上章

5. オシポーフ編「同上書」 P. 568 〃

6. オシポーフ編「同上書」 P. 569 11章 作業外時間とその利用

7. Leisure activities in the industrial society, Internatinal congress, Brussels, 5, 6, 7 April, 1974, Van Clé Foundlation

8. Н. И. Пономарев「Социальные функции физической культуры и спорта」 М. фис, 1974. стр 90

9. В. И. Столяров「Спорт, свободное время и образ жизни」 1976, Теория и практика физической культуры, No. 11 стр, 47

10. 経企庁、国民生活調査課編「生活時間の構造分析」1975、大蔵省印刷局、P. 1

11. 経企庁 「同上書」 P. 5

12. オシポーフ編「前掲書」 P. 561 10章

13. オシポーフ編「同上書」 P. 580 11章

14. オシポーフ編「同上書」 P. 567 10章

15. オシポーフ編「同上書」 P. 564 10章

16. オシポーフ編「同上書」 P. 565 10章

17. В. N. Столяров. Там же, стр 45

18. フィジカルレクリエーションの概念は体育（физической культуры）スポーツ・ツーリズム・遊戯・体操などを自由時間」「余暇」（досуг）を用いて、日常生活の中で行い、健康課題を解決しようとする時に用いられる。本論文では前記の意味でフィジカルレクリエーションを用いるものとする。

19. И. П. Мокеров「Физическая культура в свободном времени трудящихся промышленных предприятий」1978, Теория и практика физической культуры, No. 11 p. 38

20. А. Иттин「Вопросы труда」1932. No. 3

21. С. Т. Струмилин「Проблемы экономики труда」М 1957. стр 283

22. В. Миихеев「Бюджет времени рабочих и служащих Москвы и Московской Области」М. 1932, стр 88～89

23. オシポーフ編「前掲書」 P. 559 10章

24. В. А. Артемов「Физическая культура и свободное время трудящихся и учащейся молодежи」No.1 ВНИИФК 1972. стр 6~7

25. И. П. Мокеров, Там же стр 39

26. И. П. Мокеров. Там же стр 38

27. オシポーフ編「前掲書」 P. 560 10章

28. Г. Зборовский「Политическое самообразование」 1973、No.7 стр 70

29. В. И. Столяров Там же стр 46

30. В. И. Столяров Там же стр 46

31. И. П. Мокеров Там же стр 38

32. И. П. Мокеров Там же стр 39

33. И. П. Мокеров Там же стр 39

34. И. П. Мокеров Там же стр 39

35. В. И. Столяров Там же стр 46

36. В. Д. Патрушев「Социологические исследо- -вания」 1974. No. 1 стр 92

37. В. И. Столяров Там же стр 47

38. В. И. Столяров Там же стр 47

39. В. И. Столяров Там же стр 47

40. В. И. Столяров Там же стр 48

41. В. И. Столяров Там же стр 48

主要参考文献

1. オシポーフ編、田中清助訳「ソヴエト社会学」（第１分冊、第２分冊、第３分冊）１９６７、青木書店

2. 辻村明編「現代ソヴエト社会論」１９７６、日本国際問題研究所

3. 経済企画庁編「生活時間の構造分析」１９７５、大蔵省印刷局

4. 経済企画庁編「これからの生活と自由時間」１９７７、大蔵省印刷局

5. Теория и практика физическои культуры 1976, 1~12 1977, 1~12. 1978. 1~12

6. Физкультура и спорт 1976. 1~12, 1977. 1~12, 1978. 1~12

＜表＞

（表１）　経企庁「これからの生活と自由時間」より

（表２）（表３）（表４）（表５）オシポーフ編「ソヴエト社会学」第２分冊より

（表６）（表７）И. П. Мокеров, Теория и практика физической культуры, 1978, №11 より

インディアカ試合時の心拍数の変動に関する研究

徳山工業高等専門学校　和田　実
徳山大学　高倉正樹

緒　言

インディアカというスポーツの起こりは、南米のインディアンがトウモロコシの葉を束ねて打ち合って遊んだことに発するといわれている[1)]。1930年代にヨーロッパに紹介され、さらに用具やルールが改善されて今日のような型になった。我が国では、1977年に山口県教育委員会の保健体育課がインディアカの導入を試み、以来県下に普及し、現在ではこのスポーツ人口も増加して、地区大会や県大会等が行なわれている。

このインディアカがスポーツとしてどの程度の負荷量なのか、また生理学的に生体にどのような効果を及ぼすかといった分析は、いまだに行われていない。そこでインディアカの科学的分析の試みとして、試合時の心電図を記録し、循環機能の面からインディアカの運動強度を明らかにしたので報告したい。

実験方法

被検者は、山口県下松市と徳山市の主婦（年令は33〜43才）6名である。そのうちインディアカの経験年数は、1ヶ月が2名、1年が2名、1年6ヶ月が2名である。実験期日は、昭和53年7月11日・15日の2日間である。

心電図は、医用テレメーター2台（日本光電製、ZB－141G型）を使用し、胸部誘導法により記録した。

試合時の被検者は、相互のチームに経験年数と技量が同程度である者を選び、心電図の記録を二人同時に行った。試合は勝敗が決定しても必ず3セットを行なわせた。

心拍数の測定は、記録した心電図のR－R間隔を30秒毎に計測し、それを1分間に換算した。

実験結果および考察

1. 被検者特性と試合時間

表1は、被検者6名の年令・経験年数およびセット毎の試合時間を示したものである。被検者の経験年数は、1ヶ月から1年6ヶ月にわたっている。セット毎の試合時間および3セットを合計した総時間には、被検者の経験年数による著明な差がみられた。すなわち、経験年数の長い被検者程、試合時間が長びく傾向が窺えた。

この理由として、経験の長い者程、試合時のラリーが継続し、また相互の技量が接近しているために、スコアの面でもジュース・アゲンを繰返したことによると考えられる。一方、初心者の場合は、技術が拙いために、ラリーが続かず、そのため試合時間が短かくなったと考えられる。

2. 試合時の心拍数の変動

図1は、被検者No.6について記録した心電図の1例を安静時・試合時および回復時について示したものである。本図から窺い得ることは、試合時の心電図のR－R間隔は安静時に比べて短かいこと、回復時3分目では、試合時に比べてかなり回復はしているものの安静時のレベルに達するにはまだ程遠いことなのである。

図2～4は、インディアカ経験年数による試合時の心拍数の変動を示したものである。

図2は、インディアカ経験年数1ヶ月の被験者No.1とNo.2について、試合時の心拍数の変動を図示したものである。試合時の心拍数の傾向は、試合開始とともに一過性に上昇し、試合の経過にしたがって漸増する傾向を示した。また、試合セット間の心拍数変動の傾向は、セット数の増加とともに心拍数が多くなり、セット毎の心拍数の最高値は、被検者No.1では、1セット目170.4拍/分、2セット目175.0拍/分、3セット目169.0拍/分であった。さらに、1～3セットを通しての平均心拍数についてみると、158.3拍/分であった。被検者No.2では、1セット目156.0拍/分、2セット目164.2拍/分、3セット目162.5拍/分を示し、試合を通しての平均心拍数は152.2拍/分であった。

図3は、インディアカ経験1年の被検者No.3とNo.4についての心拍数の変動を示したものである。被検者No.3のセット毎の最高心拍数は、1セット目164.4拍/分、2セット目176.2拍/分、3セット目174.4拍/分であったが、1～3セットを通しての平均心拍数は、163.8拍/分であった。被検者No.4ではそれぞれ174.0拍/分、180.5拍/分、183.2拍/分であり、平均心拍数は165.6拍/分であった。

図4は、インディアカ経験1年6ヶ月の熟練者No.5とNo.6の心拍数変動を示したものである。セット毎の最高心拍数は、被検者No.5では、1セット目191.0拍/分、2セット目187.2拍/分、3セット目166.9拍/分を示し、試合の平均心拍数は181.7拍/分であった。被検者No.6ではそれぞれ188.0拍/分、195.4拍/分200.7拍/分であり、平均心拍数は、187.2拍/分であった。

これらの関係を経験年数別、すなわち1ヶ月を初心者、1年を中熟練者、そして1年6ヶ月を高熟練者として、セット毎の平均心拍数を求めた結果を示したものが表2である。経験年数の長い者程、試合時の心拍数は高く、また、経験を問わず試合のセット数が増すに従って平均心拍数が増加する傾向を示した。

表3は、被検者6名の安静時心拍数、試合時のセット毎の最高心拍数、試合時の平均心拍数およびそれぞれの増加率をまとめたものである。セット毎の最高心拍数の増加率は、1セット目78.5～110.6%、2セット目87.9～116.3%、3セット目85.9～117.0%を示し、セットの増加と共に増加率も大きくなる傾向を示した。また、3セットを通しての平均心拍数の増加率は、73.0～102.4%の範囲であった。

スポーツ種目別に、試合時の心拍数の変動を検討した資料はきわめて少ないなかで、菊地ら[2]は、大学生男子を被検者としてエスキーテニス試合時の心拍数について報告している。それによると1～3セットを通しての心拍数は121.4～190.4拍/分の範囲であり、エスキーテニス試合時の経験年数による心拍数は、1～2ヶ月の初心者で114.4～132.5拍/分、1～2年の中熟練者で149.1～177.2拍/分、そして3年の高熟練者では168.8～190.4拍/分であったと述べている。本研究でも、インディアカ経験年数1ヶ月の者を初心者、1年の者を中熟練者、そして、1年6ヶ月の者を高熟練者とすると、試合時の平均心拍数の傾向は、エスキーテニスの場合と類似している。また、砂本は[3]、バレーボールについて検討した報告書中、「6人制バレーボールの3セット試合中の心拍数は112.0～142.0拍/分であった」と述べ、

Kozar[4] とRittel[5] は、バドミントンの1セット中の平均心拍数が150.0と178.0拍／分であったと報告している。KozarとRittelの文献と比較すると、インディアカ試合時の1セットの平均心拍数は162.2拍／分であり、バドミントンの試合時の心拍数とほぼ同じ値であった。

この結果、軽スポーツと一般に考えられているインディアカは、試合時間は比較的短かいが、バドミントン・エスキーテニスに劣らず、運動強度はかなり大きいことが明らかとなった。なお、中高年者、小・中・高校生を対象にして、試合時の運動強度については、後日、改めて検討してみたい。

結　語

主婦6名（年令：33〜43才）を対象として、インディアカ試合時の心拍数を測定し、循環機能の面から運動強度を検討した結果、次の成績を得た。

1）経験年数による試合時間は、経験の深い者程長い傾向があった。

2）経験年数による試合時の平均心拍数は、152.2〜187.2拍／分であったが、経験の深い者程大きい値を示した。

3）試合のセット毎の平均心拍数は、経験を問わず、セットが増すに従って多くなる傾向を示した。

インディアカの試合時の心拍数は、バドミントン・エスキーテニスに比べてほぼ同じであり、バレーボールに比べて多い傾向があった。

参考文献

1）山口県民スポーツ総参加運動推進本部：県民スポーツ総参加運動推進の手引、11−14，1977.

2）菊地邦雄・和田実・財満義輝：エスキーテニス試合時の心拍数の変動．体育の科学．Vol.28：296−299．1978.

3）砂本秀義：6人制バレーボールにおける運動量、体育学研究．15(5) 102，1971.

4）Kazar,A.J.and P.Hunsicker：A study of telemeterd heart rate during sports participation of young adult men.J.Sports Med. 1：1−5 1963.

5）Rittel,H.F. and E.Waterlon：Radiotelemetrie bei Tennis−,Badminton−und Tischtennis−spielen Sportarzt und Sportmedizin 7：144−150，1975.

表 1. 被検者の年令・インディアカ経験年数および試合時間

被検者No.	年令	経験年数	試合時間			
			1セット	2セット	3セット	合計
1	37才	年1月	6分20秒	5分51秒	5分07秒	17分18秒
2	43	1月	6.20	5.51	5.07	17.18
3	33	1.0	7.23	6.42	6.35	20.40
4	33	1.0	7.23	6.42	6.35	20.40
5	32	1.5	8.25	7.37	14.08	30.10
6	35	1.5	8.25	7.37	14.08	30.10

表 2. 経験年数別，セット別からみた試合時の平均心拍数

	試合時の平均心拍数		
	1セット	2セット	3セット
初心者 (No.1・No.2)	拍/分 151.2	拍/分 157.1	拍/分 159.3
中熟練者 (No.3・No.4)	155.3	170.4	171.5
高熟練者 (No.5・No.6)	180.1	182.0	188.9
平均値	162.2	169.8	173.2

表 3. 被検者6名のセット毎の最高心拍数，試合時の平均心拍数および増加率

被検者No.	安静時心拍数	1セット目の最高心拍数と増加率	2セット目の最高心拍数と増加率	3セット目の最高心拍数と増加率	試合時の平均心拍数と増加率
1	拍/分 80.9	拍/分 170.4	拍/分 175.0	拍/分 169.0	拍/分 158.3
		110.6%	116.3%	108.9%	95.7%
2	87.4	156.0	164.2	162.5	152.2
		78.5	87.9	85.9	73.0
3	88.0	164.4	176.2	174.4	163.8
		86.8	100.2	98.2	86.1
4	86.2	174.0	180.5	183.2	165.6
		101.9	109.4	112.5	92.1
5	96.0	191.0	187.2	196.9	181.7
		99.0	95.0	105.1	89.3
6	92.5	188.0	195.4	200.7	187.2
		103.3	111.3	117.0	102.4

図1. 被検者No.6(35歳)の心電図

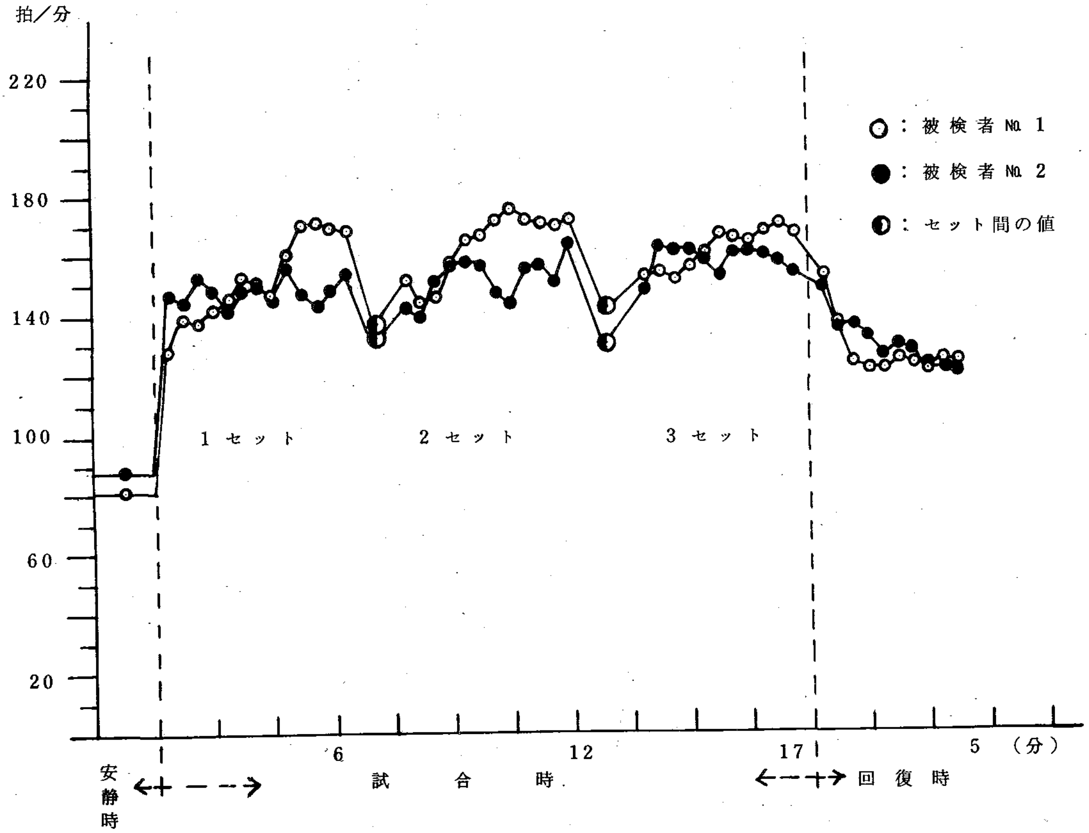


図2. 経験年数1ヵ月の被検者の心拍数変動

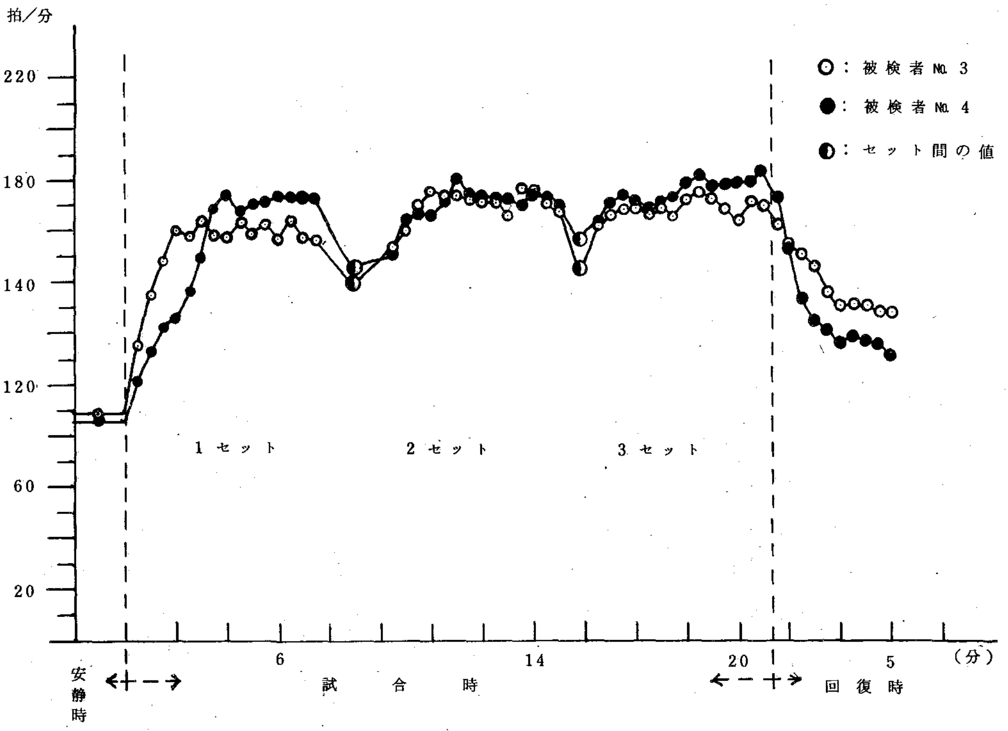


図 3. 経験年数 1 年の被検者の心拍数変動

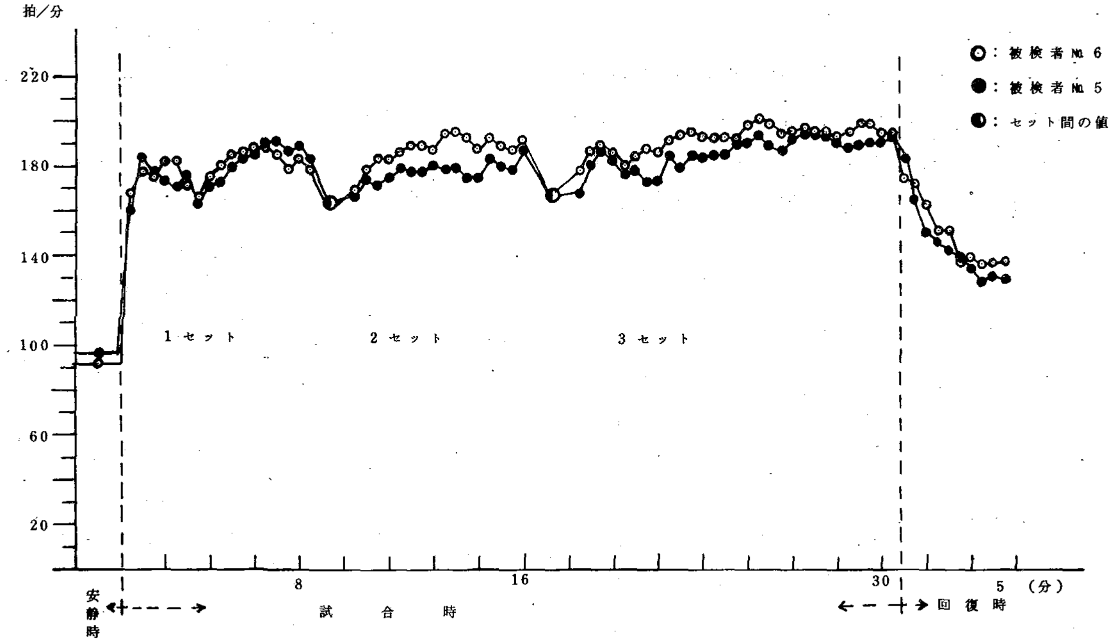


図 4. 経験年数 1. 5 年の被検者の心拍数変動

全国キャンプ場の実態調査*

前野 淳一郎**

はじめに

従来わが国で、キャンプ「場」に関して行われてきた調査研究の多くは、欧米諸国における制度・施設ないし利用状況の紹介であるとか、特定のキャンプ場施設の利用等に係る実態調査、また、これらをふまえたキャンプ場の計画・設計に関する研究等であって、いずれも一定の理想態としてのキャンプ場像（理念・定義・形態）を前提として論議がなされてきたように思われる。（末尾文献目録参照）

☆日本レクリエーション学会、昭和54年度第一回研究会において発表

☆☆社団法人日本オート・キャンプ協会理事

しかし現在、全国で2,000か所とも、3,000か所とも存在しているといわれるキャンプ場は、そのすべてが必ずしも、こうした理念・定義等に則してつくられ、運営管理されているというわけではない。とくに、教育キャンプ、組織・団体キャンプ利用を主目的として設置されているもの以外の、いわゆる「一般キャンプ場」のなかには、キャンプ場の理念からは程遠いような環境・施設・設備のものが含まれている、ということは、つとに識者達から指適されているところである。

（社）日本オート・キャンプ協会では、その主要な事業のひとつである、キャンプ場の整備促進をはかるため、過去数次にわたってキャンプ場の現況調査を試み、その実態の把握につとめてきたが、このたび、（財）日本観光関発財団が行われる「観光レクリエーション施設整備に関する調査」の一部に参加をして、「全国キャンプ場の実態調査」とも称すべき、詳細にわたる調査を実施することができた。その結果は、〔（財）日本観光関発財団；「キャンプ場の施設および管理運営に関する調査報告書」：昭和54年3月〕としてとりまとめられている。

ここに明らかにされた、キャンプ場の実態をふまえて、将来におけるわが国の、特にレクリエーションキャンプ場についての整備をはかってゆきたいと考えている。今回は、この調査結果の大要を、日本レクリエーション学会々員の諸兄姉に披露し、ご批判を仰ぐと共に、本年度以降に引き続き実施を目録んでいる「レクリエーションキャンプ場に関する政策研究」に、各位のご意見を反映させて載きたく、ここに発表に及ぶ次第である。

調査対象と調査内容

現在、全国のキャンプ場の実数、所在地等については、その全体が把握されているわけではない。しかし、（社）日本観光協会が刊行している「全国観光情報ファイル」には、「管理者が明確で、管理舎・給水施設・じんあい処理場・テントサイド施設をもつキャンプ場」が、市町村単位に掲載されていて（昭和53年版、合計2,020カ所）、データーソースとして信頼度が高いことから、これを基本とし、（社）日本オート・キャンプ協会が把握しているもの等によって補正しながら、できるだけ"全数調査"に近づけるよう努力した。

初回（昭和53年8月10日）の調査要発送

数は2,３００通余り、催（督）促、原案もれ追加等を含め、総発送数は2,６３１通である。上に示した基準に合わない、例えばキャンプ指定地であるとか、ボランタリーなかたちでキャンピング利用がなされている場所等をあわせれば、全国で2,５００か所近くに及ぶのではなかろうか。種別分類による野外活動ないしレクリエーション施設のなかで、最も多いカ所数となっている（2位は水泳場）。

調査は、調査票を各キャンプ場に郵送して、管理責任者に記入を依頼し、回収するていう方法をとり、さらにこの得られた資料を、ユーザーである日本オート・キャンプ協会会員達の現地認識等によって確認・修正を行うこととした。

調査内容は、大きく(1)キャンプ場の概要、(2)立地・環境、(3)施設、(4)テント・サイト、(5)管理・運営・サービス、(6)営業収支、(7)問題点と対策、の７項目にわかれ、記入項目の合計は80項目余、Ａ４版１１頁の調査票となった。同年１０月２６日の最終〆切の段階で８１７通が回収され、集計分析に当っては、母集団を2,000としたが、この種調査としては、まずまずの信頼度が得られたものと考えている。

集計されたデータは、一定の地域区分によって分類した上でコンピューター処理を行った。そのうち、会員各位が特に関心を寄せられるであろう部分について、次節以下に示したい。なお、本調査の過程・結果等からみて、この種調査を今後行うに当って留意すべき点を、反省を交えて指摘すれば次のとおりである。

(1)プレテストによるモデル設問を試みた上で、全数調査を行うべきである。

(2)特に、収容力とか入場者数といった、全体の総量を算出する場合には、規模の大型のものについて重点的にこれを行わないと、統計的に高い信頼度を得難い。

(3)経営面、特に職員数であるとか収支といった事柄については、ヒアリング、面接などの手段を併用しないと、使用にたえる資料は得られない。

調査結果

全国1,１４３の市町村に、キャンプ場はほぼ万遍なく設置されており、その大部分が戦後の開設である。戦前からのものは1.３％にすぎず、昭和３５年以降の開設が８０％（４０年～４９年の１０年間に開設されたものは全体の４9.7％）を占める。青少年旅行村、国民休暇村といった複合体施設の一部として設けられているものが、全体の３6.1％。他は単体の施設である。

土地は、国・公有が６9.2％（市町村有地が４０％）。施設は国・公有が６8.2％（公有６1.6％）。国・県・市町村を管理主体とするものが６2.9％を占めるが、実際の管理は地元団体に委託しているものが多く、その種類は極めて多様かつ細分化されており、また零細なものが多い。

利用者層については、かなり明確に把握されている〔家族／青少年（学生・生徒）／青壮年（職業人）の利用が中心となっているもの、それぞれ１2.4％／７1.1％／１4.3％〕のに対し、団体・グループ・仲間・家族等といった利用形態については、適確な把握がなされていない。利用目的からみて、「教育キャンプ場」であるとしたもの３0.2％、「レクリエーションキャンプ場」としたもの６0.7％、「その他（登山等）8.2％という結果が出て、図らずも二極分化の実態が示されている。但し、このレクリエーションキャンプ場のなかには、実際には教育／団体／組織キャンプ活動が行われている〝未分化〟のものが多く含まれているものと思われる。

キャンプ場の自然環境は、わが国の地域性の多様さを反映して、極めて多彩（海岸>山麗>湖畔>高原>渓谷>山岳地>河畔>丘陵>草原>沼畔）であり、そのテントサイトは「林間の平担な草地で、のびのびとして見晴らしよく、明るい」すぐれた環境にある。

敷地面積の平均は2.5 ha、全国キャンプ場のそれを合せると、（練馬区）<5,000 ha>（世田谷区）となる。しかし、1ha以下のものが半数以上を占め、南関東・山梨・静岡等に特に小型のものが多い。宿泊収容力の平均は428人であるが、200人以下が全体の60％を占め、小規模なものの多いことがわかる。

1人当りの敷地面積は、教育キャンプが96.1㎡と、かなりゆとりがあり、レクリエーションキャンプが45.4㎡、その他（登山等）36.3㎡の順となっている。レクリェーションキャンプ場では、マイカー利用率が61％のものは79％に達しており、北海道・南九州・長野・北関東等に高いものが多く、鉄道網の発達する近畿・南関東に低率のものが多いなど、その地域差は著しい。

施設・設備の内容に関しては、かなり詳細にわたって項目だてを行ったが、以下にその概略の結果を示す。

水道の普及率は56.1％で、自然水利用が39.7％もあり、水洗便所はわずかに11.6％で、いずれも地域差が大きい。ごみ処理はかなり入念に行われている。棚を設けているものは18.1％、シャワー・浴室の有無も地域差が大きい。教育キャンプ場の施設水準は、一般的にかなり高いのに対し、レクリェーションキャンプ場では、その格差が著しい。

テントサイトを全くもたない“キャンプ場”が15.2％に及んでおり、これらを含めて、わが国にはケビン・バンガロー・ロッジ等の固定宿泊施設を備えたキャンプ場の多いことが示されている。テントサイトと、この種施設の比率（収容力）は6.5 : 3.5である。これは、わが国にみる特有のキャンプ場形態といえるのではなかろうか。このような形をとるに至った、環境的・歴史的な背景を研究してみる必要があるだろう。

滞在してできるレクリェーション活動のベストファイブは、教育キャンプ場では①自然観察②ハイキング③山菜採り④オリエンテーリング⑤登山、レクリェーションキャンプ場では①②は同じで、③が釣、④山菜採り、⑤登山という順になっている。次いで、バレーボール、水泳、歴史探索、ボート、サイクリング等がくる。

職員（管理人、指導者）配置について詳細な設問を行ったが、不明の解答が多く、十分な結果が得られなかった。郵送回収方式の限界ともみられよう。教育キャンプ場に、全体として職員配置密度の高いことがうかがわれたが、一般に経営規模が小さく、開設期間が夏期に限定されていて、十全のサービス態勢がとられているとはいい難い。しかし、救急医療対策は何らかのかたちでとられており、マナー指導、ごみ持ち帰り指導についても、努力している様子がうかがわれた。

通年営業を行っているキャンプ場は20.1％にすぎず、半数以上が7月オープン、半数近くが8月中にクローズという結果になっている。その他（登山など）のキャンプ場は比較的営業期間が長い。しかし、シーズンをはずれても「管理人は不在であるが施設の利用は可能」とするものがかなり多くみられ、キャンパーサイドからの「キャンプ場の年間通年利用」の要請への対応がみられる。

昭和52年における全国キャンプ場利用者の推計は1,500万人／日という数字が示された

が、一方で、特にレクリェーションキャンプ場のなかに「つくりはしたが、さっぱり利用者が来てくれない」ものがかなりあり、個々のキャンプ場ごとの格差が著しい。立地条件であるとか施設内容、経営努力等に左右される面が大きいようである。

宿泊部門別の入場者構成比は、持込テント41.2％、備付テント27.3％、バンガロー・ケビン14.1％、ロッジ2.4％、キャンピングカー0.7％となっており、キャンピングカーの利用は山梨・静岡・東北等に多い。教育キャンプに、備付テントの利用（44.5％）が多く、レクリェーションキャンプに持込テント（45.4％）、バンガロー・ケビン（17.4％）が多い。

いわゆるフリーキャンプ場（指定地）の名残りか、テントスペースの使用料をとらないキャンプ場が52.1％もあり、料金をとって、きちっと管理される、合理化された近代的キャンプ場が少いという事実を裏づけている。また料金面で、キャンプ場ごと、また地域ごとの格差が著しく、「施設内容（基準）に対応した合理的な料金体系」の確立が、経営者サイド、またユーザーサイドの双方から要請されているといえるだろう。

テント、寝具、食器を貸与しているキャンプ場は全体の半数以上を占めるが、炊事用具、コンロ、ボート、自転車などはその比率が低い。年度別の収支については不明としたもの多く、有意の結果を得るに至らなかった。

何らかのかたちで、施設面の拡大・充実の意向をもつキャンプ場は60％に及ぶが、質的向上を望むものの方が、施設の種類や量をふやしたいとするものよりも多い。特に、基盤施設としての給・排水などサニタリー関係の整備志向がつよい。

キャンプ場の方向づけについては、「青少年の健全育成の場」をめざすものと、「ファミリー向け、誰でも利用できるレクリェーション・憩いの場」を志向するものとの、二極分化の傾向がみられ、なかには同一敷地を二つに区分して利用したいとする意向のものもみられた。

国・県など行政への要望・期待は多岐にわたっているが、特に、基盤施設への助成、清掃費への助成、指導員配置への助成を求める声がつよかった。

論　議

以上、わが国におけるキャンプ場の実態とその問題点等が略明らかにされたわけであるが、ここでは特に、教育キャンプ場とレクリェーションキャンプ場の二極分化、そして授者の未分化の問題にしぼって論議を加えたいと思う。

わが国のキャンプ活動、ひいてはその容器・場としてのキャンプ場が、ボーイスカウト、YMCAその他学校・地域・職域団体による教育キャンプを主流として発展してきたことは周知の事実であるが、また近代スポーツのひとつでする登山等に伴うキャンプも、戦前・戦後を通じての登山等の隆盛に伴って発達した。

上の二つの方向とは別種の、よりボランタリーな、家族、仲間、隣人達といった小グループ単位によるキャンプは、わが国においても早くから一部の有識の人々による“価値ある、すぐれた”生活様式のひとつとして認識され、実践されてきた。文献−1は、これを旅行推進の立場から、その普及を図る意図で刊行されたものとみていい。

富の裏付けをもって、これが大衆のものとなり、そのうけ皿としてつくられたキャンプ場の理想的な典型が、アメリカ合衆国の国立公園におけるキャンプ場であった。わが国においても、戦后、文献−①等によるキャンプ場施設の設計

図等を参考として、自然公園のなかに、「一般に公開され、誰でも自由に利用できる公共のキャンプ場」が設けられるようになった。

ところが、“意識”と“様式”の開発が伴わず、“富”の裏付けのないままに施設開発が先行した結果、民間経営による「安直に泊れる施設としてのキャンプ場ーバンガロー村(犬小屋バンガロー)」であるとか、海岸・湖畔・渓谷等におけるボランタリーな、いわゆるフリーテントキャンプに移行して、若者達の間に人気をあつめ、「無軌道キャンプ」として世のひんしゅくを買うという一時期をもたらした。その後遺症は現在に及んでおり、キャンプ禁止条例等の措置をとっている公共団体も少くない。

しかし、キャンプそのものを、教育とか訓練といった特別な目的意図のもとにおかずに「生活の一部」としてエンジョイしようという、いわゆるレジャー/レクリエーションキャンプは、社会・経済の安定と生活意識、生活様式の変化、さらにテントや寝具、炊事・照明器などさまざまなキャンプ用品の開発、そして何よりもモータリゼーションの普及によって、この10年程の間に新らしく登場したキャンピングの分野であるといっていい。

このレクリエーションキャンプ(教育キャンプ等に対する)は、家族を中心に楽しむところに本質的な意味のあるところから「ファミリーキャンプ」とよばれる場合もあるが、ヨーロッパでは「2億人のレジャー」といわれ、アメリカでは「キャンプ場には、アメリカを代表する健全な家族が集まっている」といわれており、いずれも自動車利用による盛大なファミリーキャンプの状況が伝えられている。

巻末に掲げたキャンプ場に関する調査・研究文献目録は、以上に示したような、わが国におけるキャンプ「場」の歴史的な発展過程をさぐるについて、有益とおもわれる。現在の時点におけるキャンプ場の実態をふまえ、こうした発展過程を十分認識したうえで、わが国におけるキャンプ場整備の将来方向が構想されなければなるまい。

別表ーキャンプ場の分類表(試案)は、多くの論議が生まれることを期待した上で、作成したものである。カ所数に関しては現状の2,000カ所を基準としているが、これをどの程度にまで増やしてゆくべきかについて、論議がなされていいし、現在あるものの内容・水準をどの程度にまで高めるべきかについても、夫々の立場から提案がなされるべきであろう。(外国における概数:イギリス3,000カ所、フランス4,000カ所、アメリカ・カナダ9,000カ所といった数字が知られている。)

教育キャンプ場/登山・スポーツキャンプ場は、それぞれの目的に応じて、その施設内容・運営内容が検討されていい。特に、前者については、YMCA、ボーイスカウト連盟等によって、それぞれの基準が示されていて、今回の調査においても、その水準は比較的高いことが明らかとなっている。

問題は、レクリェーションキャンプ場の部門である。調査の結果をみても、施設内容、運営管理の面で、多くの課題をかかえていることが示されている。その大きな要因のひとつとして、性格のあいまいさをあげることができるだろう。ニーヅの多様化に対応して、それぞれのキャンプ場の個性化を図ってゆく必要があるというべきであろう。

ひとつは、若者達(組織されていない)向けの方向が考えられよう。「運動・体育」に特化したものがあっていいし、おもいきり「音楽」をたのしめるキャンプ場とか、「文化・趣味・教養」的なサークル活動に適したキャンプ場が

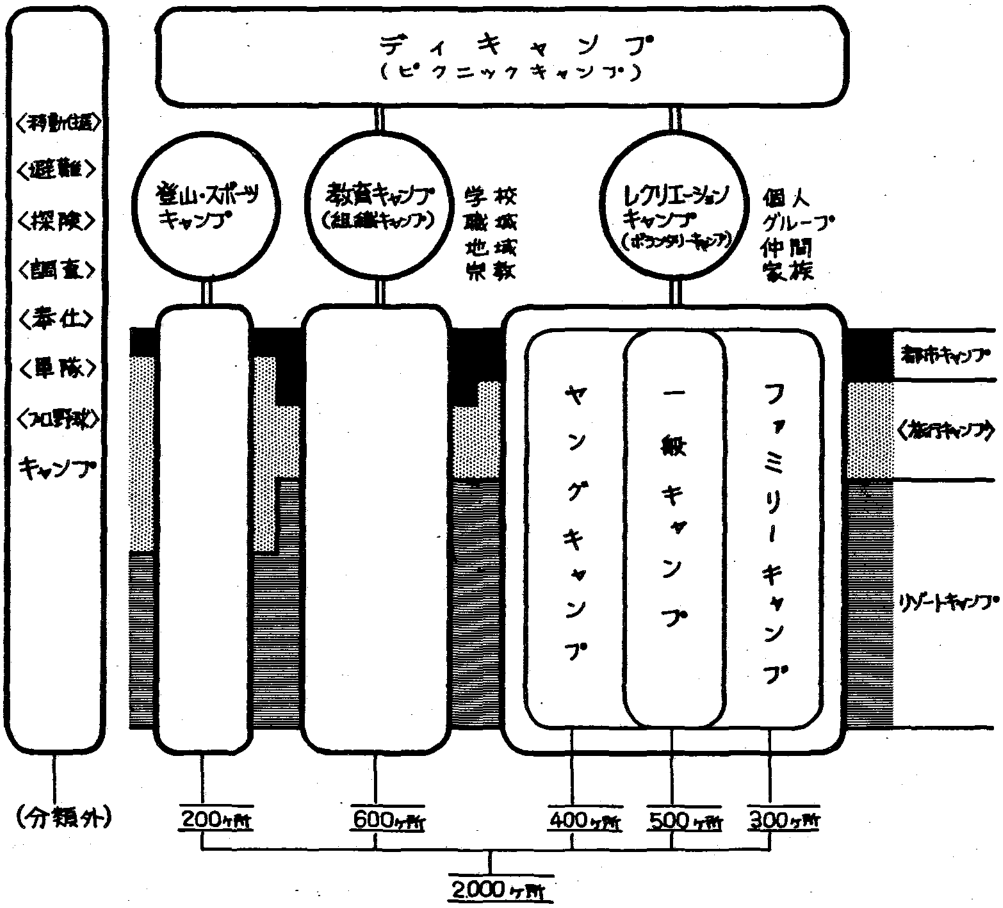
あっていいだろう。いわば「ヤングキャンプ場」である。この場合、教養にあふれた、父性的な強力な個性とリーダーシップをもった指導者の存在が、むしろ若者達から好評をうけることになるだろう。ユース・ホステルのペアレンツをイメージしておきたい。さきの歴史的発展過程における「無軌道キャンプ」に一定のタガをはめたものとみてよい。このキャンプ場は、オートバイ利用大歓迎である。

一方、ヤングキャンプの対極として、「ファミリーキャンプ場」が考えられよう。このキャンプ場では、不測の侵入者を防止する外柵であるとか、キャンプ生活の安全を保障するパトロールサービスが人気をよぶであろうし、清潔な水洗便所、男女別の湯沸式のシャワールームであるとか、豊かな自然環境や、各種のコミュニケーション機会の提供がよろこばれ、母性的な、ソフトなキメの細かい管理運営者の存在が、圧倒的な支持をうけることになるであろう。

両者の中間に「一般キャンプ場」が残るわけで、現在のレクリエーションキャンプ場の大部分がこの形態として存在しているのであるが、之等についても、何らかのかたちでの“個性化”の方向がとられるべきであろう。

一方、（社）日本オート・キャンプ協会の実施したキャンプ大会の参加者に対して行った

キャンプ場の分類表（試案）



アンケート調査（7807）によると、キャンプによるロングツアー、仲間をふやして一緒にキャンプ旅行をといった回答が目立ち、ツアーキャンプへの要求の強いことが示された。この<旅行キャンプ>の概念は、すべてのキャンプに共通して適用されるものであるし、施設・場としての対応も考慮されなければなるまい。

また、この両三年、外国人の国内旅行者達から、都市内でのキャンプの要請が多くみられたり、また都市住民の間で、都市公園のなかでキャンプをさせてほしいという要望が多く出されている。さらに、デイ（ピクニック）キャンプへのニーヅは、日を追って高まっており、こうしたキャンプ場へのニーヅがますます多様化していくなかで、キャンプ場の将来構想が検討される必要があるのではなかろうか。

—以上—

キャンプ場に関する調査・研究文献目録

年代順（「　」は単行本ないし報告書）

1. 鉄道省：「キャンピングの仕方と其場所」：実業の日本社、日本旅行文化協会刊 '26（大正15年）
2. 小坂立夫：キャンプ場の計画：造園研究 12：'35
3. 浅田孝、大谷幸夫ほか：山中湖キャンプ場計画：国際建築 Vol。19 №12：'52
4. 塩田敏志：「キャンプ場施設」：'53：全日本観光連盟刊
5. 塩田敏志：野営場の計画と施設：国立公園 53／54：'54
6. 斉藤義郎：野営場管理の実際：同上
7. 塩田敏志：キャンプ・サイト（設定の条件と施設）：体育の科学 V・6：'55
8. 石井弘ほか：気候要素よりみたる野営場計画：観光研究 47：'57
9. 児玉武彦：上高地キャンプ場の利用実態について：第8回観光事業研究論文集：'60
10. 石井弘ほか：キャンプ場の気象学的検討：造園雑誌 XXV・2：'61
11. 関口鍈太郎編：「造園技術」（8章：自然公園）：'61 REV '68：養覧堂刊
12. 厚生省国立公園部：「野営場施設」（自然公園施設シリーズ4）：'62：国立公園協会刊
13. 日本観光協会：「観光施設の手引」'62：編者刊
14. 塩田敏志：ケビン：観光研究68：62
15. 塩田敏志：集団野外活動の施設について：体育の科学 XII・6：'65
16. 桜沢満寿：野営場の計画：観光10：'66
17. ボーイスカウト日本連盟：「野営基準」：'66 REV '72：編者刊
18. 酒井哲雄、橋本憲之：「キャンピング」：'66：日本YMCA同盟出版部
19. 日本サイクリング協会：「サイクルキャンピング」：'66：編者刊
20. 豊川洋ほか：自動車旅行時代とオート・キャンピング：観光 15：'67
21. 中野満：オート・キャンピング／ヨーロッパの現状と日本での見透し：観光16；'67
22. 石井弘：「体系農業百科辞典 VII 造園（キャンプ場）」：'67：農政調査委員会刊
23. 日本オート・キャンプ協会：「オート・キャンプ」：'68：編者刊
24. 編集部：自動車旅行の休泊施設／オート・キャンプ場：観光 26：'69
25. 菅きよし：アメリカのオート・キャンプ場：観光 27：'69
26. 日本キャンプ協会、常藤恒良：キャンプ場スタンダードへの模索―キャンプ場の基準：レクリエーション 07：'69

27. 日本エコノミストセンター：「レジャー産業経営実例研究資料1969年版」：'69 編者刊
28. 日本オート・キャンプ協会：「オート・キャンプ場の作り方」：'70：編者刊
29. 日本観光協会：「観光開発計画の手法」（キャンプ場）」：'70：編者刊
30. 日本観光協会訳編：「アメリカの野外レクリェーション空間基準」：'70：訳編者刊
31. 編集部：ほんもののキャンプ場を求めて：レクリェーション 07：'70
32. 今村義照：西欧のオートキャンプ場の経営実態：レジャー産業 03：'71
33. 長谷川純三：米国オートキャンプの実情：同上
34. 塩田敏志：「体育施設全書第10巻野外活動施設」：'71：日本体育施設協会刊
35. GKインダストリアルデザイン研究所：キャンピングトレーラーとキャンピングスペース：建築生産 11：'71
36. 特集：大阪府総合青少年野外活動センター：新建築 04：'72
37. 日本観光協会：「観光レクリェーション施設の計画No.1（キャンプ場）」'73：編者刊
38. 余暇開発センター：「オートキャンプ・システムの開発研究」：'74：機械振興協会経済研究所
39. 日本観光開発財団：「オートキャンプに関する調査」：'75：著者刊
40. 日本観光協会：「観光計画の手法（キャンプ場）」：'76：編者刊

○尚、上記文献中に、参考文献として引用されている外国（U.S.A.）文献は次の通りである。

① Good,A.H.:Park and Recreation Structures: '38:Natinal Park Service of U.S.A.
② Natinal Conference on State Parks : Park Practice Design : '61:ib.ed.
③ ib.: Park Practice Guidline : ib.ed.
④ Salomon,J.H.: Camp Site Davelopment : '48 REV.'59:Girl Scouts of U.S.A.
⑤ Boy Scouts of America: Campsites and Facilities:'61:ib.ed.
⑥ American Camping Association: Conservation of the Campsite: '60:ib.ed.
⑦ Rombold,C.C.:Guidelines for Campground Development (*Managément Aids No.* 34) : '64: American Institute of Park Executives
⑧ Burch,Jr.,W.R. and Wenger,Jr., W.D.:The Social Characteristics of Participants in Three Styles of Family Camping:'67 :'67 : Forest Service of U.S.A.
⑨ Department of the Interior, Bureau of Outdoor Recreation : Outdoor Recreation Space Standards : '67 : id.ed.
（これは文献－29として訳出されている）

Journal

of

Leisure and Recreation Studies

Contents

A STUDY ON THE RELATIONSHIP BETWEEN LEISURE ACTIVIES AND PSYCHOGCAL TRAITS
- in the case of trainees in vocational training centers 73

Shinya Tsukamoto (The Institute of Vocational training)
Nasuo Oda (")
Goichi Matsubara (")
Tetsuo Teramitsu (Training Institute for Working Youth Leaders)
Setsuyoshi Taguchi (Kinki University)

A Study of the Social Factors for Recreation Participant...75

Kengo Fujiwara (Chukyo University)

Studies on the planning and Administration of Recreation Activity
- From Practical Gvidance to the Jvvenile Jamboree in Aso DistRict 78

Yosinori Akiyosi (Fukuoka University of Education)

Free Time and Physical Recreation in U.S.S.R.

Zenichi Terashima (Meiji University) 79

A Study on variation of heart rate in Indiaca game 80

Minoru Wada (Tokuyama Technical College)

Research on the condition of the campgrounds and sites in Japan 89

A Study on the Relationship Between Leisure Activities and Psychological Traits

- in the case of trainees in vocational training centers -

Shinya Tsukamoto*

Nasuo Oda*

Goichi Matsubara*

Tetsuo Teramitsu**

Setsuyoshi Taguchi***

The purpose of this study is to difine the relationship between leisure activities and level of independency through the medium of recreation activities. Recreation activities have been diffused extensively with the motto which is often advocated, "anytime, anywhere, anyone". However, a matter of more importance is "to have a mind to do", i.e., the independency as psychological primary factor is indispensable to recreation activities. Leisure activities questionnaire and Diagnostic Test of Independence (DTI) were used as a method of this study.

Summary

1. On the whole, leisure activities of trainees showed marked trends toward a rest, in spite of weekday or holiday.
2. Independency of trainees generally indicated low level.

3. As for the trainees with higher level of independency than those with low one, their leisure activities trended remarkably toward such recreation activities as one of sport activities. On the other side, it's clearly recognized that the trainees with low level of independency played such negative activities as watching TV., and this trend lacks autonomy.

* The Institute Of Vocational Training ** Training Institute For Working Youth Leaders *** Kinki University

A Study of the Social Factors for the Recreation Participant

Kengo Fujiwara
(Chukyo University)

In this monograph, the present author examined the social factors for the recreation participant in the field of the sociology of family, and it's background considered. Some findings were as follows.

(1) The family of orientation and the recreation participant

First, in the general process analysis of socialization in the family of orientation, next three points were found: (a) the family, one child to two children, had a desire for reading, and the family, more than three children, had a desire for sport; (b) there was no significant difference between mothers working outside the home and the recreation participant; (c) also, there was no significant difference between the borned place and population scale and the recreation participant.

Next, the analysis of the reward-cost factor in the family of orientation showed next two points: (a) sport activity as a recreation had shown to exist between childhood recreational activities and adult activities. This was because recreation was an activity associated with pleasant rewards the datum of pleasant childhood memories; (b) there was significant defference between pleasant

childhood memories and recreation hour, that is to say, the persons who had more pleasant childhood memories showed a tendency to have more hours for recreation.

(2) The family of procreation and the recreation participant

First, socioeconomic factors affected the aspects of recreational choice. That is to say, socioeconomic variables showed a tendency to govern the range of possible activities. Also, there was indication that the younger took more active recreational choice than the older. However, there was no significant difference between age and recreation hour. And, sport had high reward respectively in the family, two to four children.

Next, one of the most important aspects of family recreation is related to the decision-making process in each family. In the analysis the relationship between decision-making factors and recreation participant, next three points were found: (a) there was fairly non-agreement for the decision-making of family recreation. Husband was a decision-maker in general, but wife could not ignored as a decision-maker. This means that the type of decision-making for the family recreation was based on consensual decision type, but acconodative decision type also was showned. Even though de facto decision type was showned, initiative for it was in the hands of husband in most cases;

(b) the analysis of role-desire for family recreation showned that husband developed a tendency to have more role-desire, but also wife showed it; (c) the analysis of the attitude for role performance of family recreation showed that the degree of importance for family recreation was not so high, but most participants were satisfied with it. But they were not satisfied with family recreation hour. This is one of the problems in family recreation.

Studies on the Planning and Administration of Recreation Activity

- From Practical Gvidance to the Jvvenile Jamboree in Aso District

Yosinori Akiyosi
Fukuoka University of Education

The recreation activity of "Aso Juvenile Jamboree" was planned and practically guided. Results obtained were following.

1) Eighty-five percent of children who took part in were satisfied with contents of the planning in summer and winter, 1978 and in summer, 1979. They understood the significance of participation.

2) Programs varied with each plan and those favorite for children were "Kimodameshi" and telling gohst stories, and followed by adventure climbing, campfire, light sport, Randmaking, swiming cooking outdoors and so forth.

3) Sternness, friendship and enjoyment were aimed for guide every time and children acted well on them.

4) The activity was successed in by favorable environment in Aso and contexts of programs, regardless of short periods over four nights.

Free Time and Pysical Recreation in U.S.S.R.

Zenichi Terashima

Study of spent of time badugets is now to investigate quarity of life.

The index is the method and the quarity of spent of free time, and the length of the time. Spent of free time is ought to be used culturaly and creatively in U.S.S.R.

Now in Soviet Union, free time is made 1500 ~ 1900 hours per year owing to the introduction of Five days working system.

Physical recreation in free time is more and more important.

Many labours actively join physical education and sports. And the goverment encourages this in U.S. S.R. to develop the physical culture of labours and to strengthen the health. The further theme is equipment of social enviroment and repletion of sports organizations the joining sports. This is the important factor of active and creative usage of free time.

A study on variation of heart rate in Indiaca game.

by

Minoru WADA*

Six housewives aged 33 to 43 living in Kudamatsu-shi and Tokuyama-shi, Yamaguchi Prefecture are studied here.
The heart rates (or heart beat count) of these women are measured while they are playing ' Indiaca ' and at the same time their exercise intensity is examined in terms of the function of circulation.

Following results are obtained from the study.

1. The length of the match tends to be longer according to the year of experience in the game.
2. The average heart rates during the match are 152.2 - 187.2 h/m, but those who have longer experience show the larger rate.
3. The average heartbeat count after every set of match, tends to increase as the set of match adds to, irrespective of their experience.

The heart rates during playing ' Indiaca ' is nearly the same as those of ' Badminton ' and ' Esci tennis ', and they tend to be higher than those in volleyball matches.

Tokuyama Technical College*

RESEARCH ON THE CONDITION OF THE CAMPGROUNDS AND SITES IN JAPAN

(Summary)

This research is based on the answeres obtained to the questionaires given to 2,000 campgrounds and sites all over Japan from August until the end of October in 1978. 817 valid answeres were received. The number of the questions in the questionaire was over 80; on location, environment, facility, management, problems and countermeasures, etc.

Japanese campgrounds and sites are roughly classified into three — Climbing and other Sports Camp (10%), Organized Educational Camp(30%), and Recreation Camp (60%). Of the whole grounds, 69.2% is public; and so is 68.2% of the whole facility.

The functional nature of the recreation camps is still ambiguous and not clearly defined yet. Therefore, in the future, they should be devided into two types, one for the young people, and the other for the families. It should be encouraged for each to have its own characteristics.

by Junichiro Maëno
Director, Japan Autocamping Federation

日本レクリエーション学会会則

＜第1章　総　　則＞

第１条　本会を日本レクリエーション学会、（英語名Japan Society of Leisure and Recreation Studies）という。

第２条　本会の目的は、レクリエーションに関する調査研究を促進し、レクリエーションの発展に寄与する。

第３条　本会の事務局は、東海大学体育学部社会体育学科レクリエーション研究室内に置く。

＜第2章　事　　業＞

第４条　本会は第２条の目的を達成するため、次の事業を行なう。

1. 学会大会の開催
2. 研究会、講演会等の開催
3. 機関誌の発行ならびにその他の情報活動
4. 研究の助成
5. 内外の諸団体との連絡と情報の交換
6. 会員相互の親睦
7. その他本会の目的に資する事業

第５条　学会大会は、毎年１回以上開催し、研究成果を発表する。

＜第3章　会　　員＞

第６条　本会は正会員の他、学生会員、特別会員、賛助会員、および名誉会員を置くことができる。

1. 正会員は第２条の目的に賛同し、正会員の推薦および、理事会の承認を経て、規定の入会金および会費を納入した者とする。
2. 学生会員は、大学生（大学院を除く）、およびそれに準ずる者とする。
3. 特別会員は、本会の目的に賛同する外地在住者とする。
4. 賛助会員は、本会の事業に財政的援助をなした者で、理事会の承認を得た者とする。
5. 名誉会員は、本会に特別に貢献のあった者で、理事会の推薦を経て総会で承認された者とする。

第７条　会員は、本会の編集刊行する機関誌（紙）等の配布を受け、本会の営む事業に参加することができる。

第８条　会員にして会費の納入を怠った者および会の名誉を棄損した者は、理事会の議を経て会員としての資格を停止されることがある。

＜第4章　役　　員＞

第９条　本会を運営するために、総会において正会員の中から次の役員を選ぶ。

会長１名、副会長若干名、理事長１名、理事若干名、監事２名

第１０条　会長は、本会を代表し、会務を総括する。

副会長は、会長を補佐し、会長に事故がある時、これを代行する。

理事長は、理事会を総括し、理事は会務を執行する。

監事は、事務局と理事会の運営を監査する。

第１１条　役員の任期は２年とし、再任を妨げない。

第１２条　本会に名誉会長を置くことができる。

＜第5章　会　　議＞

第１３条　本会の会議は、総会および理事会とする。

第１４条　通常総会は、毎年１回開催し役員の選出および本会の運営に関する重要事項を審議決定する。

総会は、会長が招集し、当日の出席正会員をもって構成する。

議事の運営に関しては別にこれを定める。

第１５条　理事会が必要と認めた場合、もしくは正会員の1/3以上の開催請求があった場合、臨時総会を開くことができる。

第１６条　理事会は理事長が招集し、幹事若干名および事務局員を選出し、会務を処理する。

<第６章　支部および専門分科会>

第１７条　本会の事業を推進するために、支部ならびに専門分科会を置くことができる。

支部ならびに専門分科会についての規則は別に定める。

<第７章　会　　計>

第１８条　本会の経費は、会費、寄付金およびその他の収入をもって支弁する。

第１９条　会員の会費は次の通りとする。

1.	入 会 金	1,000円（３米ドル）	
2.	正 会 員	年額	3,000円
3.	学生会員	〃	1,000円
4.	特別会員	〃	10米ドル
5.	賛助会員	〃	20,000円以上

第２０条　本会の会計年度は毎年４月に始まり、翌年３月に終る。

付　　則

1. 本会の会則は、総会において出席正会員の2/3 以上を得た議決により変更することができる。
2. 本会則は、昭和４６年３月２１日より施行する。
3. 本会則は、昭和５１年５月１日に一部改訂する。

「レクリエーション研究」投稿規定

1. 投稿者は原則として本会会員であること。
2. 論文は他誌に未投稿のものに限る。
3. 論文は新かなづかい、制限漢字使用を原則とし、横書き400字詰原稿用紙を使用する。欧文はタイプライターによるか、または特に明瞭にかく。
4. 論文はカシラに論文・資料・その他(書評・抄録・学校紹介等)を朱書する。
5. 論文・資料の原稿にはかならず欧文の表題・ローマ字書きフルネームの氏名および図版・写真の欧文説明をつける。
6. 邦文論文には欧文摘要(Resume)をつけ、欧文論文には和文の表題・氏名および800字以内の邦文摘要をつけること。
7. 図版はかならず白紙に墨書きとし、図版・写真類は上下の別を明記のこと。
8. 論文の原稿には第1頁下端に勤務先(職名)を記すこと。
9. 論文は1篇につき400字詰にて30枚分(図版・写真共、刷り上り8頁)以内を原則とする。その他の原稿は5枚以内とする。若し長篇のもので上記規定を超えるものについては、投稿に先立ち編集委員会宛打合せのこと。なお刷り上り5頁以上の超過分は実費にて執筆者持ちとする。
10. 編集委員会は編集の都合により、執筆者の承諾を得て、原稿の一部を省略訂正することができる。
11. 論文の取捨は編集委員会に一任のこと。
12. 投稿期限　第8号　原稿〆切日　昭和56年3月末日(予定)
13. 論文の送り先及び連絡先　神奈川県平塚市北金目1117
東海大学体育学部　社会体育学科
レクリエーション研究室気付
日本レクリエーション学会編集部

発刊が遅れ、会員の皆様には大変御迷惑をおかけしましたことを深くお詫びします。

第8号には多くの方々の投稿をお待ちしております。

◇ 編集委員

高橋　和敏　巻　正平
木下　静子　前野淳一郎
(担当幹事)　野間口英敏

レクリエーション研究　第7号

昭和55年3月25日　発行

編集発行人　江橋　慎四郎
発行所　日本レクリエーション学会
神奈川県平塚市北金目1117
東海大学体育学部
社会体育学科
レクリエーション研究室内
電話　0463-58-1211
内線　456
印刷　日相印刷工業有限会社

JOURNAL
OF
Leisure and Recreation Studies

No.7

* A STUDY ON THE RELATIONSHIP BETWEEN LEISURE ACTIVITIES AND PSYCHOLOGAL TRAITS
  - in the case of trainees in vocational training centers -
* A Study of the Social Factors for the Recreation Participant
* Studies on the Planning and Administration of Recreation Activity
  - From Practical Gvidance to the Jvvenile Jamboree in Aso DistRict -
* Free Time and Physical Recreation in U.S.S.R.
* A study on variation of heart rate in Indiaca game

Japan Society of
Leisure and Recreation Studies

MARCH 1980